山嶽寮

甲南山岳会通信第６７号　　２０１２年１０月

甲南山岳部・甲南山岳会

山嶽寮　甲南山岳会通信 67号 目　次　2012年10月

○追　悼

伊藤文三君の霊に捧ぐ　福井　實 …… 1

文三先輩を偲んで　廣瀬健三 …… 3

故伊藤文三氏の寄稿目録 …… 5

柏木宏文様の思い出集　藤安賢一・平井吉夫・廣瀬健三・牧野　宏・安井　正・森本全彦 …… 6

柏木宏文様追悼文「国鉄（JR）西組」　村上與利一 …… 10

随想と美田さんへの追悼「二俣と二つの山」　芦田匡平 …… 12

○山　行

光岳・リンチョウ沢　山本恵昭 …… 15

マレーシアの旅　キナバル登山　山本恵昭 …… 19

赤石沢から赤石岳　山本恵昭 …… 27

○山　行（掲示板から）

富士山　山本恵昭・大森雅宏 …… 31

大猫山～猫又山　山本恵昭 …… 34

恵那山　山行き　井上知三 …… 35

富士西麓の山ふたつ－烏帽子岳　長者ヶ岳　越田和男 …… 36

コルチナ・ダンペッツォ　田辺　潤・飯田　進 …… 37

西上州の山ふたつ－物語山　三ッ岩岳　越田和男 …… 39

扇の山　山スキー　山本恵昭 …… 40

奥三方岳　山本恵昭 …… 41

久しぶりの山－大雪山　福田信三 …… 42

上信国境・浅間隠山　越田和男 …… 43

ポンポン山　塩崎将美 …… 44

氷ノ山横行渓谷源流　山本恵昭 …… 45

東丹沢の低山ふたつ　越田和男 …… 45

京山、西山（JACゆるやか山行）　廣瀬健三 …… 46

○紀　　行
パキスタン北部フンザ渓谷に出現したアッタバード湖について　佐野方則　……　47
エチオピア再訪　南里章二　……　50
山岳鉄道乗車の記　越田和男　……　52
2012年度　九州クルージング　柏　敏明　……　67

○論　　考
単独行　転落　極限行を考える　雨宮宏光　……　80

○随　　想
趣味は何時までも変わりなし　鈴木頼政　……　91
フリークライミング運動の始祖　パウル・プロイス　平井吉夫　……　93
三方崩山　脱線記　大森雅宏　……　100

○会員短信
秋の総会　出欠はがきの近況欄　……　103
春の総会　出欠はがきの近況欄　……　110

○報　　告
＊秋の集会　木曽福島　……　116
＊春の総会　……　118
＊慰霊祭　……　122

○編集後記　……　123

― 追 悼 ―

伊藤文三君の霊に捧ぐ

福井　實（昭和17年旧制理）

２月に越田君から電話をもらい、伊藤文三君（ノンキ）の訃報を聞いた。甲南山岳会の旧制高校出身者は既に数名になっていたが、そのうち、関東在住者はノンキと二人になってしまった。その彼も体調不良とのことで、ここ３～４年は、毎年春に海老名で開かれている「大関邸の花見会」に顔を見せなくなった。しかし、年に１－２回は電話で連絡を取っていた。僕も九十歳を超え、すっかり物忘れがひどくなったが、亡きノンキを偲ぶうちに、次から次へと昔のことが断片的に蘇ってきた。地名、人名などなかなか思いだせず、記憶違いもたくさんあるし、文章を書くのは大の苦手ではあるが、ノンキを追悼しつつ、思い出を認(したた)めたい。

ノンキは、昭和８年に七年制の甲南高等学校尋常科に入学し、そろって山岳部に入った。同期の仲間は鷲尾・多田・宇尾・山岡・上田・・だった。彼は、新一、収二の二人の兄さんに続いて、山岳部一途の、人一倍こつこつやる温厚な、地味だが確実な実行力のある男として信頼が厚かった。

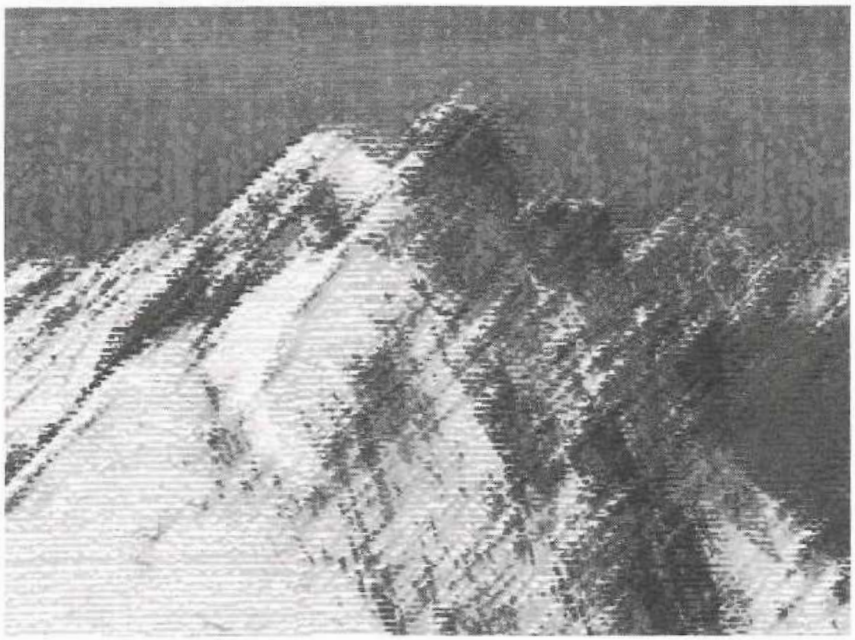
当時、毎週出かけた芦屋のロックガーデンや、時には道場などのロッククライミングを欠かさなかった。乗鞍・鈴蘭小屋のスキー合宿や、その後の数々の山行きを共にした良き仲間だった。

最も印象に残るのは昭和１４年の積雪期ジャンダルム飛騨尾根の同行である。アタックには山岳技術に優れたノンキとたまたま体調の良かった僕が選ばれた。飛騨尾根のA.C.から二人で、まだ暗いうちから出発し、アンザイレンで交互に登攀した。最終の凍りついた岸壁は、ノンキが登り終えた。登頂成功後、白出沢の雪渓を転びながらもかけ下りて来て、夕方暗くなった頃、B.C.近くに近づいた二人が、出迎えてくれるはずの連中に大声で叫び、待っていたサポートメンバーや人夫頭の中畑さんが達が応えてくれた時の喜びと安堵は数十年たった今でも忘れられない素晴らしい思い出だ。

終戦後、ノンキは関東、僕は関西と離れていたが、甲南山岳会という深い絆で結ばれ、卒寿を超えるまで長い付き合いができたことは実に幸いだと思っている。

ノンキ、

とうとうきみは先に逝ってしまった！そちらでA.C.の設営をよろしく頼む。間もなく僕も合流するから・・



目次

― 追　悼 ―

文三先輩を偲んで

廣瀬　健三（昭和36経）

伊藤文三さん（斯様な言葉使いを御容赦下さい）には近年頻繁に電話にて数々のエピソードなど、お聞かせ頂きました。すべてが其の時代背景と共に興味深いお話でした。なので、厚かましい自分は、ついつい御電話する回数が増えてしまった次第です。時には体調不良の時も御有りだったと拝察しますが、何時もあの温和な口調で対応頂いた訳です。今も感謝致しております。最後の電話は昨年11月で、お好きなＪＡＺＺ関連の事が話題になりました。先輩は貿易で巨万の富を築き（1920 年の大恐慌で倒産）わが国のゴルフの進歩発展に貢献された功績で、日本ゴルフ史上忘れてはならない人物、伊藤長蔵の三男として、神戸市の北野町にて誕生されました。（風見鶏の館のある辺り）長兄の新一、次兄の収二氏と同じく、甲南高校から東大に進学され、三兄弟揃って、甲南---東大山岳部で活躍された事は、ＫＡＣ会員の良く知る所であります。お聞きしたお話、恵送願った資料など、全て内容の濃い物ばかりで、どれを此の拙文に認めようか迷った結果、昭和16年三月の鹿島槍奥壁南稜初登攀関連のエピソード等をを披露させて頂く事に致しました。（一部、東大スキ-山岳部の記録なども交え乍ら）

「鹿島槍ケ岳荒沢奥壁南稜初登攀
；1941年3月26日」

東大パーテイ：伊藤文三（甲南高等学校山岳部ＯＢ）佐谷健吉（浪速高等学校山岳部ＯＢ）テントキーパ-、中山和世（第二高等学校山岳部ＯＢ）文三さん曰く“”佐谷から荒沢南稜に行くからと、誘われた。甲南出身ゆえ岩登りが得意だろうと小生をパートナ-に選んだらしい。佐谷にとっては怨霊登攀だった。“” 佐谷氏の登攀記録によると“”オ－ダ-をＩ-Ｓに変えて左手のアイスリンネに入る。下から見ると簡単そうだったが、取り付いてみるとツルツルのアイスリンネでおまけに傾斜がとてもきつい。Ｉは巧妙なバランスでピッケルを振るいながら登ってゆく。“”----------この厳しい登攀の時、恐らく佐谷氏は御自分の

パートナー選びは正解だったと再認識されたのではと、小生愚考します。

伊藤三兄弟揃って、クライミングの達人だったようで、本当に甲南山岳部部員は岩登りが上手かったのです。前述の中山氏は二高出身、同校の山行きは縦走などが主で、岩登りはあまり得意でなかったので、此の登攀には参加せずとの文三さんの御説明も有りました。此の登攀関連で、次の様な思いで話を聞かせて頂きました。

其のひとつ：酒飲みの佐谷は酒が飲めるからといって、自衛隊に入隊し、幹部に成った。中山は運輸省船舶局長の時、就職の世話をしてくれた。笹川良一の息の掛かった会社で、彼の子分が取り仕切っていた。変な奴が場違いな所に来よったと言う雰囲気が漂い居れなく成って、退職したが、辛抱して日本船舶振興会辺りの幹部にでも成っておれば、相当はぶりの良い人生を送れたかもナ、ハハアハ―。

其のふたつ：「鹿島槍研究」他　後立山連峰の登山史の執筆で名を成した吉田二郎が、自分の登山実績に箔をつけるため、偽りの登攀記録を発表、それが虚述なりし事発覚、其の後、氏は著述家生命を絶たれた。此の事件に付いての、文三さんの御話；佐谷と自分は此の南稜の完登を成功させたあと、確かに少しエスケープして、北槍に着いた。吉田二郎は我々が完登してない、本当の完登は自分が為した。と発表したが、其の日は彼は北海道にいた事が判明した。当話題を誰かが、ある作家に売り込んだ結果、舞台を谷川岳に変えて小説化されたらしい。

大好きなジャズに成ると、何時も大変お元気に成られました。御蔭さまで、殆ど未知の世界だった此の種音楽にも、興味が出てきてます。あの優しい御顔とゆったりとした関西弁を思い出しつつ、此の追悼文を書かせて貰いました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

平成２４年６月２６日記

目次

故伊藤文三氏の寄稿目録

伊藤文三さんには、戦前の部内雑誌から、最近の「山嶽寮」まで、多くのご寄稿がありました。最晩年に至るまで味わい のある文章で、かつての甲南山岳部の人と山を語っていただきました。完璧ではないかも知れませんが、手許資料からリストアップしておきましたので、折々にご一読下さい。

（2012.6.19　ご冥福を祈りつつ越田和男）

1936年 2月　甲南高校山岳部　『部内雑誌』　ＶＩＩ-I　山嶽寮―劔二股生活
　　9月　同上　ＶＩＩ－ＩＩ　　山 嶽 寮　―　春の劔行の感想
1937年　9月　同上　ＶＩＩＩ　　冬山紀行　―　冬山徳澤生活
1938年11月　同上　ＩＸ　紀行　―　春の鹿島槍生活 山嶽寮　―　無題
1939年　　『関西学生山岳連盟報告』　第８号　　ジャンダルム飛騨尾根
1940年 6月　甲南高校山岳部　『部内雑誌』　Ｘ 春山紀行
　　―　ジャンダルム飛騨尾根登攀　白出より
1964年11月　甲南山岳会・山岳部　『時報』　山嶽寮
　　―　私の甲南山岳部生活 山岳部創立４０周年記念号
1965年 5月　『甲南山岳会通信』　No.　１４
　　甲南大学山岳会第一次ヒマラヤ遠征について現況報告
1965年 7月　同上　No.15 ガネッシュ・ヒマール遠征計画の延期について
1970年 9月　同上　No.18 雑感
1977年 3月　『山嶽寮』　甲南山岳会通信　No.33
　　随筆　―　昭和１１年１月・槍平生活の思い出
1982年　4月　同上　No.39　―創立５０周年記念号―ロックガーデンの想い出
1995年11月　同上　No.50 山嶽寮第５０号に寄せて　－　思い出
1996年10月　同上　No.51 随想　―　山とのつきあい方
2001年10月　『山嶽寮』　甲南山岳部創立７５周年記念号 山嶽寮炉辺譚
　　―　乗鞍・鈴蘭小屋のことなど
2006年10月　『山嶽寮』　甲南山岳会通信　No.６１随想　記録の無い山行き
　　―昭和１１年の鹿島槍東尾根
2009年10月　同上　No.64　　追悼　山岡静三郎さんのこと
2010年10月　同上　No.65　　追悼　奥山先輩とのかかわり
2011年10月　同上　No.66　　追悼　佐野ゲン時代の早稲田と甲南山岳部

目次

— 追 悼 —

柏木宏文様の思い出集

藤安賢一・平井吉夫・廣瀬健三・牧野宏・安井正・森本全彦
（順不同、敬称略）

「カシブーを偲んで」

藤安　賢一（大 S36・高 S32）

この度、柏木君の想い出を書いてくれとのご依頼を受けた。だが、柏木宏文君とは山行を共にした記憶はない。と思って、2001 年に刊行された甲南山岳部創立 75 周年記念号（本書は、柏敏明君と越田和男君の手によって編集された秀逸の作品である）をめくってみた。やはり山行を共にした事はない。しかし、断片的な記憶の中で柏木君の事は実に可愛らしい弟の様な存在として記憶があった。彼はぽちゃっとしたほっぺたをしていつもニコニコして人当たりの良い表情をしていた。周囲の皆が怒る事には一緒になって怒り、可笑しい時には一緒になって笑った。彼と一緒にいるとき彼をかばってやる気持ちが強かった事を憶えている。

小生が甲南を卒業し、社会に出たのは昭和 36 年（1961）。それから後、2001 年 12 月 1 日、山本三郎先生の叙勲祝賀パーティの会場でお目に掛かる迄、会っていなかったように思う。この時彼は車椅子で奥方が押して現れた。彼の経営するゴルフの練習場で修理中に転落し怪我をしだ事は聞いていたがその姿に声を飲んだ。彼は小生を見て涙ぐんでいた。懐かしかった。

思い起こせば、それはロックガーデンで、クライミングのトレーニングをしている風景である。部員が幾つかのパーティーに別れ、小生と柏木がペアーを組み、ブラックとイタリアンに挑戦した。その日の彼は何時もと違い調子が良かった。ブラックに挑戦しフーフー云いながら、足を痙攣させながら皆の声援の下に登り切った。必死の顔つきで少し青ざめていた。落ち着くに従って段々うれしさがこみ上げてくる様子であった。そして、饒舌にしゃべった。イタリアンは果たせなかったがその日の達成感は大きいものがあったと思う。

ご冥福をお祈り申しあげます。　合掌

「カシブのこと」

平井　吉夫（高 S32）

カシブはよく落ちる山岳部員でした。ほんと、何回落ちたことか。そのため、カシブが岩を登るときは必ず私がビレーしたのを覚えています。南股の奥の掘っ立て小屋に合宿して不帰をねらったときは、合間によくスキーツアーをしましたが、八方押出しを登ったときに小雪崩が起きて、これまた当然のようにカシブだけが巻き込まれ、リーダーだったポンが青ざめたこともありましたね。あのときカシブは遭難救助を求めるホイッスルを吹き続けていました。

それでもカシブは、ときには痛い目にあったり怪我をしたりしても、めげずに山登りを続けました。テントや小屋でのカシブは、疲れたわれわれ上級生をいやしてくれる可愛いキーパーでした。あの顔でニッコリされると、あれこれのムシャクシャが吹き飛んだものでした。それをいま、あらためて思い出し、懐かしさと感謝の念がひしひしと湧いてきます。

まったく長い間ご無沙汰していた末に柏木君の訃報に接し、あのとき会っておけばよかった、このとき会っておけばよかったという悔恨の想いにさいなまれます。いまはただ、ご冥福をお折りするばかりです。

「柏木宏文兄の訃報に接して」

廣瀬　健三（大 S36・高 S32）

古い写真を見つけて、暫し彼を偲んでいます。ご冥福を祈ります。合掌

カシブはほんとよく落ちましたね。八方押し出しで彼が懸命にホイッスルを吹きながら流された場面、覚えてます（其の音色も）。柔らかな表情で喋るので、いきり立つ小生など随分なだめられました。最後に会ったのは、2001 年 12 月 1 日、山本三郎先生の勲章受章の祝賀会（ホテルオオクラ神戸）でした。奥様が押す車椅子にての来場でした。束の間の会話でした。

「柏木宏文君」

牧野　宏（大 S36・高 S32）

昨年 10 月 22 日（土）　田中、村上、安井君とカシブの自宅にお参りしました。思いがけず細君からご馳走になり、故人を偲び細君共に 5 人で部歌を斉唱しました。元気にハイタッチで別れた直後に嚥下障害（ｴﾝｹﾞｼｮｳｶﾞｲ）、突然のことだったそうです。

結婚後、間もなく持病の喘息で入院中、

医療事故で心肺停止、が無事生還。22年前仕事中、明舞ゴルフセンターの屋根から落ち脊椎損傷、以降、車椅子生活を余儀なくされました。

山本先生に落ちたり骨折したりは体育の授業が悪かったのとちがいますかと申しましたが、先生はリハビリに滴寿病院等を紹介し励まされていました。

８年前には大腸、腎臓、皮膚の悪性腫瘍を乗り切り、根は至って丈夫だったそうです。

ご葬儀の折のご挨拶状によれば、ふたりして一緒に歌を口ずさんだり、四字熟語クイズをしたり…穏やかな時間を過ごせたと記されています。

賢夫人と共に豊かに歩まれたカシブの人生は幸福に満ちていたと拝察されます。

ご冥福を衷心よりお祈りいたします。

「柏木先輩の思い出」

安井　正（大S40・高S36）

23年10月牧野さん、田中さん、村上さんと四人で舞子の柏木宅にお線香を上げにお邪魔した。豪華な昼食を戴きながら遺影の前で奥様と思い出を手繰り合わせて語らうひと時であった。記憶を５５年巻き戻しつつも、具体的な実話は記憶が薄れて事欠いてしまう中、心に刻まれた三つの印象を綴ってみたい。

私は中学２年の秋、山岳部に入部した時、柏木さん・大関さん・竹原祐爾さん達が高校２年生でよくロックガーデンへ岩登りにキャンプにと登山の基礎を仕込んで頂いた。小柄で丸顔・くり目の童顔、少し甲高い声と口調はあくまでも穏やかで優しい柏木さんが居られなかったら、多くの失敗と愚鈍を重ねた私の部活動は続いていなかったと、今になって思う。やはりお元気だった頃の思い出は書いていて嬉しい。

柏木さんが４年の秋、常念越えの合宿の横尾キャンプで夜、喘息の発作が起こり、頓服は持っておられたと思うが、テントのポールにしがみ付かんばかりに苦しさに耐えておられた姿を思い出す。柏木さんは発作の合間に『迷惑かけてすまん』と繰り返されるが、周りの人間は替わるに替われず『カシブさん大丈夫？』と間の抜けた返事しか出来ず辛かったと同時に、他人への気遣いに「人間の出来がちゃうなあ」と感じ入ってしまった。

柏木さんが卒業された後お会いする事がなく、風の便りで経営されていたゴルフ練習場で怪我をされた事は知って

いたが、再会の衝撃はショックだった。

今から11年前山本先生が叙勲を受けられたお祝いの会が神戸のホテルで開かれた時、柏木さんは奥様が押される車椅子に無表情で座っておられ、散会時「カシブさん昔、お世話になりました『ヤッサン』です」と呼びかけるも判っていただけたかどうか。

舞子へ行った翌日、竹原祐爾さん（前出、チクの兄上でカシブさんと高校の同期）と会った時「ゴリさんカシブさんが亡くなりましたよ」と言うと例のドスの効いた声で「今頃なに言うとるんや同級8人で通夜・葬儀に参列してきた」と。

奥様が遠慮されて学友関係は我々だけかと思っていたが、ほっとしたのを覚えている。辛く、お気の毒な様子の思い出が強いと言うのは柏木さんのお人柄とはおよそそぐわなく、悔しい思いしかない。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

「カシブさんのこと」

森本　全彦（大S39）

カシブさんの思い出す姿は、子供子供した可愛らしい顔しか浮かばない。高校生の時、窓側の席から運動場をながめていると、自分の肩幅より大きなキスリングを担いでいたのがカシブさんではなかったかと。

大学の山岳部に入り、最初にお世話になったのがカシブさんであった。5月合宿前に入部して、最初の山が不帰岳であったが、山靴、ピッケル、アイゼンとすべてを卜部さんから借りていただき、山に入った。ザイルを共にしたことはなかったが、何かと親切に教えを請うたものだ。六甲の岩登りでは、背丈が同じだった関係で、登る時のホールドとかスタンスを見て真似た。私の岩登りの師匠と言える。

身体が丈夫でなく、溜まり場になっていたイーチャン宅で、持病の喘息でゼイゼイ言いながら麻雀をよくやったものだ。大学2,3年はマネージャーとして山岳部の運営に携わり、誰もが嫌がる学校体育科の一般募集の山行案内役をやったりしておられた。

一番身近な先輩であった大津、倉藤、柏木さんの3名が亡くなり寂しい限りだ。

カシブさん　本当にお世話になりありがとうございました。

村上與利一様のご好意により、カシブさんの銘板が取り付けられました。

ありがとうございました。

目次

― 柏木宏文様追悼文 ―

国鉄(JR)西組

村上　與利一（昭和39営）

これは鉄道の話ではなくて、ＪＲ摂津本山駅から元町方面へ一緒に帰宅していた先輩と私の話です。まるで小学生の集団下校みたいですが部活が同じだと学年が違っても放課後のトレーニングが終われば帰りは同じで、途中牛乳を奢ってもらって喉の渇きを癒したり、道中色々と甲南ボーイの影響を受けました。

出会いは入学式の際、山岳部新入部員勧誘チラシをもらって軽い気持ちで部室を覗いた時です。先輩からしてみれば鴨が来たと云った処でしょうか。聞かれたのは体力のことよりマージャンが出来るかと問われ、雑談しているうちにメンツが揃い雀荘に引っぱって行かれていつの間にかに入部手続きが完了です。翌日から部室で留守番、その合間に先輩からは出席しなくても単位が取れる授業を中心に一週間の時間割作りの指導を受ける。さすが要領の良い甲南高校出身者のアドバイスで私も四年間で卒業することができました。また、５月の新人歓迎合宿では鹿島槍からの帰りに葛温泉の旅館で一泊（費用は先輩持ち）山登りと温泉の魅力ある組み合わせを教えてもいただきました。

先輩の名は柏木宏文（かしブー、ブーチャン）さんです。昭和３７年経済学部卒業です。当時は三回生でマネージャーをされておられました。リーダーは倉藤孝次（くらさん）さんです。二人はコンビよく部を纏め、遊びのマージャンでは部員だけで二卓を囲むことができ、稼ぎ頭はくらさんで、カモはブーちゃん。ブーちゃんがメンバーの場合、くらさんは手加減して打っておられたようでした。６０歳以下のＯＢでお二人（二人共鬼籍に入っておられます）を知る人は少ないと思いますので、ここではブーちゃんのことをもう少し話をさせていただきます。

新制のＯＢで終身会費（旧制ＯＢ対象）を納めている会員が一人おられます。ブーちゃんです。ブーちゃんはモダンジャズが好きで卒業後も私の店のお客さんでもあり親交が続いておりました。ある日、電話があり今後山岳会の会合には出られなくなったので旧制と同じ終身会

費を払わせてほしいとのこと。「それは無理ですよ」、「何れにしろ年会費は払わないで」と押し問答に。最後は先輩に押し切られてその年の山岳会総会で了解を取り付けました。

学生時代から喘息の病いがありいつも吸引器を所持しておられました。
また通院もしておられて身体には絶えず気を配らなくてはならなかったようです。しかし、日々の練習は練習着に着替えて号令係り、合宿では簡単に入下山出来る所では参加しテントキーパーをと、マネージャーだけれども常に仲間と行動を共にして愛されておられました。秋の涸沢合宿ではチームリーダーとして尾根登りをされております。これはリーダーであるくらさんの粋な計らいで、アタック前日の夕方私はくらさんに呼ばれ、「ブーの体調が良いのでチームリーダーとして１パーテイを作り３年間の部活生活に思い出を創ってやりたい、お前がフォローしろ、ブーはバランスが良くないので岩場には注意、喘息の持病があるので無理な行動はするな、取りつきはあのガレ場を詰めた所」等指示を受けた次第です。

卒業後はゴルフ練習場の支配人をされておられましたが、仕事中に悪さをしている子供を見つけて注意をしようとして２階より同じ高さにある道路に飛び移りに失敗し道と建物の隙間に転落、頭を強打し入院、それから長い長い治療との闘いだったようです。奥さんから連絡を受けた時は葬儀が終わった後だったので後日山岳会の仲間と自宅に寄せていただき仏前にお参りし、奥さんの希望により皆で位牌を前にして山岳部部歌《山の歌》を歌ってきました。

追伸
今年のロックガーデンでの慰霊祭が雨で流れて残念です。柏木さんの銘板は石原君が既に取り付けてくれております。

目次

— 随想と美田さんへの追悼 —

二俣と二つの山

芦田　匡平（昭和35年理）

懐かしい思い出も、どれほどの精度で残っているかと問われれば、半世紀を経て今の記憶をもって外に無いとしか言いようがない。後期高齢者を迎え、その一つを呼んでみたいと思った。

入学式を控え、乗鞍岳位ケ原山荘に一週間ばかり滞在し、晴天続きに任せて、位ケ原のシュカブラを縫い、鶴見のアイスバーンにエッジをとられ滑落同然に落ちるなどして過ごしていた。

青氷にアイゼンの爪痕だけを残し、トンキンのストックでバランスを取りながら登頂し、コロナ測候所であつかましくもお茶をよばれたりもしていた。

だから入部した時には色の黒い奴だと思われていたそうな。その色がまださめきらぬ五月、鹿島槍への計画を聞き、たちまち乗った。

これが甲南最初の山行きだった。メンバーは小川さん、忠さん（中村さん）、べーやん、福井さんに伊丹君と私。大町から入る。

大きな岩の傍らで忠さんが静かに佇まれた。忠さんの弟さんがここで遭難されたと聞いた。雪崩の起こりそうな谷も斜面も視界に入らぬこんな遠くまで雪崩は来るものかと驚いた。テントはセオリー通り岩蔭に張られていたのだが。

二俣でテントを張った。左へ入れば爺岳、右に入れば鹿島槍だ。

午前２時起床。各々の歩みに揺れるヘッドライトが足元の雪面を映す。チャカチャカというアイゼンの乾いた音が頬をなぜる冷気に吸い込まれて行く。見上げれば狭い谷に満天の星。その星明かりに青白く峰が聳えて招いている。僕にとって初めての光景で、別世界に降り立ったような感覚は今も深く刻まれている。

朝日が昇る頃、鎌尾根に取り付きリッジを登る。雪庇は既に落ちていた。福井さんがそれを乗り越え、セカンドの僕は合図を待った。ところがなかなか合図が来ない。福井さんはピッケルを頸まで打ち込み自分の身体を確り固定してからジッヘルの体勢に入っていたのだ。彼は会社（私は彼の隣の事業所に勤務してい

た）で慎重居士とあだ名される人だったが、皮肉にも車の後部座席に居て事故で亡くなった。天候が変わりそうなので登頂は止めて下山した。

二俣のテントサイドで小川さんが爺岳を指し、「小冷尾根の氷壁をやり残した。あれをなんとか甲南でやって欲しい」と言われた。僕はこれを先輩からの宿題だと受け止め資料を探しその機会を待った。

他校の資料や市販の山岳雑誌を繰ってみた。第三登攀までの記録は有る。状況が定まらないのか内容がバラバラだ。だから、最も時間を要した記録に合わせて準備した。

三年生の春、再び二俣に入る。幾多の山行きや捜索を共にし、最も信頼していた四年生のガチャさんと登ることになった。

暗いうちに出発。念のためアイスハーケンやツエルトを持参。

明るくなる頃取っ付きに着く。急勾配の真っ白な壁。少しでも体重を減らした方が良かろうと、二人並んでキジを撃つ。この辺りからみょうにふざけ始めている。

雪はしっかりしていてアイゼンに不安はなかった。岩が見えると痛々しくて恐いが、真っ白だとその痛さは無いがやはり恐いんだろう。互いに冗談を連発しながら恐怖心にバリアを張っていたようだ。

前後交代で登っていった。雪庇近くまで来るとほぼ垂直に感じた。「どうした？！」と、ガチャさんの声がする。「鼻の通る溝を掘ってます」。さほど高い鼻でもないし、実際、斜面が鼻に触れはしないのだが、これも冗談のうちでピッケルでそれらしき溝を掘っていたのだ。

雪庇の下のトユに転がり込んだ。荷物を担いでの腹這い以外の姿勢はとれない。こんなかっこうで雪庇を切れば、それこそ日が暮れる。トユの下手が遠く明るい。這って行くとトユの外は切り立っていて、そこから尾根に乗れそうだ。トユから顔を覗かせるとガチャさんのアイゼンが目の前にあった。

祖父岳頂上に上がり、非常食のチョコレートと干しぶどうをほうばり、「雪が緩むまでに帰ろう」と、コルまで急ぐ。

頂上に立って“バンザイ！バンザイ！”はやらせだ。恐い仕事をやってのけたら“早よ帰ろ”が本音だ。

コルからはグリセードで飛ばし尻セード。テントに帰ってくる。

ツエルトを担いで行ったにしては早い帰還に、壁に跳ね返されたと思ったようだったが、「やってきた！」と言うと、

皆拍手で慶んでくれた。

その時、珍しいものを見た。伊丹君の目に光るものが有ったのだ。彼はデカが小窓でやられた時、雨さんと二人テントで待っていた。だから、いろいろと思い巡らし心配してくれていたんだろう。

朝早く起きた僕らは、木漏れ日の落ちる雪面にマットを敷き、心地良い風を頬に受けながら、達成感の中、深い眠りに入っていった。

さて、

今年の二月に美田君が亡くなった。一年生の夏合宿で前穂の三峰フェースをべーやんと三人、一つザイルに結びあった仲間が他界したのだ。彼は、何故か、何か厄介な荷物を背負い続けていたように見えてしょうがなかった。けど、棺の中の彼は別人のように安らかだった。美田君のご冥福をお祈りする。

目次

＝山　行＝

光岳リンチョウ沢

2011年8月11日～13日

山本恵昭（昭和56年理卒）

昨年、光岳に行ったときに小屋番のおじさんから、「光岳の南側にリンチョウ谷という沢がある。下からの林道が崩壊しているのでめったに人が入らない。60cmの岩魚を釣った人が居る。」そんな話を聞かせてもらった。しかもダルマ沢出合から上流の大井川源流部は、本州で唯一の原生自然環境保全地域に指定され、温帯性の針葉樹林が保存されている。これはまだ体力のあるうちに行くしかない。

8月10日仕事が遅くなり帰宅後準備をしていると、結局11日夜3：00の出発となった。寝不足頭で運転していて西宮で名神高速に乗り換えるのを通り過ぎてしまう。なんだかんだで、登山口易老渡10：00着。ここまでの林道は、今朝まで土砂崩れで通れなかったそうである。出遅れたのが幸い。

荷作りをしていて、竿と餌のミミズはあるのに釣りの仕掛けを忘れたことに気付く。夜中準備をして部屋に置いてきてしまったようだ。下山した登山者に聞いてみるが百名山目当ての方々は当然釣具など持っていない。せっかくなので安全ピンを曲げて釣り針を作り、縫糸を釣り糸代わりに一応持っていくことにした。

易老渡11：00発、易老岳15：15着。静高平で水を補給し光岳小屋テント場17：30着。夕食に途中で採ったアミタケスープを追加。雨は降らないが、ガスが出て寝袋なしでは寒い。

12日小屋横から御来光。富士山に雲がかかっている。5：30発、光岳への道と別れ南に尾根を下る。途中荒れているところもあるが赤いビニールテープと樹種を書いたプレートに導かれてひたすら下る。柴沢吊橋は渡るのに勇気が要った。傾いていて良く揺れ、木の板は朽ちかけている。気分はインディジョーンズ。渡り終えると光岳登山口という立派な看板があった。林道が通れた頃は人気のコースだったのだろう。寂れた林道をちょっとで柴沢リンチョウ沢出合9：15。草の広場に整備された小屋があり、中には薪ストーブがある。鍋や調味料が置いてあり、釣師たちのベースになっているようだ。こんな所でのんびり釣三昧もいいだろうなあ。沢に入るプレッ

シャーに負けそうになる。

入渓準備をしようと小屋の横から沢へ降りていく。柴沢の淵にゆったり泳いでいる岩魚を見ると、釣りのスイッチが入ってしまった。安全ピン仕掛けにミミズをつけて放り込むと 20cm 級が釣れた。しかし後が続かない。賢い岩魚にはもう見破られたようだ。強い日差しの中、2 時間ほど粘って諦める。これで緊張感もほぐれた。

11：15 沢装束に身を固めリンチョウ沢に入る。膝から腰くらいの渡渉を繰り返し進み、やがてゴルジュとなる。滝にかかった丸太を跨いでよじ登ったり、巻いたりしながら順調に進む。広河原へ抜ける手前、標高 1240m付近に巨岩の急傾斜帯があり豪快に水しぶきを上げる滝に行く手を阻まれる。左岸を高巻くが、いくら登っても岩混じりのブッシュ帯でトラバースの弱点が見つけられない。諦めて懸垂下降を繰り返していると、獣道を見つけた。懸垂しながら辿ると、

リンチョウ沢ダルマ沢出合

最後は草付きルンゼを経て沢へ降り立つことができた。結構衰弱した。右岸を行くべきだったかもしれない。すぐに谷は開け、明るい河原を進むとダルマ沢出合 15：00。先に進む気力はなく、今日はここまでとしてテントを張る。

見上げるとはるか上の緑の尾根に岩が白く輝いている。光岳山頂は展望もなくさえない山だが、ここから見ると確かに不思議な魅力をもっている。

リンチョウ沢から光岳のテカリ石

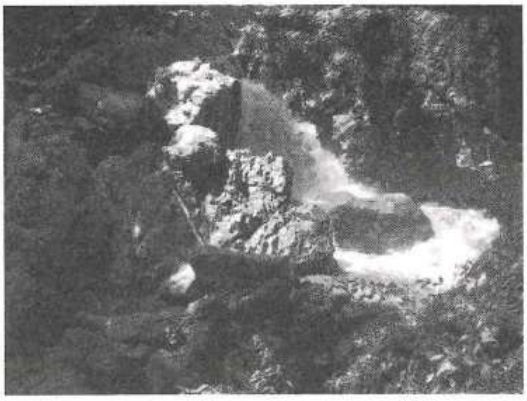
明るい河原に緑豊かな森、最高のロケーションのはずだが気分がさえない。あまりに深い自然に圧倒されている。地図で見る限り、ここからなら左岸の斜面を登れば降りてきた道に逃げることができそうだ。さらに奥に進むか、エスケープするか、迷い続ける。

13 日天気は上々。先に進むことにして 6：00 発。ちょっとした高巻きでカモシカにばったり遭遇、距離 5 m。こちらも驚いたが、向こうもびっくりした様

子。しばらく時間が止まった感じ。急斜面で身動き取れないでいると、やがて登攀力に優れたカモシカの方がルートを譲ってくれた。熊で無くて良かった。

標高 1440m付近で第1の廊下に行く手を阻まれる。右岸を大高巻き。ここもカモシカハイウェイを見つけると、ガレた小沢に導かれロープを出さずに沢に戻れた。標高 1660m付近で第2の廊下、再度右岸を高巻き。ここの草つきが悪いとのことであったが、水が流れる小ルンゼを登ると安定していて難なく高度を稼げた。ここもカモシカハイウェイのお世話になり、ガレ場を下って沢に下り立つ。第3の廊下は、ナメ滝など水際を辿って難なく抜ける。巨大な流木倒木を橋代わりに伝わりながら、沢を詰めると岩だらけのガレ沢となる。

リンチョウ沢廊下の高巻き



リンチョウ沢巨岩の滝

白い岩目指してどんどん高度を上げ、水が枯れる頃、右岸のルンゼに取り付き樹林帯に入る。急斜面をブッシュにぶらさがって必死に登ると、突然美しいシダの草原へ出る。そのすぐ上が加加森山からの道だった。標高 2320m、12：00着。靴を履き替えていると雨が降り出す。鬱陶しいが、沢の中でなくてなにより。水色テープに導かれながら光岳に到着 13：10。すぐ横の岩場からリンチョウ沢を見下ろすと、昨日泊まった広河原が、遥か下に白く見えた。

光岳小屋 13：30 着。小屋もテント場も一杯である。今日の予定はここまでであったが、今日中に下山することにする。小屋番のおじさんに挨拶をして 14：00 発、静高平の水場で大休止。山伏峠から縦走してきたというお爺さんに余り食料をプレゼントする。易老岳 16：20。夕日に「もう少し待ってくれ」と言いながら棒のような足に鞭打って、

なんとかランプを使わずに易老渡駐車場 19：30 到着。車に荷物を積み込んでいると、すぐに真っ暗に。13 時間半行動、変化の多い 1 日だった。

林道が舗装に変わって安心していると、落石に乗り上げて車の底をこすってしまった。少し異音がするが、走るのには問題なさそう。風呂も入らず、飯田のスーパーで惣菜を買って、何とか渋滞にあわずに 14 日早朝帰宅。

すばらしい森と沢でした。カモシカ、木々、岩、自然のあらゆるものに感性を高めて何とかこなせました。久しぶりに自然に圧倒されました。畏敬の念を抱くとはこういうことでしょうか。人間でよかった。

目次

＝山　行＝

マレーシアの旅　キナバル登山

2012年2月27日～3月7日

山本恵昭（昭和56年理卒）

1．はじめに

師走のある日、カナダに留学中の末娘から「年内に課程を終えて正月には帰るので、2月にどこか海外へ一緒に行こう。中東とか、南米に行ってみたい」と誘いのメールが入った。要は次年度が始まるまで暇なので、自分で行く自信が無いところに用心棒がほしいということか。しかし、この子には父親が働いているという意識が無いのだろうか。普段そんなに休めるわけが無い。「無理」と返信。

ちょっと待てよ。そういえば、三兄弟のうち、父の我儘アウトドア遊びに一番付き合ってくれたのはこの子である。幼い頃、甲南山岳会の鈴鹿の沢登りなどにも付いてきて諸先輩方にもお世話にもなったことがある。山やスキーはもちろん、川下りや釣りなど、自分だけで行くと妻の風当たりは強いが、娘と一緒となるとしょうがないかということに。娘もその辺のところを微妙に理解して付いて来てくれていたような気もする。そろそろ一緒にという機会もあんまりないかと思うと、何とかならないかなという気にもなってきた。

ちょうど、今受け持っている仕事は2月末でひと段落する。その後ならしばらく休暇を取ることができるかもしれない。いろいろ交渉調整すると何とか10日間位は動けそうである。中東や南米は無理でも、近場なら何とかということで、私が若い頃行きたかったキナバル山に登ってみようかということになった。

2．準備

・登山の手配

インターネットで調べると、いろいろな情報がすぐに手に入る時代である。キナバル登山で検索すると、さまざまなＨＰが出てきた。世界遺産に登録されたキナバル山は、今はきちんと管理されていて自由に登ることはできない。現地ガイドの同行が必要で、まず小屋の宿泊予約を取る必要があることや結構費用が掛かることがわかった。

早速、小屋を管理しているステラ・サンクチュアリー・ロッジのＨＰから予約を入れようとしたが、希望の日程はすでに一杯である。大手旅行社がとりあえず押さえてしまうとか。ではということで、日本の旅行代理店に連絡を取ってみると、いくつかの会社で予約が可能であっ

た。しかし、費用が高すぎる。

では次の手ということで、現地ボルネオの旅行社のいくつかにメールを出してみた。何度かのやり取りの後、一番信頼できそうなエキゾチック・アドベンチャーという旅行社に依頼することにした。岩遊びのヴィアフェラータもコース入れて２泊３日、食事やガイド料、コタキナバルからの送迎など、コミコミ価格で１人 1750 MR(マレーシアリンギット)、約 45,500 円。ヴィアフェラータを入れたので高くなったが、仕方が無い。

・航空券の手配

今流行のＬＣＣ、エアアジアのＨＰを見てみると、関空からクアラルンプールまで 10,000 円という驚きの安い便があった。これに荷物代や食事代などが加算されて 17,700 円。クアラルンプールからボルネオ島のコタキナバルまで 8,000 円ほど。乗継補償が無いので少し心配である。しかし、先にカンボジアなどをまわってくる娘とクアラルンプールで合流することになり、乗継時間には十分余裕ができた。結局、安さにつられてエアアジアを利用することにした。

・ホテルの手配

到着した日とキナバルから下山した日、帰国前日のホテルは日本からインターネットで事前予約した。

クアラルンプールでは娘の到着待ちのため市街地には行かず、エアエジア系チューンホテルに泊まった。シングル設定は無く、ダブルで１泊 3,800 円。ＬＣＣ空港から徒歩圏で便利だが、１人でも狭くて荷物を置く場所がない。寝るだけの部屋だった。

コタキナバル到着日は、パンタイインというホテルに泊まった。ツイン２人で 2,800 円。ローカルレストランやスーパーマーケットが近くにあり便利であったが、落ち着く雰囲気ではなかった。

キナバル下山後と帰国前には、シャングリラホテルを利用した。高級リゾートチェーンのシャングリラではなく、地元では「ダウンタウンシャングリラ」と呼ばれているローカルホテルである。清潔な割には安く、朝食付きツイン２人で 4,000 円ほど。朝食はビュフェ方式でいろいろなメニューが食べ放題。日本人利用者の満足度が高いようである。我々も大満足であった。

コタキナバル到着日もシャングリラホテルに泊まろうとしたが、空室が無く予約が取れなかった。一杯飲んだある夜、インターネットで予約サイトを見ていると空室があり思わずクリックすると、日付を１ヶ月間違えていた。しかもよく読むとキャンセルできない条件での特別価格だったので、全く無駄な出費になってしまった。便利なインターネットであるが、こんな失敗に要注意である。

3．日程

2月２７日　関空（エアアジア）→クアラルンプール

２８日　クアラルンプールで娘と合流（エアアジア）→コタキナバルへ

２９日　コタキナバル（車）→キナバル国立公園事務所

3月１日　キナバル国立公園事務所（登山）→ペンダントハット

2日ペンダントハット→ローズピーク山頂→ヴィアフェラータ→　ペンダントハット→キナバル国立公園事務所（車）→コタキナバル

3日　コタキナバル（マレーシアエアライン）→　サンダカン

4日　サンダカン（車）→セピロックオランウータンリハビリセンター→ビリ

5日　ビリ（車）→サンダカン（マレーシアエアライン）→　コタキナバル

6日　コタキナバル（エアエジア）→クアラルンプール

7日　クアラルンプール（エアエジア）→　関空

4．キナバル登山

２月２９日　約束通り 8:00 にホテルの前に迎えの車が来る。乗り合いと聞いていたが、他の客はおらず、我々２人にドライバーとアシスタントの２名が付く貸し切りドライブである。２時間ほどのドライブでキナバル国立公園の事務所に着く。アシスタントが明日からの登山の手続きを行っている間、正面に聳えているキナバル山を眺めて過ごす。

一旦、公園外へ出て、すぐ近くのフェアリーガーデンというホテルで降ろされる。公園内に泊まると割高なので、外のホテルを使うということのようだ。このあたりは標高 1500m位。日向は暑いが、風は涼しい。なんだか疲れて、昼食後はぐっすりと寝込んでしまった。夕方、暇なので公園まで歩いていき、公園内を散歩する。きれいに遊歩道が整備されていてリゾートのイメージである。ヘゴシダの異様な姿が目立つ。

3月１日　8:00 に迎えの車が来て公園事務所へ。我々のガイドはジョセフ、あまり英語は得意ではなさそうであるが 40 歳代の人の好さそうなおじさんだ。登山に使わない荷物を預け、さらに車でティンポホン登山ゲート 1890m へ移動する。ここで ID カードのチェックを受け、8:30 いよいよ歩き出す。

鬱蒼とした森の中の道で、大きな木には着生シダや着生ランがいっぱい付いている。途中、適当な間隔で休憩用のシェルターとトイレが用意されている。登山者がエサを与えるのか黒いリスが寄ってくる。

高度を上げるにしたがって木々が低くなり、13:20 ヴィアフェラータ専用の小屋、ペンダントハット 3280mに着いた。一番乗りのせいか、スタッフが英語

や片言の日本語でひたすら話しかけてくる。ドミトリー方式なので、使うベッドを決めて陣取る。お茶を飲んだり、シャワーを浴びてくつろぐ。

15:50 から全員集合しブリーフィングが始まる。日本人が我々以外に３人（世界遺産撮影のＴＶスタッフ）、イタリアやポーランドなどヨーロッパの連中が８人ほど、シンガポールなどアジア系が６人ほど。ロープやハーネス、カラビナの使い方の説明が行われるが、英語がよく聞き取れない。娘は黙って聞いている。解っているのか解ってないのか。ただ岩場にセットされたワイヤーにカラビナを架け替えていくだけのようだ。

夕食は、すぐ近くのラバンラタ小屋へ食べに行く。いわゆる本館という感じ。ビュッフェ方式で、サラダや肉類からスイーツまでご馳走が色々用意されていて食べ放題。当然親子で食べ過ぎた。いやしいのは遺伝か。ちょうど日没となり、熱帯の空に夕焼けが美しい。

３月２日　1:30 に起き軽く朝食をとり、2:30 ヘッドランプを点けてガイドのジョセフと出発。サヤサヤ小屋で ID チェックを受けさらに上へ。木の階段が終わると岩の道となった。綱引き用みたいなロープを目印にルートをたどる。満天の星空だったのに、しばらくすると雨が降り出してくる。風も出て雨具を着ても寒い。山頂近くの岩陰でしばらく待機。雨もやんで、もうひと登りすると、5:30

キナバル　ローズピーク山頂

ローズピーク山頂 4095mに着いた。

気温２℃。日の出待ちの間、寒すぎてダウンジャケットを着る。各国からの登山者で混み合っていた山頂も周囲が明るくなるにつれて空いてくる。反対側を覗くと迫力ある絶壁が続いている。１時間ほど岩御殿の絶景を楽しみ、下山にかかる。晴れているが相変わらず風が強く、娘は立ち止まってばかりいる。

ドンキーイヤーをバックに
ヴィアフェラータのスタート地点

7:10 何とかヴィアフェラータのスタート地点に着いた。ヴィアフェラータとは、岩壁にセットされた鉄の足場やワイヤーロープをたどり、カラビナを架け替えながら安全にスリルを楽しむ岩遊びである。ワイヤー橋などお楽しみセクションも用意されている。ヨーロッパで流行っているらしい。キナバル山のヴィアフェラータは世界の最高所にあるそうだ。ショートコースとロングコースがあり、我々はロングコースの「ローズピークサーキット」を選んだ。高度感があり最初は緊張気味だった娘も、すぐにコツをつかみ余裕で楽しんでいる。先に出発してＴＶ撮影をしているパーティに追いついた。（ＴＢＳで５月に放映ということで楽しみにしていたが、映っていたのはヨーロッパの連中だけだった。我々にはモデル適性なし。）

ヴィアフェラータ

11:00 ペンダントハットに戻り、のんびり昼食。また、雨が降り出したので、他の連中はびしょ濡れで戻ってきていた。

12:00 雨の中、出発。途中、食虫植物のウツボカズラを見つける。下るに従って、植物相が教科書の垂直分布通りに変化して面白い。しかし、長い下りが堪えた。階段状に整備されているが、膝がガクガク。こちらのペースに合わせてくれているジョセフに申し訳ないが、体がゆっくりしか動かない。16:00 やっとのことで、ティンポホン登山ゲートへ辿り着いた。待っていた迎えの車に乗り、公園事務所へ。預けていた荷物と登頂証明書を受け取り、コタキナバルへ戻る。

日本から予約していたシャングリラホテルにチェックイン。

５．野生動物観察ツアー

３月３日キナバル登山は計画的に準備をしていたが、下山後はノープランである。さて、残りの日数で行き先を検討した結果、ボルネオ島北部のサンダカンへ行って、オランウータンやゾウなどの野生動物を見ようということになった。ただ、私も娘も電話で飛行機のチケット予約をするだけの英語力に自信がない。ホテルの受付のお兄さんに無理を言ってマレーシアエアラインに電話をしてもらい、なんとか 11:30 発サンダカン行きのチケットをとってもらう。あわてて荷物をまとめ、タクシーでコタキナバル空港へ。

12:00 サンダカン空港へ到着。空港の

観光案内所でこれからのプランを相談するが、とても親切に対応してくれる。いくつかのパンフレットの中から、セピロック・オランウータン・リハビリテーションセンターとキナバタンガン川の野性動物観察ツアーに行きたい旨伝えると、旅行社と交渉して合体プランを組んで費用交渉をしてくれた。今日の午後からを希望したが、どうしても無理とのこと。よく聞いてみると、ブルネイの王様がセピロック・オランウータン・リハビリテーションセンターの視察に来て今日サンダカンに泊まるので、一般向けには閉鎖ということであった。その代わり、今夜町でセレモニーがあるので、屋上からそれが見えるナックホテルを予約してくれた。ラッキーなのか、アンラッキーなのか。

ナックホテルにチェックインし、セピロック・トロピカル・ワイルドライフ・アドベンチャーという旅行社に予約確認に行く。１泊２日、２人で36000円。

ローカルレストランで夕食をとり、ホテルへ戻る。コタキナバルが近代的な美しい町であるのに対して、ここサンダカンはゴチャゴチャしてアジアっぽい。広場で行われているセレモニーの音と光を肴に、ホテルの屋上でカクテルなど楽しむ。すると、突然の大雨。さすが、熱帯多雨地域。あわてて部屋に戻るが、雨はすぐにやんだようで、その後花火の音が響いていた。

３月４日 8:00 ホテルに迎えの車が来る。セピロック・オランウータン・リハビリテーションセンターでは、孤児になったオランウータンを保護して育て、野性に戻す取り組みをしている。半野生化したオランウータンが餌付け場に集まってくるのを観光化して資金を得ている。森の木道の先にテラスがあり、レインジャーが餌を置くと、森の中から半野生化したオランウータンが次々現れた。オランウータンといえばおとなしいイメージがあったが、餌のおこぼれをもらいに来た他のサルを追い払うときなどは、牙をむき出しにして腕を振り上げ激しい闘志を見せていた。

オランウータンとオナガザル

昼食後、再び車に乗ってキナバタンガン川沿いのビリ村に向かう。２時間の道中、ひたすらパームヤシのプランテーションが延々と続く。熱帯多雨林はどんどん切り開かれて、経済効果の上がるパームヤシに植え替えられていっているようだ。キナバル登山にしろ、このツアー

にしろ、地元の物価から考えるととても割高な感じがするが、このような外国人向けのネイチャーリゾートにしてお金を得ないと、自然林の価値を見出し、残していくことが難しいのだろう。

ビリ村でボートに乗り換え、13:00 ビリ・アドベンチャー・ロッジへ。木道で宿泊棟がつなげられており、部屋にはクーラーもシャワーもある。

夕方に動物が出てきやすいということで、16:00 からボートクルージング開始。8人乗りのモーターボートで泥水の川を行ったり来たりしながら、川沿いの森の動物を観察する。

野生のオランウータンやテングザル、オナガザル、ホエザル、カワセミやサイチョウなど、さまざまな野生動物が楽しませてくれる。薄暗くなってもう何も見えなくなる頃、ロッジに戻って夕食。夕食後は、オプションで長靴とヒル避け靴下を借りて夜の森の中を探索したが、たいしたものは現れなかった。

3月5日 6:00 から早朝リバークルーズ。朝靄の中ボートは走る。テングザルなどが見られたが、結局ゾウは現れなかった。ロッジに戻って朝食をとり 9:00 には出発。ゴマントンケーブというコウモリのすむ洞窟を見学し、サンダカンへ戻る。

サンダカンでは、博物館や市場を散策する。言葉だけでは聞いていたが、日本との関わりの深い町であることを知る。

16:30 プロペラ機でコタキナバルへ戻り、再びシャングリラホテルへ。

夕食はちょっと張り込んで「セドコ」という屋外海鮮レストラン街へ行く。水槽にエビやカニ、さまざまな貝や魚が入れられていて、見ているだけで飽きない。素材と調理方法を言うと、その場で作ってもってきてくれる。日本円に換算するととても安いはずだが、もう現地の通貨感覚になってしまっているので、ちょっと躊躇してしまう。安いカニのチリソースと貝の生姜蒸し、焼飯を注文したが、とても美味しかった。今から思えば、店員がしきりに勧めていたイセエビを食べておけば良かったと後悔。

3月6日チェックアウト後、荷物をホテルに預けてコタキナバルの町を散歩する。町自体はあまり大きくないが、百貨店やスパーなども沢山あり、ボルネオ島一の都会である。モスリムも多く、全般的にマナーも良い。

昼過ぎに空港へ行き、エアアジア 16:20 便を待つが余り説明も無く1時間ほど遅れる。クアラルンプールでの乗継に余裕を持っておいて良かった。

3月7日クアラルンプール 1:00 便で、関空へ 8:30 着。

6．おわりに

全国のさまざまな森を訪ねて、日本の森の植物相についてはある程度その組み立てを読み取れるようになったつも

にしろ、地元の物価から考えるととても割高な感じがするが、このような外国人向けのネイチャーリゾートにしてお金を得ないと、自然林の価値を見出し、残していくことが難しいのだろう。

ビリ村でボートに乗り換え、13:00 ビリ・アドベンチャー・ロッジへ。木道で宿泊棟がつなげられており、部屋にはクーラーもシャワーもある。

夕方に動物が出てきやすいということで、16:00 からボートクルージング開始。8人乗りのモーターボートで泥水の川を行ったり来たりしながら、川沿いの森の動物を観察する。

野生のオランウータンやテングザル、オナガザル、ホエザル、カワセミやサイチョウなど、さまざまな野生動物が楽しませてくれる。薄暗くなってもう何も見えなくなる頃、ロッジに戻って夕食。夕食後は、オプションで長靴とヒル避け靴下を借りて夜の森の中を探索したが、たいしたものは現れなかった。

3月5日 6:00 から早朝リバークルーズ。朝靄の中ボートは走る。テングザルなどが見られたが、結局ゾウは現れなかった。ロッジに戻って朝食をとり 9:00 には出発。ゴマントンケーブというコウモリのすむ洞窟を見学し、サンダカンへ戻る。

サンダカンでは、博物館や市場を散策する。言葉だけでは聞いていたが、日本との関わりの深い町であることを知る。

16:30 プロペラ機でコタキナバルへ戻り、再びシャングリラホテルへ。

夕食はちょっと張り込んで「セドコ」という屋外海鮮レストラン街へ行く。水槽にエビやカニ、さまざまな貝や魚が入れられていて、見ているだけで飽きない。素材と調理方法を言うと、その場で作ってもってきてくれる。日本円に換算するととても安いはずだが、もう現地の通貨感覚になってしまっているので、ちょっと躊躇してしまう。安いカニのチリソースと貝の生姜蒸し、焼飯を注文したが、とても美味しかった。今から思えば、店員がしきりに勧めていたイセエビを食べておけば良かったと後悔。

3月6日チェックアウト後、荷物をホテルに預けてコタキナバルの町を散歩する。町自体はあまり大きくないが、百貨店やスパーなども沢山あり、ボルネオ島一の都会である。モスリムも多く、全般的にマナーも良い。

昼過ぎに空港へ行き、エアアジア 16:20 便を待つが余り説明も無く1時間ほど遅れる。クアラルンプールでの乗継に余裕を持っておいて良かった。

3月7日クアラルンプール 1:00 便で、関空へ 8:30 着。

6．おわりに

全国のさまざまな森を訪ねて、日本の森の植物相についてはある程度その組み立てを読み取れるようになったつも

にしろ、地元の物価から考えるととても割高な感じがするが、このような外国人向けのネイチャーリゾートにしてお金を得ないと、自然林の価値を見出し、残していくことが難しいのだろう。

ビリ村でボートに乗り換え、13:00 ビリ・アドベンチャー・ロッジへ。木道で宿泊棟がつなげられており、部屋にはクーラーもシャワーもある。

夕方に動物が出てきやすいということで、16:00 からボートクルージング開始。8人乗りのモーターボートで泥水の川を行ったり来たりしながら、川沿いの森の動物を観察する。

野生のオランウータンやテングザル、オナガザル、ホエザル、カワセミやサイチョウなど、さまざまな野生動物が楽しませてくれる。薄暗くなってもう何も見えなくなる頃、ロッジに戻って夕食。夕食後は、オプションで長靴とヒル避け靴下を借りて夜の森の中を探索したが、たいしたものは現れなかった。

3月5日 6:00 から早朝リバークルーズ。朝靄の中ボートは走る。テングザルなどが見られたが、結局ゾウは現れなかった。ロッジに戻って朝食をとり 9:00 には出発。ゴマントンケーブというコウモリのすむ洞窟を見学し、サンダカンへ戻る。

サンダカンでは、博物館や市場を散策する。言葉だけでは聞いていたが、日本との関わりの深い町であることを知る。

16:30 プロペラ機でコタキナバルへ戻り、再びシャングリラホテルへ。

夕食はちょっと張り込んで「セドコ」という屋外海鮮レストラン街へ行く。水槽にエビやカニ、さまざまな貝や魚が入れられていて、見ているだけで飽きない。素材と調理方法を言うと、その場で作ってもってきてくれる。日本円に換算するととても安いはずだが、もう現地の通貨感覚になってしまっているので、ちょっと躊躇してしまう。安いカニのチリソースと貝の生姜蒸し、焼飯を注文したが、とても美味しかった。今から思えば、店員がしきりに勧めていたイセエビを食べておけば良かったと後悔。

3月6日チェックアウト後、荷物をホテルに預けてコタキナバルの町を散歩する。町自体はあまり大きくないが、百貨店やスパーなども沢山あり、ボルネオ島一の都会である。モスリムも多く、全般的にマナーも良い。

昼過ぎに空港へ行き、エアアジア 16:20 便を待つが余り説明も無く1時間ほど遅れる。クアラルンプールでの乗継に余裕を持っておいて良かった。

3月7日クアラルンプール 1:00 便で、関空へ 8:30 着。

6．おわりに

全国のさまざまな森を訪ねて、日本の森の植物相についてはある程度その組み立てを読み取れるようになったつも

りである。しかし、今回ボルネオの熱帯多雨林に触れてみて、それらの知識では全く太刀打ちできないことが分かった。

森の樹冠に飛びぬけた 60mはあるかというフタバガキ、しかし、それは日本のブナやシイなどの優占種のように樹冠を覆いつくすことなく、ある間隔をあけて生えている。なぜ、背の高い樹種が樹冠を覆って光を独占しないのだろうか。熱帯多雨地域の水分が多い土壌中では根を深く張れず、その巨体を支えるために横へ広く伸ばした結果、そのようになっているのだろうか。また、その下を覆うさまざまな樹木、そしてそれらに着生するシダやランなど、その多様性に自分の頭が付いてこない。

熱帯雨林　フタバガキ

今回は熱帯多雨林のほんの入口を訪れただけであるが、その自然の大きさに圧倒された。ボルネオ島の奥には、何億年も前からの原生の森林が残されているという。その中にまだ人間が知らない自然の仕組みが、沢山隠されているのでは無いだろうか。一度、訪れてみたいものである。

家族で一番引っ込み思案だった末娘は、いつからこんなに行動派になってしまったのだろうか。セピロック・オランウータン・リハビリセンターの餌付け場でせっかく一番前に陣取っているのに、娘は後で他の観光客にまぎれてやってこない。父を敬遠するお年頃かと思ってほっておいた。帰国して、写真を整理していると、娘が、オランウータンを見ていた私の後姿を撮影していた。「父は背中で語る」と言いたいところであるが、ヨーロッパの連中と比べて、背低い、胴長い、足短い。オランウータンを見ているより面白かったそうである。

父の後姿、オランウータン体形

目次

＝山　行＝

赤石沢から赤石岳

2012年8月9日～12日

山本恵昭（昭和56年理卒）

浪川さん、大森さんと3人で、南アルプスの名渓、赤石沢へ行ってきました。

8月8日夜発、名神・新名神・東名・新東名と高速道路を乗り継いで、島田金谷ICへ。そこから大井川沿いに曲がりくねった道を2時間ほどかけて畑薙ダムに到着。

8月9日、畑薙ダム駐車場で3,000円の小屋利用金券を購入し、東海フォレストの送迎バスに乗る。一応8:00始発となっているが、7:00に臨時便が出た。それには乗れず、次の7:30臨時便に乗ることが出来た。1時間ほどで牛首峠へ。

遊歩道を少し歩いて川原へ下り、沢準備を整えて9:00出発。連続する小滝や淵を順調に越えていく。美しい沢であるが、下部は水量が少なく迫力に欠ける。1か所へつることができない淵が現われ、空身で泳いでザックと後続をロープで手繰り寄せる。泳ぐイワナを眺めながら平凡な川原歩きをしばらく続けると、取水ダムに13:00到着。取水ダムより上は水量も増え、北沢出合を越えるとまた滝が連続し名渓らしくなる。

赤石沢門の滝

14:30門の滝15mは、中央に巨大なチョックストーンを抱え、堂々としてなかなかの迫力である。ここはロープを出して確実にビレイ。右岸の草付き岩を登って、残置ハーケンを頼りに外傾したバンドを落ちロへトラバースする。ここで落ちたらロープで止まってもチョックストーンの間に挟まり滝の水流で溺れてしまうなどと想像しながら、緊張のトラバース。15:30次は洞窟の滝10m、ここもロープを出し、空身で登る。洞窟内の残置テープをアブミにして岩の間をすり抜け、出口の狭い穴から這い出る。洞窟の外から3人分のザックを吊り上げ、後続をビレイ。左岸からの崩壊地の大ガランは、非常に不安定な土混じりのガレ

場で越えるのに苦労する。

大ガランを越えた川原を泊地とする17:00。最適な場所は先行４人パーティが使っていたので、その下のそこそこの場所を整地してテントを張る。盛大な焚き火とイワナ塩焼きの予定であったが、先行パーティに釣られた後で釣果０尾。焚き火の横で寝てしまう。

８月１０日、朝からイワナ１尾確保し、焚き火で塩焼きに。7:30 発、ここから上部の川床はラジオラリア板岩が多くなる。海に住んでいた放散虫というプランクトンが変成した赤いチャート岩である。さすが赤石沢、赤い岩と青緑の水のコントラストがなんとも素晴らしい。

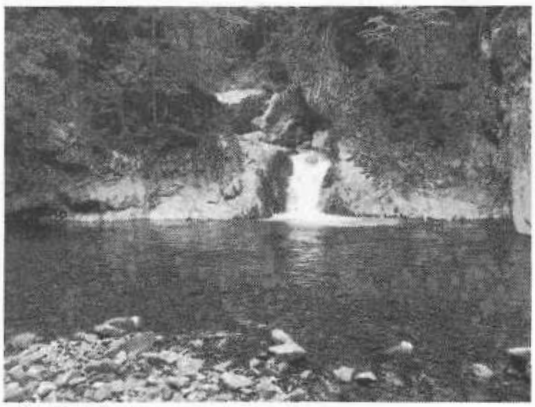
ラジオラリア板岩

8:30 大ゴルジュに到着。ここは右岸の大高巻き。シシボネ沢のガレを少し上って樹林帯の踏跡を辿る。途中、かなりの高度感で足を滑らせたら下の滝までまっさかさまという感じなので、念のためロープを出して１ピッチ分ビレイした。１時間ほどかけて川原へ戻る。

赤石沢大ゴルジュ

大釜まで行くつもりが、疲れて深い釜を持った３段の滝上で休憩。ふと見ると大イワナが・・・。我儘を言って大休止にしてもらい、ちょっと釣りタイム。大森さん達が急遽流木を集めて下さり、３尾塩焼きに。

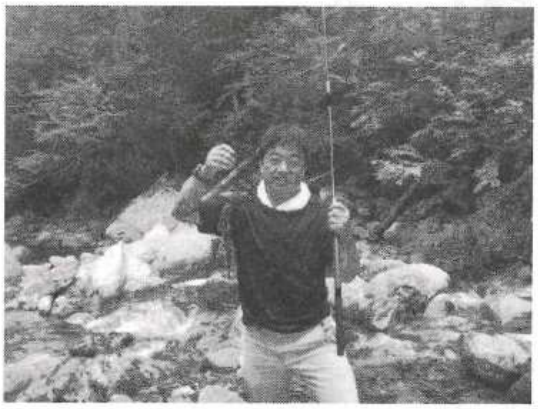
13:00 少し進むと明るく開けた大釜に到着。



赤石沢　大釜

滝は小さいのに、均整の取れた深く美しい釜である。しかも大物イワナが一杯悠然と泳いでいる。しかし、さすがに先を急ぎたい浪川さんにもう一度釣りタイムとは言い出せず、膝まで浸かり水中カメラで撮影のみとする。

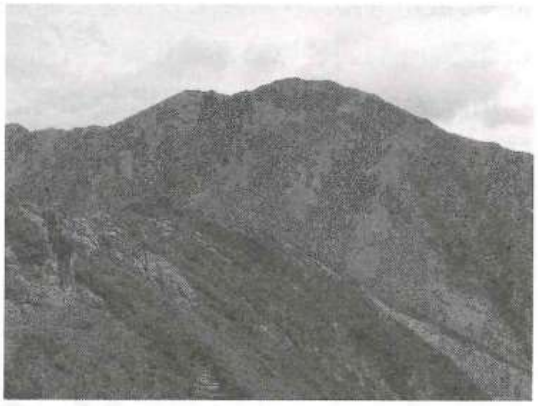
16:00 百間洞沢出合に到着。最適な泊地があり、今日はここまで。テント設営と焚き火は大森さんたちにお願いして、食糧確保に再び下流に。ここのイワナ達は持って行ったミミズはお気に召さず、覗きに来て食わないことも多い。飛びまわっている白い蛾を捕まえて餌にすると、盛んに食いついてくる。先日武田さんに頂いた毛ばりを使うと、一発で大物が釣れた。8 尾確保し塩焼きとみそ焼きに。時間を忘れて豪快な焚き火を楽しんでいると、日付が変わっていた。



武田さんに頂いた毛鉤で大岩魚

8月１１日、6:30 発。小滝を次々と越えていくが、小さな流れにもイワナの姿が見られる。大きな滝となっている枝谷を過ぎると百間洞大滝に到着 7:30。左岸の草付を登り、落ち口へスラブのトラバース。ここも落ちると終わりなのでロープを出して確実にいく。

あとは源流部をひたすら登り、9:00 百間洞山の家に着く。しばらくすると先行していたはずのパーティが疲れた姿で現れる。百間洞沢で間違えて支流に入ってしまい何とか稜線に抜けて 1 泊したそうである。



はるか遠い赤石岳へ

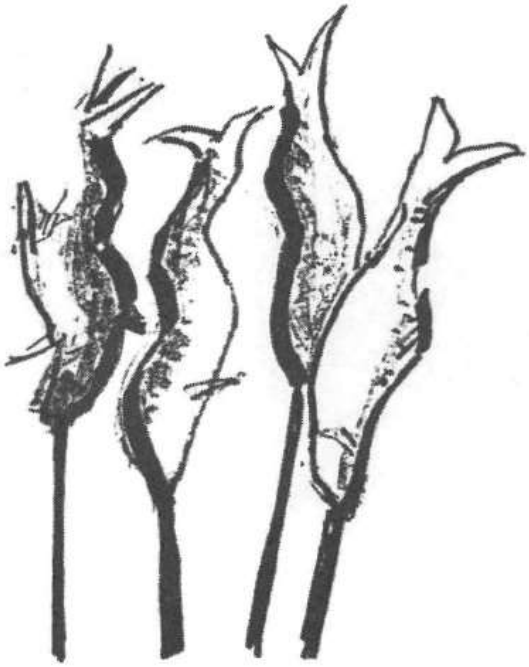
小屋前のベンチを使わせてもらって、のんびりと沢装束から一般登山姿に変身し、10:00 に出発。沢の緊張が解けて、荷物が一歩ずつ重くなっていく。長い道のりを何とか赤石岳山頂に 13:45 到着。急な下り道をひたすら辿るが、足が棒になっていく。16:00 頃から雷が鳴り雨も降り出す。コテバテで赤石小屋に 16:40 到着。バス搭乗時の金券 3,000 円に 1,500 円追加し、4,500 円で素泊まり。

水は無料。トイレ協力金100円。毛布などの寝具を使うとさらに500円いるが、シュラフを無料で使わせてくれた。雨で濡れた物も乾き、快適。

８月１２日、朝食を済ませ、これから登る他パーティを見送って6:00にのんびり出発。昨夜のストレッチ効果も歩き始めの30分のみ。すぐに膝はガクガク、沢でひろった木の棒を支えになんとか椹島に9:30到着。10:30のバス予約を取り、浪川さんにケーキセットをご馳走になる。

畑薙ダムへ戻り、途中白樺荘で入浴500円。お土産に茶葉を買ったりそばを食べたりしていると、高速道路の大渋滞に巻き込まれ、23:00神戸に帰宅。

赤石沢は、以前から名渓としての噂を聞いていて、一度は訪れてみたいと思っていました。取水ダムが出来て「沢の王者」と呼ばれた昔の面影はなくなったといわれていますが、変化に富んだ素晴らしい沢でした。南アルプスの豊かな緑と豊富なイワナ、沢に２泊して焚き火と釣りを堪能しました。最後に、右手に聖岳、左手に荒川岳を望みながら、赤石岳3120mに登り上げるのもご愛嬌か。ただし、中高年にとっては体力的に厳しい。鉄人浪川さんもさすがに苦労されていました。



目次

＝ 富 士 山 ＝

投稿者：山本恵昭
投稿日：2011 年 9 月 20 日(火)

２２日夜発で、阪大の先生と大森さんとで富士山へ行きます。

阪大安全衛生管理部のお手伝いで、5合目から標高 200mごとに放射線量調査を行い福島原発事故の影響を調べます。

福島原発から北西方向に高い値で放射性セシウムが検出されていますが、静岡のお茶で検出されたように他の拡散ルートも有るようです。興味あるデータが取れれば、来年予算を計上して本格的な調査を行うそうです。

投稿者：山本恵昭
投稿日：2011 年 9 月 24 日(土)

台風の後の寒気が入り、富士山は初冠雪。その真っ只中、大阪大学Ｓ先生と大森さんとの 3 人で登山と放射線の測定を行いました。

23 日 5：30 富士宮口駐車場でＳ先生と合流、天気が悪いのでしばらく待機。6：30 雨もやみ、天候回復の天気予報を信じて出発。でもまたすぐに雨が降り出す。七合目付近からは霙となり、登山道にも積もり始める。

9：00 八合目避難小屋に入って、しばらく様子を見る。10：30 霙もやみ視界も出てきたため、再び上に向けて出発。

12：30 山上の浅間大社奥宮に到着。社で風をよけて休憩し、裏手 3720mで放射線の測定を行う。

13：30 下山を開始し、標高 200mごとに測定を繰り返しながら、17：00 富士宮口に無事下山。

Ｓ先生の十分データが取れたという判断で、翌日予定していた須走ルートからの測定はキャンセルに。その夜は、道の駅すばしりで車中泊。

24 日朝、道の駅の駐車場から富士山が望める。晴れた空にてっぺんが白くなった富士山が美しい。

9 月に雪山に登ったのは初めてです。さすが富士山。Ｓ先生にとっては、初めての本格的登山が 3700mの雪山となり、かなり厳しかったと思います。でも、良く頑張られました。

1 日で測定を終えるのだったら、23 日はゆっくりして 24 日に登ればよかったかも。
でも終わってからの「たられば」は意味なし。大森さん、サポート有難うございました。

投稿者：大森雅宏
投稿日：2011 年 9 月 25 日(日)

ご近所山本君のお誘いで行ってきました。阪大のＳ先生は初めての高い山が雨とみぞれ、ただ登るのも大変なのに計測作業と馴染みのないおっさん二人とでご苦労も多かったのではないかと思います。

1 枚目　頂上をバックに。200m 下りるたびに計測。この辺りは好天です。

2 枚目　2400 に下りてきて、「もう歩かなくていい！」の笑顔。

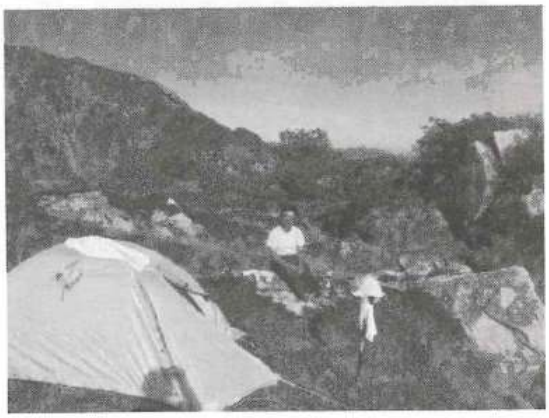
3 枚目　こんな銘柄があるんですね。車中宴会用に持参しましたが、疲れて祝盃どころではなくそのまま持ち帰りました。

目次

山行集 - 掲示板より

大猫山～猫又山

投稿者：山本恵昭
投稿日：2011 年 10 月 11 日(火)



10 月 9 日 10 日で猫又山に行ってきました。
台風の影響か、期待した大猫平の紅葉は今ひとつでしたが、うっすら雪を纏った剣岳西面とずっと対峙しながらの山行となりました。
大猫山東の日本庭園のような草地で、チングルマの群落を避けながらキャンプ。朝夕、テント横の岩の上で、ただひたすら剣を眺める贅沢な時間を過ごしてきました。
猫又山山頂では、以前カンさん、浪川さん、大森さんと山スキーを楽しんだ思い出に浸っていました。

急登の中、キャンプ用に大量の水を担ぎ上げたせいか、今日は筋肉痛です。
稜線の所々に池塘があり、水は透明で意外と綺麗だったので今の時期なら利用できそうでした。

目次

山行集 - 掲示板より

70・65・60 恵那山 山行き

投稿者：井上 知三
投稿日：2011年10月16日(日)
先日の秋の集会の前日にカンさん・石原さん両先輩と私で以前から計画を立てていた恵那山に登ってきました。

１０月８日(土)早朝６時に石原さんと西宮で逢いその後名神大津でカンさんと合流その後一路中央道 園原迄走行、三連休初日である事もあって少々渋滞あり予定より遅れて園原に到着。
登山ルートは頂上まで最短距離の広河原ルートを選択、登山口の駐車場に着くと時間が遅かったせいか駐車場は満車状態でなんとか路肩に駐車。

カンさん・僕・石原さんの順番で登り始めました。ただひたすら樹林帯の登り景色も何んとなくいまいち、カンさんの馬力に驚きながら登って行きました。７０才の馬力に驚き・驚きの凄いパワーで頂上へは２時間４０分ぐらいで到着しました。
頂上付近も樹木の中で景色は・・・？【日本100名山】昼食後速やかに同じルートを下山。
日曜日に予定のあるカンさんを中津川駅まで送り解散。カンさん石原さん楽しい一日ありがとうございました。又ご一緒させて下さい。

目次

富士西麓の山ふたつ

投稿者：越田和男
投稿日：2012年 3月 4日(日)

今週(2/27～29)は、パミール中央アジア研究会の仲間４名（皆さんＪＡＣ会員）で、富士の西麓・田貫湖畔の休暇村「富士」に２泊して、ささやかな雪山歩きをして来ました。

①烏帽子岳 1257m
本栖湖側登山口 900m から２ピッチ、1時間強の登り。雪道だったがアイゼン不要で山頂に。残念ながら富士は雲の中。精進湖、本栖湖や樹海を見下ろしてホットウイスキーとサンドウィッチの昼食を楽しんだ。さらに北へ稜線づたいに小一時間登ると、いかにも観光業者の名付けらしい厭らしい名前の「パノラマ台」なるピークがある。明治時代にこの辺りを歩いた英国人 H.G.ポンティングなる人の紀行文中には、明神山という名前があり、この方がよほどすっきりするのだが。

②長者ヶ岳 1336m
田貫湖畔 670m からの標準タイム２時間の登りだが、積雪もあり、老人グループらしく、３時間かけて登った。この日は晴天に恵まれ、終日迫力のある富士の西面・大沢崩れをまじかに望めた。山頂からは南アルプスの峰々も遠望出来て大満足。昨日の山より雪が多く、下りにはアイゼンを着けようかどうか迷いながら結局横着してつぼ足で降りてきた。

二日間まことに静かな山歩きで、一日目はゼロ、二日目にかなり山慣れた母娘の２名に会ったのみ。いまどきこんな山を歩くのはよほどの物好きということだろう。

さて、三日目だが、夜半よりのドカ雪で山歩きは断念したが、田貫湖畔の雪景色がオマケとなった。帰路の東名高速が雪の為沼津ー大井松田間が通行止めとなり、並走する２４６号線の大渋滞に難儀した。大井松田から横浜にかけて対向車線に渋滞しているおびただしい数のトラックの車列をみて、日本経済も大したもんだと変に満足して家路についた。

目次

山行集 - 掲示板より

コルチナ・ダンペッツォ

投稿者：田邊　潤
投稿日：2012年 3月12日(月)

昨日コルチナより帰ってきました。
昨秋、彼地へ行った時にはどこにスキー場などあるのかさっぱり見えませんでしたが、ドロミテの岩峰の下と森の中に、私の感じとしては無数のコース・ビステがあり、ドロミテだけで総延長数百kmもあるとか、ともかくスケールと・バリエーションの多様さはまさしく世界一と思われほど素晴らしいものでした。ただスキーツアーのスケジュールは厳しく、われわれ年寄りには、ちょっとのんびり滑ってくる、というより適当に休まないと体が持たないほどのものでした。参加者のスキーレベルは高く、女性スキーヤーにも学生時代のスキー選手がいたりして、我々年寄りはヒィヒィと付いていくという状態でした。でも、あまりに素晴らしいスキー場なので機会があればまた行きたいです。

投稿者：飯田　進
投稿日：2012年 3月16日(金)

先週一週間ほドロミテに行ってきました。メンバーは酒の飲まない田辺、南井組　少し飲む岡、飯田組の四人。トニーザイラーが冬季オリンピックで初のアルペン三冠王を取った会場
コルチナダンペッツオの町に泊って、周辺のスキー場へ。コルチナの町からはフェローリア、クリスタッロ、トファーナの三つのゲレンデガあり、いずれも大岩峰の中にあり、麓からではコースが見えません。その大岩峰のほぼ天辺に近い岸壁にゴンドラが吸い込まれていきます。上がっていくとそこに適当な雪面があり、リフトがさらに奥の岸壁に向かって登っており、また適当な岩溝がコースを造っております。丁度劍の頂上から長次郎雪渓を滑るようなものです。あれほどはきつくはありませんけれどね。滑る高低差は１０００メートルくらい、八方尾根や栂池スキー場位の規模です。そんなスキー場が十数か所点在して、リフトゴンドラの類が総計４６０基あるのがスーパードロミテというところです。圧巻はセラ山群一周ツアー。コルチナからバスで約一時間。セラロンダの大岩峰群を峠を越え、コルを越え、時計回りにまた

その逆回りにゴンドラに乗っては、滑り降り、ロープウェーに乗ってはズルズルボッテン、転びつマロびつ回遊して行く。言ってみれば、立山、劒の周辺を、室堂からゴンドラで立山の天辺へ、そこから黒部湖へ滑り、ロープウェーで雷鳥乗越へ、劒沢を下ってゴンドラで池ノ谷の小屋へ。そこからチンネの天辺にゴンドラで。リフトを使って大窓の頭へ、そこから番場島まで滑ってまたロープウェーで大日尾根へ。滑って室堂平へと帰るようなものです。途中しんどいから帰りたい、と言っても、剣沢の下で駄々をこねるようなもの。帰るのは滑るより大変です。コルバラという町から出発したのですが、そのコルバラの町が見えてきたときには、正直、助かった、と思いました。登って下って６０キロ。滑るだけでも３０数キロ。N川君なら病みつきになるのでは。ドロミテのスキー場はいずれも大岩峰を利用して、そこから派生する岩溝を利用、麓に繁るモミの木の森に縦横にコースが付けられております。一週間ではほんのサワリでしたが、十分堪能しました。楽しい楽しいドロミテスキー一行でありました。

http://6808.teacup.com/konanalpine/bbs

目次

西上州の山ふたつ

投稿者：越田和男
投稿日：2012 年 4 月 27 日（金）

今週はうまく晴れ間をつかんで一泊二日（4/24～25）の山歩きが楽しめた。西上州の山と云えば、妙義山、荒船山などの岩峰が有名だが、概して尖がった山が多く、今回登った物語山、三ッ岩岳もなかなか鋭い山容だった。

物語山　1019m
こんにゃくで有名な下仁田の町から西へ入った西牧川の上流にある。取っ付きの荒れた林道で同行車が立ち往生して、抜け出すのに難儀するハプニングあり。林道終点から距離は短いがいきなり４００ｍの急登を何とかクリアして、悲しい伝説のある風変わりな山名の頂きに達した。南峰、中央峰、西峰の他にメンバ岩なる奇岩峰がる。

三ッ岩岳　1032m
南牧川の支流大仁田川の左岸に聳える、文字通りドライチンネン（或いはトレチメ）といったところか、結構な迫力の岩峰群である。これも取り付きからいきなりの急登４５０ｍを固定ロープに助けられての登頂。狭い頂上には賑やかな先行４人パーティが居たが、我々の到着で腰を上げて下って行った。いつもならワインで乾杯のところだが、結構ヤバイ下りと歳をわきまえて誰も飲もうとは云わなかった。

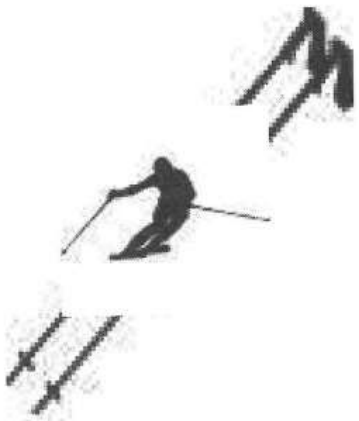
例年なら両峰とも頂上付近はアカヤシオが満開で花のトンネルとなるそうだが、今年をまだ花はまばらだった。とはいえ、谷間の山里では紅、白、黄の色んな花々が満開で、豪勢な花見ドライヴとなった。帰路立ち寄ってひと風呂浴びた下仁田温泉・清流荘もまた花に埋もれていた。一行後期高齢者２名を含むＪＡＣ図書委員会の仲間５名。

目次

扇の山　山スキー

投稿者：山本恵昭
投稿日：2012 年 4 月 30 日(月)

大森さん、川野と３人で、扇の山に山スキーに行ってきました。
２８日、昨年カニキノコ会で利用した上山高原避難小屋まで除雪されていた。そこから山スキーを履いて、林道とブナ林の中を２時間で小ズッコ避難小屋。山頂避難小屋まで行こうと思えば行ける時間だが、今日はここまで。貸切、薪ストーブでのんびり鍋料理。
２９日、ブナの森を山頂へ２時間。４月の嵐のせいか、折れた枝が雪面に沢山落ちていて行く手を阻み、歩きにくい。山頂の避難小屋でのんびり。積雪はまだ１ｍ～２ｍ程あり、いつもキノコ狩りで格闘するネマガリタケは、完全に雪の下。復路は上りもあり、１時間で小ズッコ避難小屋。さらに３０分ほどで上山高原。コシアブラやコゴミ、ワサビを採って、お土産に。湯村温泉薬師の湯で汗を流して神戸へ。
今年は、雪が多く近場で雪山と新緑を楽しみました。川野は山スキーを初体験。２日間とも快晴、半袖でも暑すぎるくらいの天候のなか、のんびり登山でした。



目次

奥三方岳

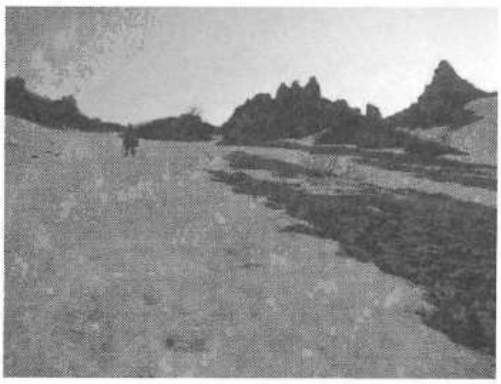
投稿者：山本恵昭
投稿日：2012年 5月 6日(日)

神戸大現役から予定していた穂高合宿中止の連絡を受け、急遽大森さんと岐阜県白川村の奥三方岳に１泊で行ってきました。

４日、道の駅「飛騨白山」で仮眠して、６：４０すぐ前の林道を登る。３０分程でブナ林の急登の道、1300mほどからは残雪の上を歩く。朝は晴れていたのに、雲行き怪しくなり時々雨も降り始める。やせ尾根を超えると、三方崩山 2058mに１３：４０着。いったん下り、広い雪面を登り返す。奥三方岳の肩 2000m付近にテント設営１５：００。テントに入ってひと段落すると、天候が急変し突風とみぞれが激しく打ち付ける。夜中、風が強かった。

５日、風が強くガスに包まれているが、天気は回復傾向と判断。５：４０発、窪地のような不思議な地形を横目に、ひと登りで奥三方岳 2150m山頂６：００着。上空に青空、雲にブロッケンが出たと喜んでいると、見る見る晴れて白水湖と白山東面台地が目前に広がった。奥三方岳からさらに西に進み、1980mピークとのコルから急な崩壊地を適当に雪面をつないで下る。森の中を下ると７：３０間名古谷林道跡へ出た。ヤブだらけの林道跡を辿り、さらに大白川林道をイワナや山菜と戯れながらひたすら下ると登山ロゲートに１３：００。道の駅「飛騨白山」併設の「しらみずの湯」で汗を流して、渋滞の中神戸へ。

急に計画を立てて、ルート設定をしたので本当に実行可能か不安でした。しかし、行ってみると、緩急取り混ぜた不思議な地形、程よい緊張感、雪と新緑のコントラスト、自然度豊かな巨木の森、山の幸と、今の時期の魅力をぎゅっと濃縮したような山行となりました。



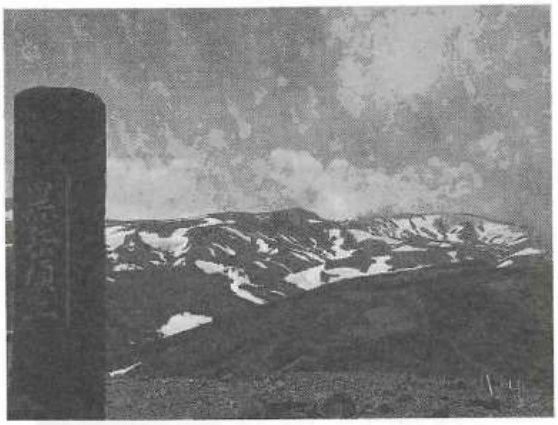
目次

久しぶりの山―大雪山（黒岳）

投稿者：福田信三✉
投稿日：2012年 6月 21日(木)

1週間ほど北海道に滞在。その間大雪の黒岳に登りました。
前日の雨が嘘のように止み、思い切って層雲峡からロープウェイに乗り込みました。

ロープウェイは80人乗りの大型ですが、秋の紅葉シーズンには長蛇の列ができるとのガイドの話でした。約10分で五合目に到着します。リフトの起点までの200mの遊歩道にもたくさんの高山植物がみられました。シーズン初めで人もまばらでしたが、高山植物にも早咲き遅咲きがあるようです。リフトで15分、終点は七合目でここからは歩きとなります。
黒岳頂上1984mまでとにかくジグザグの登りで、雪渓からの融水で小川や湿地になったいんけつな道に始まり、行程の半分くらいが雪渓でした。久しぶりの雪渓に滑ったり転んだりしてもがいた後に、乾いた岩道に変り頂上が見えました。頂上からは旭岳を中心にして大雪の全貌を見ること出来ました。やや温くなった缶ビールでも、至福ののど越しでした。
下山ではストックもピッケルもなくグリセードが出来ず、準備の悪さを反省しました。
もがきながらの上下せいか、翌日は太股の痛みにしかめっ面でした。



目次

上信国境・浅間隠山

投稿者：越田和男
投稿日：2012年 4月 18日(水)

都会の花見は終わったので、例年の通り花と残雪の山を楽しもうと、家内と信越国境に出かけた。里の桜はほぼ満開だったが、山あいでは蕾はかたく、山々はまだまだ冬枯れで残雪も多く、やっぱり今年は寒かった。

横浜の我が家を出るときは曇っており、富士山も見えなかったが、中央道の笹子トンネルを抜けると、甲斐駒、鳳凰三山など南アの連山がばっちり、甲府盆地を北上すれば左に八ヶ岳。右手には異常に雪の多い金峰山、やがて前方にどっしりと浅間山など、名峰のオンパレードを楽しみ、その日の宿を軽井沢の山の古い温泉場小瀬温泉にとった。ここは昭和三〇年代に訪ねたことがあり、その時は今は亡き超ナローゲージの軽便鉄道「北軽電鉄」の旅だった。森の中の一軒家は立派になったが当時の面影を残しており、懐かしかった。

翌日（4/17)は，二度上（ニドアゲ）峠からガスの中をうっとうしかったが好天を期待して山歩き。道中半分くらいは雪道で、先行者は簡易アイゼンを履いているらしい。少々歩き難かったが、構わずつぼ足でよたよた登ったら、標準タイム９０分のところを２時間強もかかった。幸いガス帯をぬけたら視界が広がり、浅間隠山頂上 1,756mからはどっしりと雪を冠った浅間山東面がまじかに望めた。赤ワインとともに大いに達成感を味わったのは言うまでもない。先行パーティは山慣れたオバサン４人組で、景色よりオシャベリに夢中で少々うるさかったが、ちゃんとした服装で、熊よけの鈴を鳴らしながら颯爽と降りていき、あとは薄日の差す静寂の山頂をしばし楽しんだ。

ちょっと投稿が少ないようだったので駄文を綴ってみました。悪しからず。

目次

ポンポン山

投稿者：塩崎将美
投稿日：2011 年 10 月 3 日(月)

高槻に住む長田高校山岳部の先輩に誘われてポンポン山に行ってきました。高槻駅で待ち合わせバスに３０分、終点川久保から渓谷沿いを歩きだす。最初は林道、途中からは登山道、づっと水の音を聞きながら歩く。全国水源の森百選に選ばれた森はうっそうとして気持ちが良い。途中出会ったのは前後して歩いた男性１人と山仕事のお兄さん３人に尾根に出る前にすれ違った５人。静かな５キロの道をユックリ登り頂上へ。頂上はさすが人気の山、３０人ほどが写真を撮ったり食事をしたりしてました。はやりの可愛い山ガール達も。勿論記念写真のシャッターは彼女に押してもらいました。眺めはバッグン、大阪梅田のビル群から足元まで大阪平野、その向こうに生駒山、あのへんが奈良かな？東を見ると京都が見え京都タワーも本願寺の大屋根も確認できる。その向こうに比叡山と比良の山々、北は愛宕山が大きく見え亀岡も見える。ほんとに眺めの良い山です。食事の後、本山時、神峯山寺経由で下る、バス停を通り越しおまけに摂津峡を散策、頂上から８キロをノンビリ歩きまし紅葉の時期に再訪してみたいと思いま

した。
ポンポン山の標高は頂上の看板によると 678.9m。ほんまかいな、数字が綺麗に並びすぎ、最後の９はおまけかな？写真の看板の右後ろが京都の愛宕山です。
川久保バス停（標高 230m）10：40 ～ 頂上（678.9m）12：25 ～ 本山時 1：50 ～ 神峯山寺 3：00 ～ バス停 4：30

投稿者：廣瀬健三
投稿日：2011 年 10 月 6 日(木)
去る６月７日、同じコースで登りました。
一昨日は愛宕山に登り、心地よい涼風を満喫。何れもＪＡＣの「ゆるやか山行」で、平井一正先生も大変お元気に参加されました。

目次

山行集 - 掲示板より

氷ノ山横行渓谷源流

投稿者：山本恵昭
投稿日：2011 年 11 月 27 日(日)

またまた氷ノ山横行渓谷の源流に行ってきました。
くるぶし位までの積雪の中、長靴で沢通しにつめて、先日見つけた二股の上の台地にテントを張り１泊してきました。
ここはブナや杉の大木に囲まれて、なぜか根曲がり竹も少なく、気分の良い所です。
一面の雪化粧の中に、人の気配であせって走り去った鹿の足跡がいっぱい有りました。
昨日は夕方着で時間的に余裕がありませんでしたが、今朝はのんびり過ごし周辺を散策の後、帰ってきました。
キノコの季節は終わり、遅ればせながら雪山へと替わってゆきつつあります。

目次

山行集 - 掲示板より

東丹沢の低山ふたつ

投稿者：越田和男
投稿日：2011 年 12 月 3 日(土)

今週は会社ＯＢ仲間５人で紅葉を求めて丹沢に行きました。低い山二つを二日かけて、山麓の鉱泉宿に一泊という何時ものパターンです。泊まった宿は光沢寺温泉「玉翠楼」。昭和初期築の木造２階建て、結構な露天風呂もある、家族でやっている静かで素朴ないい宿でした。
@13,000－

① 鐘ヶ嶽 561m
古くからの信仰の山で、足ヶ久保という集落からは尾根づたいの風情ある登山道には３０丁目までの石標がある。２６丁目からの最後の登りは４００段の石段で結構しごかれた。山頂には大きな寺があったというが、明治の廃仏毀釈で廃寺され、古びた浅間神社が残る。生憎の曇り空だったが、東京方面は何とか見通しが利き、スカイ・ツリー遠望というおまけ付きで昼食を楽しんだ。
南西に下る下山道は、結構きつく、林道へ降りつく手前は老人グループには気

合の抜けない鎖場が続いた。

② 仏果山 747m
宮ヶ瀬湖の北東。これも信仰臭い山名だが、前日の山とはうって変って山頂には鉄塔があり、湖や丹沢山塊を望む展望台になっている。湖畔の駐車場から２時間の登りで、老人向けにはほど良いコース。雨の予報だったのが、晴れ間もあって、紅葉を楽しんだ。

海外トレッキングも良いが、温泉（＋酒）付きの変化に富んだ日本の山歩きも捨てがたいものです。

山行集 - 掲示板より

京山．西山（ＪＡＣゆるやか山行）

投稿者：廣瀬健三
投稿日：2011 年 12 月 30 日（金）

昨年四月の稲荷山行きに始まり、今年三月に比叡山に登り、数回にわけての東山三十六峰巡りを
終えました。今年四月からは、地元の平井一正先生も参加され、原則毎月一度の軽登山にて、去る 13 日の最終回を終えました（こんぴら山や沓掛山と珍しい山や由緒あるお寺などめぐり、ノンビリと歩く）
此の最終回では桂の仁左衛門の湯で忘年会があり、先生が此のたび日本山岳会の名誉会員に成られた事を、皆で
祝いました。ＪＡＣ関西ではテント泊のハードなもの、近畿分水嶺踏査、そして「歴史に触れながら低山を歩く；
ゆるやか山行」を主体に会員が各々に見合った登山を楽しんでます。我がＫＡＣも部員が増えてこのように
成ればいいですが。

目次

＝紀　行＝

パキスタン北部フンザ渓谷に出現したアッタバード湖について

佐野　方則（昭和41年・新高）

アッタバード湖は、2010年1月4日15：45、地震による地滑り、崩壊によりインダス川の支流フンザ川が堰き止められて出来、その間のパキスタンと中国を結ぶカラコルムハイウェイも水没しました。

私は、翌年の2011年6月に、西遊旅行のツアーでパキスタンと中国との国境「地図の空白地帯」と言われるシムシャル渓谷に暮らすワヒ族の伝統的な文化、風習を間近に感じるカルチャートレッキングに参加した時に、この湖を縦断したので、簡単に報告させていただきます。

フンザの中心地カリマバードからカラコルムハイウェイをジープで1：20位北上し、崩壊した大きな岩が積み重なった丘を、急ごしらえの凄まじい砂埃が立つ、でこぼこ道で超えると湖が見え、簡単な船着き場に着きました。ここでボートに乗り換え、1：20位でカテドラル（トポップダン 6106m）を前方に仰ぎ見ながらフサイニ村の船着き場に着きました。

堰き止め部分から流れ出るところは見られませんでしたが、決壊の恐れもあるとかで水抜き工事なのか作業内容は分かりませんが、麓には多くの重機や作業小屋が見られました。

ガイドによると融雪期に水嵩が増し、長さ22ｋｍ、深さは100mもあるところがあり、アッタバード村のほかにも２つの村が沈んでしまったそうです。関係する地元の人々は大変だと思いますが、一旅行者としては、ちょっとしたフィヨルドクルーズの雰囲気が味わえ、2008年3月下旬、アンズの花とカラコルムの山々を見に訪れた時とは様変わりの景観に驚かされました。途中の水の中に白く枯れたポプラが立ち並ぶ陸の孤島になった村々では、臨時の船着き場や造船所（カラチから船大工が来ているとか）が作られつつあり、生活再建への動きが見受けられました。

湖で運行されている船は様々で、私たちの乗ったボートはグラスファイバー製の救命ボート？に中国製のエンジンを積んだものでしたが、木造船や、軍は上陸用舟艇、カラコルムハイウェイを走るバス会社の一つナトコのボートも見かけたので、バスと乗り継げるのかもしれませんが、普通のバスでは堰き止め部

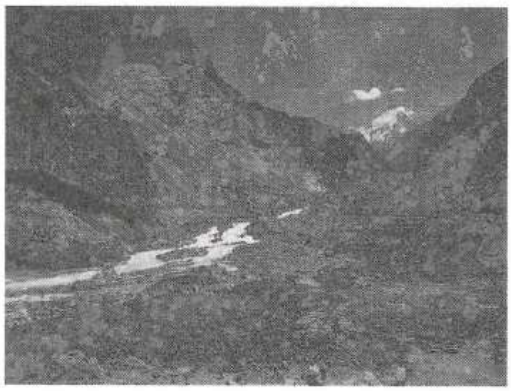
の丘を越えるのは無理なように思えました。

カラコルムハイウェイは中国の援助で1958年から20年間かけて完成し、重要な物流ルートとして、また中国からアラビア海へ出る戦略的な重要性が増しているようで、過去二回通った時には各所で中国人技術者による測量や改良工事が行われておりました。中国にとって今回の突然の湖の出現は、想定外だったのかどうか分かりませんが、物流が極端に細り、さぞ困惑しているのではないでしょうか。

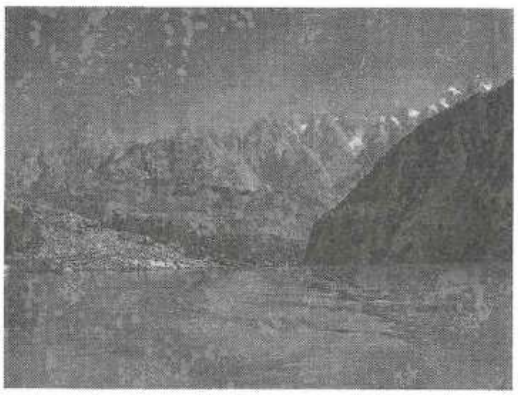
湖から岩壁がそそり立っているところも多く、そこを穿って湖畔に新しい道路を通すことになるのか、長期に亘りボート連絡の現状が続くように思われます。

以　上

追記　グーグルで「アッタバード湖」を検索し、西遊旅行の「アッタバード湖ーブログ」をみると、2010年10月の状況が写真入りで紹介されています。



湖の堰止め部から流れ出るフンザ川
（左前方の斜面が崩壊か）



湖の上流側フサイニ村の船着き場と
カテドラル（トポップダン 6106m）

湖の堰止め部と船着き場

湖の上流側フサイニ村の船着き場

湖の堰止め部（右側の斜面が崩壊か）

湖の始まりとフサイニ村

目次

＝紀　行＝

エチオピア再訪

南里　章二（昭和45理）（昭和47院）

2011年末から2012年始にかけて久しぶりにエチオピアを旅した。首都アジスアベバの光景は初めてエチオピアを訪れたときとそれほど変わりはない。ただ建設途上のビルがやたらと多く、そのわりには忙しく働く建設作業員の姿が見えてこない。何もかもがゆったりと動いているようだ。２７年前、ここにはおびただしいソ連の軍用トラックが行き交い、世界各国からのジャーナリスト、ボランティアスタッフで溢れかえっていた。当時のエチオピア軍事社会主義政権のメンギツス大統領(199１年、ジンバブエに亡命)は、北部のエリトリア、ティグレ両州が分離独立を求めて起こした反乱をソ連の軍事力を借りて、押さえ込もうとしていたし、打ち続く干ばつに飢餓状態が蔓延し、政府の無策も手伝って多くの餓死者が出たことが世界中に報道され、各国からの救援活動が活発に行われていたからだ。

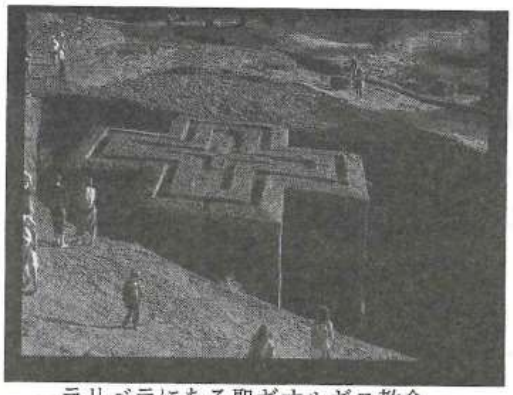
私もボランティアスタッフの一員として、１９８５年のひと夏を救援活動に勤しんだ。アジスアベバから北に 500キロ、中部の町コンボルチャから山奥深く分け入ったアジバールという村が救援活動の一拠点であった。日本からは２人の医者と３人の看護士、３人のコーディネーターが甲斐甲斐しく医療活動に当たっていた。重度の病を患っている人々を収容していた重病棟からは栄養不良で痩せこけた人々が次々に死体となっていくのを毎日悔しく眺めなければならなかった。

私の任務は不足がちの医療器具、薬品をチェックし、帰国後日本でそれらを入手したあと、現地までの輸送ルートを確実に設定することであった。それをしなければせっかくの救援物資も闇市場で売買されてしまうか、野ざらしにされる可能性が高かった。不正を黙認しがちな郵便局員を粘り強く説得し、受領、輸送報告を約束させ、アメリカのキリスト教系の救援組織ワールドビジョンの小型飛行機のパイロットたちの協力をあおぎ、現地までの空輸と受け渡しを依頼した。帰国後講演活動で得た資金で物資を買い揃え、甲南中高の文化祭で生徒たちが集めてくれた募金で輸送費をつくり、無事にアジバールに届けられたことを確認することができた。それ以来アジスアベバへは、独立したエリトリアやチャド、ソマリアに飛ぶ飛行機を待つためにだけ３度訪れたが、飢餓救済の記憶が

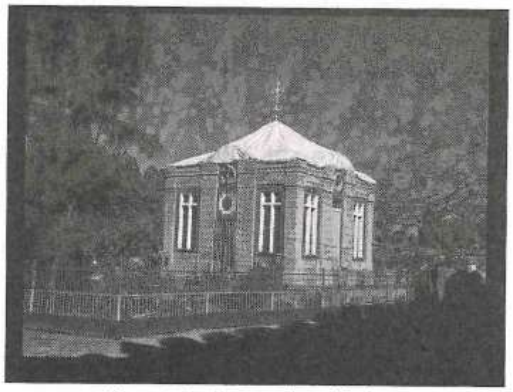
生々しくとても観光旅行などする気になれなかった。

しかしエチオピアはアフリカの中でも古い歴史の記録が残っている国である。どうしても再訪せねばならない。周囲がすべてイスラームの世界となったのに何故エチオピアだけがキリスト教を奉じる国で居続けられたのか。ムハンマドがメッカでイスラームを布教しようとした時、ムハンマド一派は多神教を奉じる人々から弾圧を受けた。ムハンマドは一時メディナへ逃れたが、他の一派は当時紅海を挟んだ対岸のキリスト教国であったエチオピアへ逃れた。そこの人々が彼らを手厚く保護したので、後におこるイスラームの拡大運動の際、イスラーム勢力は恩義あるエチオピアには攻め込まなかったからと云われている。飢餓救済に駆けずり回った２７年前のエチオピアでの記憶は徐々に薄らいでいくのにラリベラ、ゴンダール、アクスムなどの古都に残る見事な岩窟教会、城塞、オベリスクなどを見て思慮深い昔のエチオピアの人々に思いを馳せると永遠の歴史の重みをしっかりと感じずにいられなかった。

アジバール（JVC)の診療所に集まってきた人たち（1985年）



ラリベラにある聖ギオルギス教会
（一枚岩をくりぬいたもの）



アクスムにあるシオン教会。
このなかにアーク（十戒を入れた箱）が納められているという。

クリスマスの礼拝に集まった人々
（バハルダールのエチオピア正教会）

目次

＝紀　行＝

山岳鉄道乗車の記

越田和男（昭和36年理）

特に「乗り鉄」というほどではないのだが、山岳景勝地帯を走る鉄道には乗って見たくなるたちである。これまでに大分あちこちの山間を走る鉄道に乗ってきたので、たまったメモから記録を抜き出してみた。 独断と偏見で景観重視で勝手に選んだ「山岳鉄道」。ラック・レール（歯型軌条）の有無、標高差、最大勾配などは関係なし。ケーブルカー、ロープウェイ、リフトは含まない。同好各位のご参考になれば幸いである。

1　アラスカ鉄道の旅

1966年8月31日～9月1日

（当時はアメリカ合衆国国有鉄道・現在アラスカ州政府経営）

アンカレッジーMt. マッキンレイ国立公園駅　376Km　7.5時間

ーフェアバンクス197Km　4.5時間

非電化、ディーゼル機関車の牽引。

初めての海外、独り旅。留学先のオレゴンに向う途中のささやかな寄り道で、先ずは米大陸の最高峰との初対面を果たした。一日一便で今のような豪華車両ではなく、ローカル色豊かな大型車両にゆっくり揺られての旅。山に近づくともう興奮状態だった。

2　シャモニーにて

1976年3月28日

フランス国鉄（SNCF）：シャモニーーアルジェンティエール 8Km　16分

出張で、月曜日にジュネーブの予定が入ったので、すかさず週末をシャモニーで過ごそうと、山にも鉄道にも興味を示さない同行者を説き伏せるのに難儀したが、晴天に恵まれ、決行の甲斐があった。滞在中、谷の上流に向かう列車に、あても無く飛び乗り、次の駅まで往復、つかの間、わずか10数分の車窓のドリュ西壁の迫力に釘づけになった。

3　グリンデルワルト初訪問

1978年　4月15日～16日

ベルナーオーバーランド鉄道（BOB）：インターラーケン・オストーグリンデルワルト

ウェンゲルンアルプ鉄道（WAB）：グリンデルワルトークライネシャイデック

この時もまた、出張で月曜日にジュネーブのアポイント。グリンデルワルトへの一泊行を試みた。天気悪くユンクフラウヨッホ行きは割愛し、クライネシャイデックまでとしたのは正解だった。ヴェ

ッターホルンを背にした教会の墓地に戦前この地で亡くなった先輩・田口一郎さんの墓を見つけて黙祷した。墓石には“ICHIRO TAGUCHI AUS TOKYO”　と刻まれていた。(この墓石今はない)

4　アールベルグ越え

1985年4月20日～21日

オーストリア国鉄(OBB)＋スイス国鉄(SBB)：インスブルック―ブックス

178Km　約3時間

週末をはさんで、インスブルックに所用あり、スイスとの国境にある小国リヒテンシュタイン1泊行を試みた。車窓イン川をはさんで対岸の南斜面に点在する山村風景、残雪のアルプスを背にしたリヒテンシュタイン城など忘れ難い。食堂車もまた良い。この路線リヒテンシュタイン国内は通過するが、リヒテンシュタイン国内に駅はない。

5　シャモニーからジュネーブへ

1985年9月26日

フランス国鉄(SNCF)：

Chamonix－St. Gervais　20km 37分

－La Roche　47km 44分

－Annemasse　17km 17分

－Geneve Eaux Vives　6km 8分

出張中の週末をシャモニーで過ごし、帰路列車を乗り継いでジュネーヴへもどった。　シャモニーからジュネーヴへ行くにはバスが便利だが、時間がたっぷりあったので、わざわざ不便な3回も乗り換えのある列車旅を選んだ。車窓は出発して直ぐ左にボソン氷河、右手は結構な迫力のある岩山など、期待を上回る景観だった。

6　チロルの旅から（1）

1987年8月16日～20日

スイス国鉄(SBB)＋オーストリア国鉄(OBB)：チューリッヒ－ザンクト・アントン－インスブルック　330km

約4.5時間

チューリッヒからウィーンへの幹線の一部のアールブルグ越えの部分は、以前にも乗車して、気に入ったので、初めてのプライヴェートの欧州行で再訪した。食堂車が実に良い。かつて、米山バブ先輩がスキー三昧で足しげく訪問されたという山里ザンクト・アントンで途中下車して素朴な宿を見つけて2泊し、中一日はハイキング。

インスブルック市電（イーグルス線）：インスブルック駅―イーグルス

20分位

インスブルック郊外、南東の山パッチャーコッフェルの麓の村イーグルスの民宿に2泊した。駅前からの市電だが、市街地から森林帯を駆け上がり、やがて見晴らしの利く草原帯をのんびりと走る。観光客はなく、土地の人たちの足となっているようだった。滞在中はバスの便もあったが、幾度かこの気分の良い鉄

道を利用した。(17年後の2004年6月に再訪した。 駅前からの直通が無くなって、ちょっと不便になったが、沿線の佇まい、乗り降りする土地の人たちの雰囲気などは変わってなかった。民宿は廃業していた)

OBB＋ドイツ国鉄（DB）：インスブルック―ガルミッシュ・パルテンキルヘン―ミュンヘン　160Km　3時間弱

インスブルックから北へ国境を越えて、ドイツの最高峰ツークシュピッツェの北麓の登山基地ガルミッシュ・パルテンキルヘンに至る景勝路線である。最近の『山嶽寮』に福田信三君が途中のゼーフェルトに滞在してハイキングを楽しんだという記事があり、懐かしく思った。

7　スイスの旅から　（1）

1993年8月7日～14日

レーティッシュ鉄道（RhB）

ダヴォス支線：ランドクァルト―ダヴォス―フィリズール　69Km　1時間40分

チューリッヒからサンモリッツに向うのに、わざわざダヴォス経由にして、ダヴォスで途中下車して、駅の簡易食堂で昼食。のんびり好みのローカル線風情。本線との乗り換え駅フィリズールは何もない山間の小駅。

レイティッシュ鉄道
ベルニナ線最高所を俯瞰

アルブラ線：フィルズール―サンモリッツ　38Km　小1時間

「氷河急行」の路線で、この間ループ線やらオメガカーブの連続するアルブラ峠越えがあり、車窓が忙しい。

ベルニナ線：サンモリッツ―オスピツィオ・ベルニナ―アルプ・グリュム　28Km　小1時間

イタリアのティラノに至る「ベルニナ急行」の路線で、4000m級のベルニナ山群の山やまと氷河を間じかに眺める。最高地点オスピツィオ・ベルニナ 2253mで下車して、次の駅アルプ・グリュムまで歩いた。ハイキング・コースから外れ

て高みに登り、鉄路と湖ラゴ・ビアンゴを見下ろすと、赤い列車が模型のようにカタコトと通過した。あとは対岸の山腹に放牧された牛の群れのカウベルの音が静けさのなかに残るのみ。アルプ・グリュム駅の側のテラスで、パリュー氷河を上に、ループ線を登ってくる列車を下に眺めてのビールが忘れ難い。

「氷河急行」RhB：サンモリッツ―クール―ディゼンティス

フルカ・オーバーアルプ鉄道（FO）：ディゼンテイス―ブリーク

ブリーク・ヴィスプ・ツェルマット鉄道（BVZ）：ブリーク―ツェルマット 269Km　8時間

3私鉄の共同直通運転で有名な「氷河急行」は、テレビなどでお馴染のランドヴァッサー橋など見どころ多数。出来ればツアー客の多い急行列車を避けて、鈍行各駅停車で何日か掛けて乗り継いで行きたい。

ゴルナーグラート鉄道（GGB）：ツェルマット―ゴルナーグラート　9.3KM 45分

ご存知マッターホルン見物鉄道。天気悪けりゃどうしようもないが、幸い晴れ間に恵まれた。全線ラックレール。徒歩下山を試みた。標高差 1500mだが、歩きやすい道なのでそれほど苦にならず、途中の山小屋のテラスでのビール休憩、小集落 Zumsee の佇まいもまた良し。

ウェンゲルン・アルプ鉄道(WAB)：ラウターブルンネン―ウェンゲン―クライネシャイデック 19Km　45分 標高差 1270m　軌間 800mm ラックレイル

谷底から這い上がったところの小集落ウエンゲンは故伊藤収二先輩に教えられた眺望抜群のホテルに連泊した。オーバーランドの峰々がベッドに寝転んで見えた。

アイガーを望む
ウェンゲルンアルプ鉄道車窓

ユングフラウ鉄道（JB）：クライネシャイデック―ユングフラウヨッホ　9.3Km　50分　標高差 1393m 軌間 1000mm　ラックレイル

トンネルばかり、100年も前によくぞ

こんなもの作ったもんだ、との驚きと話のタネ以外なし。アイガー北壁にこじ開けられた窓からの眺めは恐ろしい。

8　ノルウェーの旅から

1995年8月19日～20日

ベルゲン鉄道：オスローミュルダールーヴォスーベルゲン　490Km

標高差　1220m

同　フロム支線：ミュルダールーフロム　20Km　標高差 860m

先ず、海抜4mのオスロ駅から、フロム線の分岐駅866mのミュルダールに至る354Kmは約4時間40分の旅。田園地帯から湖沼地帯の長いアプローチを経て、やがて残雪と氷河の山岳地帯へ登り詰める。最高地点のフィンセ駅 1222mでは多くのハイカーが下車して行った。ミュルダールからフロム線に乗り換え、20Km /860mをラックレイルなしで1時間で下る。途中、迫力のあるショーズ滝が線路の間じかに迫り、ここで見物停車のサービスがあり。終点フロムはフィヨルドのドン詰まりで、ここからフィヨルド見物の船に乗り換え、さらにバスに乗って、ベルゲン寄りのヴォスという駅に至るのが定番となっている。

ヴォスに泊った翌日、ヴォス・ミュルダール間を乗り残すが癪なので、この間49Kmを往復した。梓川の水量を2倍にしたような清流沿いがあったり、なだらかな残雪の山を遠望したりで、大満足した。自転車持ち込みのサイクリングの人たちが羨ましかった。

このあと、ヴォスの裏山にケーブルで登ってハイキング。夕方の列車で86Km 1時間10分で港町ベルゲンに着いた。夕刻ケーブルで登る裏山フロイエン山頂駅のテラスから日没を眺めてのビールが格別。

9　スイスの旅から　（2）

1997年8月14日～26日

フィッツナウ・リギ鉄道：フィッツナウーリギクルム　7Km　35分

標高差1315m　35分

ヨーロッパ最古として知られる歯車式登山鉄道。ルツェルン滞在中、最も古い山の観光地に敬意を表して 1798m のリギ山頂を訪ねた。眼下に湖、対岸にピラトゥスの岩峰、遠くにアルプスが望めるが、あまり迫力なし。

アルト・リギ鉄道：リギクルムーアルトゴルダウ　8.5Km　標高差1240m　35分

リギ山の帰途は、湖の反対側に下る路線を選び、途中駅まで徒歩で下った。眺望なく価値なし。

ピラトゥス鉄道：アルプナハシュタットーピラトゥスクルム　4.5Km

30分　標高差1634m

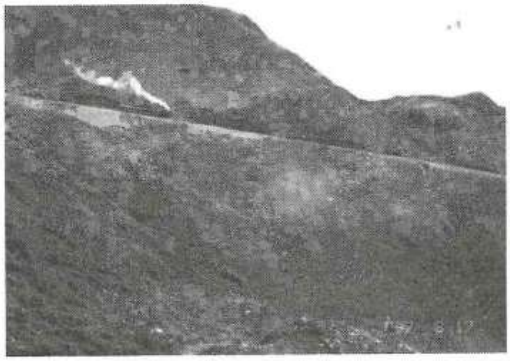
最大勾配 480 パーミルをザイルなしで自力でよじ登る。1889 年開通というから驚異的だ。山そのものがゴツイ。蓼科のピラタスと比べるのが恥ずかしい。

乗車価値あり。

ルツェルン・シュタンス・エンゲルベルグ鉄道:ヘルギースヴィルーエンゲルベルグ　25Km　45分　標高差557m

ルツェルンから、一番近い3000m級の山ティトリス(3238m)北麓の登山基地エンゲルベルグを結ぶ鉄道で、地元のハイカーの利用が多く、日本のパックツアー好みでない地味な路線。清流沿いの車窓の気分良し。エンゲルベルグから、ハイキングで西側の峠を越え、ポストバスでマイリンゲンに下ったのが良かった。

ブリエンツ・ロートホルン鉄道：ブリエンツ―ブリエンツ・ロートホルンクルム　7.6Km　標高差1732m　約1時間　軌間800mm　アブト式



ブリエンツ・ロートホルン鉄道

パックツアー定番の路線だが、さすがと感心できる。蒸気またはディーゼル機関車による押し上げ方式で最大勾配250パーミルをエッチラオッチラと登る。客車は多くて2両、客が多いと3編成くらいが50～100m間隔で続行運転するので、森林限界を越えたアルプでは、先行車、後続車の奮闘ぶりが見えて楽しい。帰途、途中駅まで徒歩で下りた。遠景の湖と山と列車が好アングルで望めるので「撮り鉄」向き。

ジーメンタール鉄道:シュピーツ―ツヴァイジーメン　53km　50分　標準軌

モントルー・オーベルラン・ベルノワ鉄道：ツヴァイジーメン―モントルー　75km　1時間45分　軌間1000m

ルツェルン―モントルー間をスイス国鉄とふたつの私鉄で結ぶ路線は、ゴールデンパスと称して人気路線のひとつ。「パノラマ急行」などと銘打った観光列車は団体客で一杯だろうと、これを避け、鈍行を乗り継いだ。確かに景勝路線である。アルプスの高峰群からは遠いが、スイスの山荘風景、岩峰、渓流など変化に富む。山岳地帯を抜けて、レマン湖へ下る車窓も忘れ難い。

モントルー・グリオン・ロシュドネー鉄道：モントル――ロシュドネー　10.3Km　標高差1578m　約1時間　軌間800mm

モントルーの裏山ロシュドネーへの登山鉄道だが、下半分は地元の人の日常に使われている様子。山頂駅周辺の佇まいなど、あまりパッとしない。レマン湖の反対側に、予想していなかった秀峰ダン・デュ・ミディ3257mが望めた。

マルティニ・オルシェール鉄道：マルティニーオルシェール　19Km　約30分

ローヌ谷を走るスイス国鉄幹線の駅マルティニから、南東へ支流を遡り、葡萄畑の中を行く。終点オルシェールは有名なグラン・サン・ベルナール峠へのバスの発着の基地。この路線はともかく、峠には行ってみる価値あり。ただし、峠はセント・バーナード犬の縫いぐるみだらけの土産物屋と観光客でごった返しており、そこから少々高みへ登ってみる必要がある。30分ばかり登ると、西に聳えるモンブラン山群、北にグラン・コンバン山群の山並みが望める。パンとワインで粗末な昼食をしていたら、尼さん二人が黒衣の裾を翻して登ってきた。

シーニゲプラッテ鉄道：ヴィルダースヴィル―シーニゲプラッテ 7.3Km
標高差 1383m　50分

軌間 800mm　全線ラックレール

インターラーケン・オストから谷を南に入ってひとつ目の駅ヴィルダースヴィルから出る軽便鉄道で、以前から気になっていて、いつか乗って見たいと思っていた。山頂駅からはベルナーオーバーランドの山並みの大展望と高山植物園が売り物。天気のいい日にここからグリンデルワルトの裏山まで縦走してみたい。

ラウターブルンネン・ミューレン鉄道：グリュッチュアルプ―ミューレン
4.3Km　15分

BOBの谷底の終点駅ラウターブルンネンからケーブルカーで700mほど登ったところがグリュッチュアルプ。そこからミューレンの山村まで段丘上をほぼ水平にわずかな距離を走る鉄道である。アイガー・メンヒ・ユングフラウのベルナーオーバーランド三山の北西面が大迫力で迫る。ミューレンに3連泊したので、この路線を何度も楽しんだ。

序でだが、この山奥の村の駅から成田空港受け取りでスイス航空の荷物サービスが使えたのにはびっくりだった。

１０　ブレンナー峠越えチロルの旅（２）

2004年6月19日～22日

イタリア国鉄＋オーストリア国鉄：
（ヴェネチア）－ボルツァーノ―ブレンナー　―インスブルック　127Km
標高差 1127m　約2時間

トンネルなしでアルプス越えする幹線。この日はドロミテを楽しんだ仲間とヴェネチアで別れて、列車でインスブルックに向った。生憎の雨で遠景は望めなかったが、ヴェネチアから計5時間のしっとりした墺伊国境越えの旅となった。

シュトゥーバイタール鉄道：
インスブルック―フルプメス 1時間弱

インスブルックの市街地から南西のシュトゥーバイの谷に入る市電の延長のような路線。左岸の段丘に広がるアルプの風情と3000m級の山々の眺めが良い。通学の子供たちなど、地元の足になっているようだ。昼飯を食べそこなって、

終点の駅の売店のオッサンに何か喰い物はないかと所望したら、手持ちのスープの缶詰とパンとビールを出してくれた。駅から少し登ったところからゴンドラに乗れば、2136m のクロイツヨッホまで行ける。かって若きヘルマン・ブールが練習に励んだ岩登りのゲレンデ、カルクケーゲルの岩壁が望めた。

１１　スロヴァキアの旅から
2006 年 9 月 7 日～８日

タトラ電気鉄道：シトロブスケ・プレッソースタリー・スモコヴェッツータトランスカ・ロムニッツァ　全長 29Km

甲南の岳友平井吉夫の発案で、東西に走るスロヴァキアとポーランドの国境の山脈ハイ・タトラの南麓を 4 泊 5 日でトレッキングした。途中天気の悪い日は、更に麓に下って、並行して走る山岳鉄道に乗った。ほとんど水平に等高線に沿って長閑に走る狭軌単線の旅を味わった。た。トレッキングで出合ったポーランドの高校生のグループは、日本人を見るのが初めてだといって、記念撮影に招かれた。

１２　チロルの旅から（３）
2006 年 9 月 16 日～19 日

ツィラータール鉄道：イェンバッハ―マイヤーホーフェン　32Km

狭軌（760mm）約 1 時間

オーストリア国鉄のイン川沿いの幹線駅イェンバッハから南へツィラータールの奥へと入る軽便鉄道。牧草地に点在するおしゃれな民家、背後に聳える中級山岳を望む車窓は典型的なチロルの風情。SL を何機か動態保存しており、夏季にはサービス運転している。マイヤーホーフェンの民宿に 3 泊したので、何回か乗車した。観光路線だが、土地の人の利用も多い。いつもガラ空き。

アッヘンゼー鉄道：イェンバッハ―アッヘンゼー　9Km　約 40 分

狭軌（1000mm）

ラックレイル最高勾配 160 パーミルを車齢 120 年を越えるＳＬが押し上げる。同乗したイギリスの年配の男性達が喜び興奮して、野太い声で大合唱。ちゃんとハモッテいるので耳に心地よい。終点はアッヘンゼーの湖畔の船着き場で、遊覧船が静かに待っていた。100%観光路線。

１３　チベット・ラサへの列車旅
2007 年 7 月 5 日～6 日

西蔵鉄道：西寧（セイネイ）―格爾木（ゴムルド）―拉薩（ラサ）

1956Ｋｍ　25 時間　単線非電化

客車運行開始の翌年の乗車。勝手がわからぬので、ＪＴＢのツアーに参加。往路は列車、帰路は飛行機。18：28　西寧（2300m）発の「特快」（上海始発）に乗車。6 人用の硬座寝台のコンパートメントを 4 人で使用。客車は飛行機並みの

密閉式でカナダのボンバルディア製。

日没までのひととき、車窓に青海湖を望む。高度を上げてからのアルコール飲料は自粛令が出ているので、ビールの飲み納めをして就寝。夜明けまじかにゴリムド（2828m）着。ここからが山岳路線で、海抜4000m以上の区間約1000Km、内永久凍土区間546Km、を強力な米国GE社製のディーゼル電気機関車の重連で牽引する。

小一時間走って、玉珠峰あたりで崑崙山脈越えとなり、6000m級の峰々が車窓に現れ、崑崙トンネル、ココシリ野生動物保護区、さらに長江原流域を過ぎて最高地点、荒野の真っただなかの唐古（タングラ）駅5066mを正午過ぎに通過した。ここでは、停まってくれないどころか、徐行もしてくれず、車内アナウンスもなかったので、気が付かなかった人も多かったようだ。標高世界最高地点駅だというのに、まったくサービス精神なし。

西蔵鉄道・崑崙越え車窓

やがて青海省からチベット自治区に入り、安多（アムド）、ツォナ湖畔、那曲（ナクチュ）など、かつての探検紀行に登場する地名を通過する。ナクチュでは出稼ぎ帰りの地元民や、大きな荷物の行商人が随分降りた。最後のニェンチェンタングラ山脈を越えると、高度を下げて3600mのラサ駅に午後7時50分に到着となった。25時間、長いようで短い旅だったが、「侵略鉄道」云々の議論などは忘れてノンポリにならないと楽しめない。

旅客は8割がた中国人だった。食堂車での朝、昼、晩三食は味はよかったのだが、中国人グループの大声と、それに対応する乗務員のけたたましさで、ゆっくりと食事を楽しむ雰囲気ではなかった。つでだが、出す方の厠所を汚すのも早い。何回かは掃除もしているようで、何号車のトイレがきれいになった、との日本人間の口こみ情報に助けられた。

室内空気圧は、海抜3400m相当になるように与圧されてるはずなのだが、私も含めて我々グループの人たちの高度計は4000mを下回らなかった。高山病で亡くなる方が後を絶たぬというのに、どうしたことなのか。

１４　ニュージーランドの旅から

2008年2月28日＋3月2日

ニュージーランド鉄道ミッドランド線：クライスト・チャーチー
アーサーズ・パスーグレイマウス
全223Km
軌間1067mm　単線非電化

ＮＺ南島東海岸から南アルプスを越えて西海岸に至る路線で「トランツ・アルパイン号」という観光列車を１日１往復、ディーゼル機関車牽引の長い客車編成で走らせている。路線そのものは、石炭が中心の貨物用幹線である。

クライスト・チャーチを出てカンタベリー平野を横切り、ワイマカリリ川を遡って行くと、やがて雪山が近づき、山間部に入る。峠の駅アーサーズ・パスで途中下車して、山歩きを楽しもうと、駅近くの山小屋風の宿に３泊した。目論見は見事に外れて、毎日雨ばかり、小雨のなか付近を歩きまわるのが精いっぱいだった。西海岸のグレイマウスに出てからは、レンタカーの旅で、青空の下、フランツ・ヨゼフ氷河、フォックス氷河、西から望むMt. クックなどを楽しんだ。

タイエリ渓谷鉄道：プケランギーダニーデン　60Km　約２時間
軌間1067mm　単線非電化

ＮＺ南島内陸部から農産物を東海岸の都市ダニーデンに輸送していた鉄道で、廃業後「保存鉄道」となり、１日１～２便の観光列車が運行されている。牧場と畑の混在する丘陵地帯のプケランギ駅は、ホームも駅舎もなく、倉庫みたいな建物が物寂しくあるのみ。10人ほどの観光客と45分遅れて到着する列車を待った。

素人目にもいい加減な保線状態で、崖っぷちを行くのに大丈夫かいなと思ったが、レトロな客車３両をディーゼル機関車が牽引して、時速30Km程度でゆらりゆらりとのんびり走ってくれた。タイエリ渓谷沿いの車窓は期待より変化、迫力に乏しい。ダニーデンの駅舎は、見る価値あり。鉄道華やかなりし頃の威風堂々たる姿がそのまま残されている。

１５　イタリア・スイス国境の旅から

2008年7月1日

チェントヴァリ鉄道：ドモドッソラ（伊）ーロカルノ（スイス）　52Km
1時間40分　軌間1000m　電化単線

アルプスの高峰群からは離れて、氷河や岩峰の世界ではない。アルプスの南麓を東西に、幾つもの谷を越えて走るので、チェントヴァリ即ち「１００の谷の鉄道」と呼ばれ、急カーブ、鉄橋、渓流沿いを行く。アルプスの登山鉄道とは一味違った緑と清流（濁っていない）を満喫する路線である。平井吉夫の友人がロカルノ郊外の山村メルゴシアに持つ山荘を拠点に夏を過ごした際の体験。

１６　マチュピチュへの旅から

2009年5月16日～17日

ペルー鉄道：オリャンタイタンポ－マチュピチュ村（旧アグアスカリエンテス）1時間20分

マチュピチュ村－オリャンタイタンポ－クスコ　107Km　3時間30分

狭軌（914mm）単線軽便鉄道　単線　非電化

マチュピチュへのアプローチは鉄道しかない。往路、我々はクスコからバスでウルバンバ村に至り一泊し、鉄道の途中駅オリャンタイタンポから乗車した。列車はアマゾンの最上流部にあたるウルバンバ渓谷沿いに下っていく。ビスタドームという列車名で、1両編成の気動車。天窓があり、アンデスの高峰が望めて具合よろしい。コルディエラ・ウルバンバの4000m級の峰々である。途中駅でインカ・トレイルに向うトレッカーたちが降りて行った。

終点のマチュピチュ村という駅名は、最近のもので、由緒ある旧名をかなぐり捨てて有名観光地名に変更したもの。観光業者というのは何処の国でも碌なことをしない。

マチュピチュ遺跡に隣接した豪華ホテルに1泊した翌日は、前日の逆方向でウルバンバ川を遡り、2段スイッチバックなどで高度を稼ぎ、クスコに向う。前日より豪華な客車で長編成の「ハイラム・ビンガム号」なる（マチュピチュ遺跡の発見者でエール大学の考古学者の名前をとった）観光列車でディーゼル機関車の牽引である。日が暮れて車窓を楽しめなくなったタイミングで、美男美女乗務員によるファッション・ショウがあった。特産のアルパカ製品など披露即売するのだが、買う客はいなかったようである。

クスコまで列車で行くのかと思ったら、ひとつ手前の峠の駅ポロイで下され、バスに乗り換えて20分でクスコの旧市街へ下った。列車のままだと、ここから40分かけて、スウィッチバックを4回繰り返してのクスコ入りだとか。クスコの夜景を見ながらのんびりと列車で下りたかった。

なお、今回は乗車の機会を逸したのだが、ペルー鉄道は、クスコから更に南へ、アマゾンの源流地帯を遡り、チチカカ湖畔の町プーノまで伸びている。途中のラ・ラヤ峠は海抜4355mで、西蔵鉄道が開通する以前は世界最高所の鉄道路線だった。廃線になる前に再訪したいものだ。

１７　チロルのの旅　（4）

2010年6月10日～14日

センメリング鉄道（OBB）：グログニック－ミュルッツシュラーク　42Km　35分　標準軌

ウィーンと古都学園都市グラーツを結ぶ幹線の一部で、1854年に開通した

初めてのアルプス越え路線。世界遺産に登録されているが、現在は複線で電化され山岳鉄道らしくない高速で走り抜けてしまうのが勿体ない。山あり谷あり、トンネル、鉄橋、石橋、オメガループなどあるが、あまり楽しんでいる暇なし。ウィーン滞在中、田邊ガチャ先輩がその昔留学していたグラーツを訪ねて、列車で日帰りした。しっとりとしたいい街だった。

ザルツカンマーグート支線（OBB）：
アットナンク・プッハイムーハルシュタット　65Km

ウィーンとザルツブルグを結ぶ幹線の途中駅から南へ入る支線で、風光明媚なザルツカンマーグートを縦断する。湖畔の美しい世界遺産の村ハルシュタットに滞在すべく、この路線に乗ったところ期待以上の車窓に釘付けとなった。ハルシュタットへのアプローチも良い。湖畔の無人駅から小さな渡し舟で村へと渡る。村への直接のバス路線もあるが、山を背景にした小さな村を湖上から眺めて近づくのがお勧めである。

シャーフベルグ鉄道：　ザンクト・ヴォルフガングーシャーフベルグ・シュピッツェ　6.6Km　狭軌（1000mm）
ラックレイル　標高差 1197m
最大勾配 255 パーミル

映画「サウンド・オヴ・ミュージック」の舞台となった超有名観光登山鉄道で、SL またはディーゼル機関車による押し上げ方式。話の種に乗って来ました。頂上のホテルのレストランより、西の尾根上にある山小屋のテラスの方がビールを飲むのに気分がよい。

１８　ヒマラヤ山麓二つの山岳鉄道
2010 年 11 月 19 日＋28 日

田邊ガチャ先輩らとの旅については「ダージリン・シッキム・シムラを訪ねて」と題して、『山嶽寮』66 号（2011 年）に紀行文を寄せた。

ダージリン・ヒマラヤ鉄道：カルシャン―ダージリン　31Km
約 2 時間半　超狭軌（610mm）
標高差 600m　SL またはディーゼル機関車による牽引。

1881 年開通の世界遺産。超ナロー・ゲージの軽便山岳鉄道で、当時の SL がマッチ箱のような客車を今も引っ張り走る。愛称「トイ・トレイン」で TV 番組でお馴染のもの。並行する道路を走る自動車の方がずっと早い。かの河口慧海師は 110 年前の最初のヒマラヤ行で、麓のシリグリから全線乗車してダージリン入りした。

当初、シリグリからの標高差 2000m の全線を乗車する予定だったが、出発直前の土砂崩れで下半分が不通となって、中間駅カルシャンの乗車となった。天気も良くなく、車窓のヒマラヤは楽しめなかったが、地元の小、中学生が飛び乗り飛び降りで無賃乗車する様や、民家の軒

すれすれに走る様を楽しんだ。

カルカ・シムラ鉄道：カルカ－シムラ　96Km　5時間強　狭軌（762mm）
標高差1410m

英国統治時代のインド政庁の夏の首都シムラへの鉄道。1903年の開通で、これも世界遺産に登録されている。この日はデリーからカルカまで既に5時間強のインド国鉄の旅のあと、更にこの軽便鉄道の5時間強は、あいにく一等車が連結されておらず、二等硬座席だったので尻の痛さが一寸こたえた。ディーゼル機関車が8両ほどのトロッコのような客車を牽引して、明るい雰囲気の尾根筋を徐々に高度を上げて行く。よくもこんなところに100年以上も前に鉄道を敷設したもの、と感心しているうちに、海抜2000m超の傾斜地にへばりつく様なシムラの街が見えてきた。大英帝国の植民地の雰囲気を今も色濃く残すシムラの街は涼しくて心地よい。

１９　新疆ウイグルの旅から
2011年6月27日～28日

南疆鉄道（中国国鉄・南疆線）：
カシュガル　―トルファン　1446Km
22時間

パミール中央アジア研究会の仲間10名で旅した折、カシュガル発（ハミ行）午後1時過ぎ、一等寝台車4人コンパートメントに乗車し、翌日11時半トルファン駅に着いた。

カシュガルから、ほぼ天山南路沿い、即ち天山山脈の南麓、タクラマカン砂漠の北縁を東へ走る。一等寝台でも両サイドの窓の汚れが尋常でなく、まるで車窓が楽しめない。沙漠の砂嵐の中を走るのだから、しょうがないのかなと思ってけれど、車両両端のデッキや食堂車へ行けば綺麗な窓だった。やれば出来るのである。途中の駅で外から濡れティッシュで拭いてみたけれど、汚れがひどく効果はなはだ不満足。そんな訳で我がコンパートメントからは、天山の山並みも碌に見えなかったので、食堂車には長居をしようと思ったけれど、それも儘ならず。翌日明け方に、コルラを過ぎる辺りで天山越えがあるので、それに期待して床についた。

南疆鉄道・天山越えの車窓

夜明け直後には山間部に突入し、海抜2600m程度の峠越えとなった。今度はデッキに張り付いて、間近に見える天山の

雪の峰々や、大きく蛇行して高度をかせぐ車窓を大いに楽しんだ。朝寝坊して、この景観を見逃した仲間あり、実にもったいないことでした。

南疆鉄道は、その後さらに伸び、カシュガルからホータンが既に開通し、西域南道沿いに東進して、やがては西蔵鉄道のゴルムド辺りに繋がるらしい。

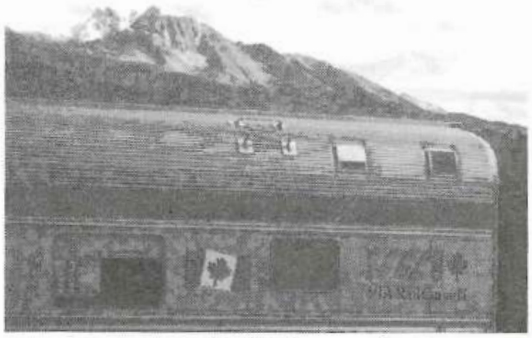
２０　カナディアン・ロッキーの旅から

2011年10月12日～13日

VIA鉄道（プリンス・ルパート線）：
ジャスパー ープリンス・ジョージー
プリンス・ルパート　全1160Km
広軌　非電化単線
1日目7時間＋2日目12時間半

秋のロッキー訪問からの帰途、ヴァンクーヴァーに直向せず、ジャスパーから北西に走るＶＩＡ鉄道の支線に乗って、西海岸のプリンス・ルパートに向った。この路線は、バンフやジャスパーからヴァンクーヴァーに向うドル箱路線と違って、地味な存在で、週３便、ハイシーズンを過ぎた10月初旬ともなると、２両編成で、しかもガラ空きとなる。ディーゼル機関車に牽引された前１両は普通の客車で、後の車両はラウンジとバー・カウンター、２階が天窓の展望車になっていて、出入り自由。

ジャスパーを昼過ぎに出発して、小一時間でカナディアン・ロッキーの最高峰Mt. ロブソン山麓にいたるが、前日車で近くまで行った時と同様に、頂上はこの日もガスの中でがっかりだった。その後いくつもの黄葉の谷を渡りプリンス・ジョージに少々遅れて午後８時に着いた。



カナダＶＩＡ鉄道ジャスパー駅

ここで列車は朝まで動かない。客はそれぞれ勝手に適当なホテルで一泊して、翌朝８時の出発時に列車に戻るという仕組み。

２日目も北西に山越え、谷越えが続く。天気が回復してきたので遠近の新雪を冠った山やまと黄葉の眺めが楽しめた。太平洋側への最後の分水嶺を越えた辺りからは、進路を南西に変え、スキーナ河沿いをひたすら下って、プリンス・ルパートに。車窓の左右に新はれるCoastal Mountains（海岸線沿いの山脈）の峰々は、予想より高く険しい。

そもそもプリンス・ルパートなる港町に興味を持ったのは、昔読んだ庄野英二著『スキーナ河の柳』（創文社 1976 ）だったのだが、その内容はひとつも思い出せずじまいだ。処分してしまった本が

再読したくなるひとつ例である。

２１　スコットランドの旅から

2012年6月29日

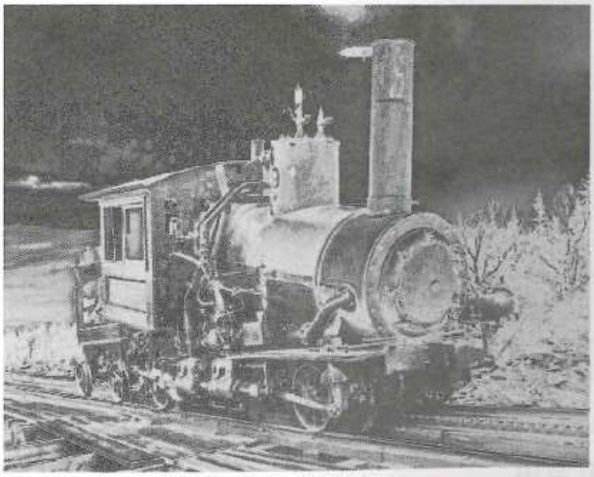
ウエスト・ハイランド鉄道：

フォート・ウィリアム―マレイグ

68Km　非電化単線　約2時間

スコットランド西部、イギリス最高峰のベン・ネヴィス（1344m）山麓の湖畔の町から西北西に伸びる路線で、スカイ島へのフェリーの出ている港町マレイグを結ぶ景勝路線である。峠越えがあって、如何にもハイランドといった感じの荒涼とした車窓が続く。イギリスに多い保存鉄道のひとつで、SL牽引の観光列車（Jacobite Steam Train）がシーズン中は1日2便出ているが、我々はあえて地元の人たちの乗る各駅停車の2両編成の気動車の旅を選んだ。路線の売り物のひとつは、ハリーポッターの映画に登場する長さ381mの石造りのアーチ型高架陸橋　(Glenfinnan Viaduct) で、ローカル列車でもちゃんとカメラ・ストップのサービスはあった。

（2012年7月　横浜にて）



目次

＝紀　行＝

2012年度　　九州クルージング

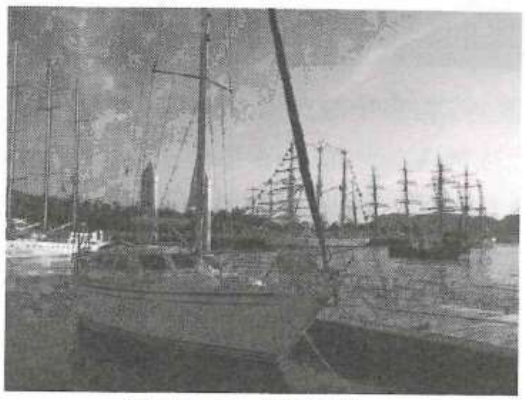
柏　敏明　（昭和41経）

今年も１月　雪見会、２月　高遠合宿　３月　ニセコとスキーが続きました。

福田編集長から投稿しろとお声が掛かりましたが、スキーでは、技術も文才もない小生にとって原稿を書くに至らず、小西さんのヨットで４月から５月に掛けて行った九州クルージングの報告をさせて頂きます。クルーは小西船長、浪川さん、途中から水渡さん、そして小生の４人でした。

４月15日（日）　晴　　関空発 14.15 ～ 15.40　長崎空港着

小西さん、浪川さん、柏の３人で、満席のLCCピーチ（片道6,490円）で長崎着。バスで長崎新町まで出て、ダイエーで買物をした後、福田経由のバスで、サンセットマリーナに着く。昨年11月の五島列島クルージング以来、６ヶ月振りのバゲラ号とのご対面である。小西さんが改めてサンセットマリーナと４月１日より3月31日までの係留契約を結ぶ。新西宮ＹＨに比べて係留費は約半額である。



出島港のバゲラ号

４月16日（月）　曇　　サンセットマリーナ 14.00 ～ 15.00　出島港

午前中、陸揚げをして船底の貝殻取りをする。ペら、ラダー周辺以外は余り付いておらず、水の綺麗ことがよくわかる。バッテリーを注文。８年も良く持ったものである。軽油を９０Ｌ補給と水を満タンにする。

午後から、沿岸航海装備の検査を受ける。検査料等で約２万円。出島に回航する。船体の清掃後、思案橋付近をぶらつく。小西さんの独特の嗅覚で、旨そうな飲み屋「のさ庵」に入り、焼ききびなご、かんば（ふぐのぶつ切り）、豚角煮、生からすみ、ほたるいか、仕上げは五島うどん。計10,900円。満足、満足。

左から小西、柏、浪川、水渡

4月17日（火）　晴　　出島港

これからの航海に備えて、船体清掃、さび落とし。バゲラが見違えるように美しくなった。買い出しのあと、夕方から、思案橋周辺へ繰り出し、茶碗蒸しで有名な「吉宗」で、茶碗蒸しセットとエビフライを食べる。カフェテラスで、係留しているヨットを眺めながら、いつものカプチーノを飲み、至福の時を過ごす。

4月18日（水）　曇　出島港 07.00　～　08.00　サンセットマリーナ　11.40　～　16.50　通詞島　33哩

サンセットマリーナでバッテリーを交換。昼前に出港、軍艦島を横に見ながら、機走で通詞島着。東側の赤いポンツーン（浮き桟橋）に舫って、魚協に確認、一泊ならＯＫの了解を得る。鮮魚店で買った紫ウニ400ｇ、ウニとはこんなに旨いのかと感激。それに、かわはぎ・アジの造り、ハマチの一夜干し、あとは白菜の漬け物。お酒の進むこと進むこと。

4月19日（木）　曇午後小雨　通詞島 07.05　～　09.00　本渡港　09.10　～　12.30　牛深港　32哩

通詞島を出港して、すぐに10頭位のイルカの群が併走して見送ってくれる。イルカにもリーダーがいるのか、先頭のイルカが大きくジャンプし、何か意思表示をしている様であった。7時30分頃から帆走に切り替える。

早崎瀬戸を回って、本渡港の近くで、左舷浮標を左に見て航海すべき所をカット気味に、右に見て航行したところ、7ｍあった水深がみるみる３ｍ、２ｍと浅くなり、慌てて超微速に落とすが、キールが１.６ｍなので、少し海底をこすってしまう。幸い海底が泥地だったのとスピードを極端に落としていたので、バウスラスター（船首に横付けたペラ）で無事脱出する。危うく座礁する所であった。天草上島と下島に分ける本渡海峡に入り、二つ続く橋の手前の高さが不明なため 14mのマストがギリギリに見え、暫く躊躇するも、陸から通過できるとの声があり、思い切って前進をし、無事、通過する。次に可動橋が控えていたが、これには 17mと表示してあり、既に、橋を上げて待っていてくれていた。我々がその橋を通過するまでは、自動車はストップしており、先程、声を掛けてくれた人はそこの係員で、我々を早く通すために、走ってきて声を掛けてくれた次第であった。少し、通行止めが長引き、皆さ

んに迷惑をお掛けしたようだった。七返瀬戸、八幡瀬戸と下り、長島海峡を右に回り込むと牛深港であった。牛深港は漁港の奥に、水中遊覧船のポンツーンがあり、遊覧船の向かいに舫う。ガソリンスタンドで84Lの燃料を補給した後、スタンドの中島氏に色々と町のことを教えて貰う。牛深は丁度ハイヤ祭が始まったところで、色々と催しがあるらしい。取り敢えず、スーパー宮マートへ買い出しに行き、その後、コインランドリーで洗濯、乾燥を行う。夕食は浪川シェフの黒口貝、紫い貝のボンゴーレ。

4月20日（金）　風雨強し　牛深港　沈殿

強風警報が発令されていたので、沈殿に決め、7時頃から漁協を覗きに行くも、はまち、ブリ、カンパチと云った類で、我々の手が出るような魚はなかった。観光案内所に寄って色々と聞いて、送迎バスで「やすらぎの湯」に入りに行く。ヨットに帰ると35フィートのヨットが正面に停泊していた。三角からきた、浜坂氏ともう一人の「エミタン」号で種子島を経由して、小笠原を目指しているそうである。ヨットの中を案内して貰ったりして、情報交換を行う。午後は水中遊覧船に乗ったりして時間をつぶし、夕方から公民館で開かれたハイヤ祭を見に行く。歴史のある踊りで、弁財船を通じて全国にここの踊りが広がり、阿波踊りや潮来甚句、佐渡おけさなどになったそうである。中島氏に紹介して貰った、「すしよし」でぷす焼きなるキビナゴ焼きやキビナゴの握り、黒口貝等を食べる。焼けたらプスと云うのでプス焼きとなったらしい。

4月21日（土）　風強し　牛深港　沈殿

雨はたいしたことはないが、白波が立っており、風が相当きついので、今日も沈殿を決め込む。ハイヤ祭も盛り上がり、港では牛深名産祭りとして、地元の名産、ウニや干物等の海産物や、農作物の売り出しがあり、多くの人々が詰めかけていました。親父が遊んでばかりで気が引けるので、罪滅ぼしに娘達に干物の詰め合わせを宅急便で送る。

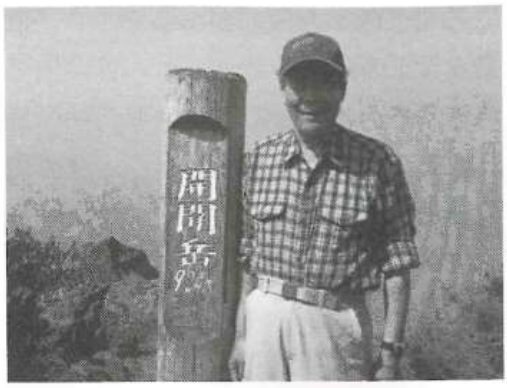
4月22日（日）　曇→晴　牛深港　10.40～16.20　串木野フィシャーリーナ　36哩

10時から始まった漁船パレードを見学する。50隻もの漁船が大漁旗を立て、白波を蹴立てながらフルスピードで港内をパレードしたのは壮観であった。

浜坂さん達に見送られながら、10時40分に3日ぶりに出港する。風のムキが悪く、機走で通す。途中、阿久根の沖で八代海の海峡からの潮がぶつかって、複雑な三角波の海面を通過、激しく揉まれた。フィシャーマリーナの入り口は細く、判りにくい。突き当たり右側の岩の上に小さな赤標識が立っているだけで、その先に水路があるとは思えない入り口であった。マリーナのゲートは鍵もなく、誰でも桟橋に入って来れるので、長期に預けるのには不安な所である。早速、停泊料の集金にくる。2泊3日で1,770円。まあまあであった。夕方、地元のヨットマンの訪問を受けて、色々と情報を聞く。この海域でも鮫に襲われる事があるそうだ。

4月23日（月）　曇　マリーナ　07.30 — 08.00　串木野レンタカー　08.15 ～12.00　開聞岳登り口　12.20　～ 14.30　開聞岳頂上　14.40～16.20 登り口16.40　～　19.45　レンタカー

串木野駅前でレンタカーを借りる。マツダレミオ　12時間借りて6,300円 270号線を南下し、途中から226号線に入って、野間池港を見る。利用できそうなポンツーンが一カ所あった。日本人で初めて東回りでの単独無寄港世界一周航海に成功した今給黎教子さんのヨットが港の側にあるウインドパークに展示してあった。野間半島を一周し、枕崎港を見て、開聞岳ふれあい公園登り口に到着する。昼食後、いよいよ登山開始、開聞岳を右回りにひたすら登る。ずっと一方通行で折り返しのない珍しい登山道であった。924mもあるのに、途中、川や水場が一カ所もなかった。14.30頂上に着く、頂上は春霞か見通しが悪かった。あとで、黄砂のせいと知る。



麓のふれあいセンター温泉で汗を流し、270号線を北上して串木野へ戻る。レンタカーを返したあと、久し振りに焼き肉を食べる。「はまじま焼き肉」という鹿児島のチェーン店らしいが、ボリュームがあり、安くて美味しかった。それにしても皆食べる量が減ったものである。ほろ酔い加減で30分程歩いて、マリーナに帰る。

4月24日（火）　曇　串木野フィシャーリーナ　08.45　～　12.10　甑島里港　20哩

のんびりと機走で走る。里港は「ホテルこしき島」の前にあるポンツーンに舫う。ホテルのロビーで了解を得に行くが、

いいのではありませんかとの返事だったのでポンツーンに停泊することに決める。フェリー乗り場の駅前食堂で、きびなご焼きとビールを注文する。牛深のきびなごと又ちがって大きく丸みがあり美味しかった。一端、ヨットに帰り、洗濯物と着替えを持ってホテルに行く。ホテルの大浴場に入っている間に、ホテルの有料洗濯機で洗濯するためである。風呂からの見晴らしが良かった。洗濯・乾燥を終えて、ヨットに帰ろうとすると、ホテルの人が追いかけてきて、前は係留を認めていたが、今は緊急用に空けているので、漁港の方で係留してくれと云われる。この辺は最大で230㎝の干満の差があるので色々とお願いをして、今回だけと言うことで認めて貰う。釣りをしている夫婦と話しをしていると、すぐ近くの駐在所のご夫婦であった。色々と話しをしていると、奥さんが一寸待っていてと駐在所に帰り、お手製の饅頭を持ってきて差し出してくれるという嬉しいエピソードがありました。又、クルーの一人が、この島はもうイヤやと神妙な顔をして帰ってきました。何故かと聞くと、会う人、会う人、皆、丁寧に挨拶をされるので、こちらも返さないといけないし、もう大変やったとこぼしていたのです。どちらも日本の良さ、未だ廃らずと言ったところです。

4月25日（水）　曇　強風　甑島里港

05.55　～　13.45　野母港　　53哩

甑島里港を出港して、追い風、追い波になり、時が経つにつれて、風とうねりがキツクなる。11時頃には、最高風速24.4mに達し、デッキが海面すれすれにヒールして進む。　時にはキャビンの窓を洗うぐらいの傾斜になるが、波乗りの要領でうねりに乗って逃げる。小西船長の必死の操船にも拘わらず、時にはうねりの頂上から、谷底に落とされ、腹に応える衝撃を受ける。ナウテイキャットの強さを体で実感する。キャビン内は床一杯に資料や本が散らかって大変な状態になっている。強風のなか、3ポイントリーフで帆走を続け、13時45分　野母港に入港する。港の奥に、出口に向かって突き出たポンツーンがあり、そこに舫う。外波が直接当たる所なので、通常のフェンダーに加えて、俵型フェンダーを2個補強する。雨は降っていないが風が相変わらず強く、港の外は白波が立っている。時折、その波が港の中に流れ込み、バゲラ号を浮桟橋にブチ当て、フェンダーが悲鳴をあげている。この状態が夜中も続き、何回もフェンダーの位置を確認に起きる。普通の岸壁に舫っていたら、フェンダーの調整だけでなく、ロープの調整で大変であったであろう。浮桟橋で助かった。

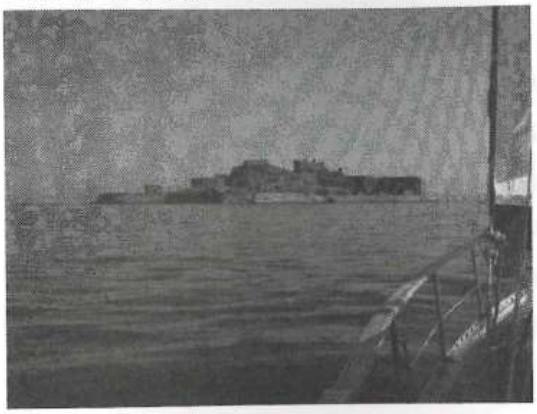
4月26日（木）曇、強風　野母港 沈殿

雨は降っていないが、相変わらず、風

が強く、外海は白波が立っている。早々に沈殿に決める。昨夜の風で、俵型フェンダーの発砲スチロールが半分にへしゃげたままになっていた。今回の航海の為に新たに購入したフェンダー。役割は果たしたものの、小西さんは複雑な顔をしている。　明日は水渡さんとの合流日であるが、ここまで来ておれば、2～3時間で長崎まで帰れるので、気分的には楽である。　相変わらず風は強く、風の勢いで、係留している船体が傾く程である。それぞれ、思い思いに時間を過ごす。久し振りにホットケーキを作る。メープルシロップも付いた本格的なホットケーキ、無性に食べたくなる時がある。午後、柏一人で近くの権現山（198m）に登る。頂上近くまでドライブウエイになっており、頂上は公園になっている。頂上からは軍艦島が目の下に見え、伊王島、長崎がその先に望める。島の周囲は白波で真っ白である。これでは出港しても無理だったと改めて納得する。船に帰って、皆で港の外れにある陽之岬温泉に行く。軍艦島が望め、景色の良いお風呂だった。途中、灯台のもとでつりを試みるも、三人とも坊主であった。帰って、郵便局にお金を引き出しに行こうと、キャッシュカードを探したが見あたらず。幾ら探しても見つかりません。銀行カードもあるので、取り敢えず、郵便局でカードの停止手配をして貰いました。恥ずかしながら、手配が済んで船に帰るとやはり出てきました。歳を取ると大切な物を入れて置くところを余り替えてはいけないと言うことを実感しました。

4月27日（金）　快晴　野母港　07.00～09.30　サンセットマリーナ　10.45～11.45　出島港　12哩

出港間もなく10数頭のイルカの群に遭遇する。思い切りジャンプしてくれるのが気持ちよい。軍艦島の真横を通って、伊王島近くで再び、イルカの群と出会う。まるで無事帰ってきたのを祝ってくれているようだ。



軍　艦　島

サンセットマリーナに入港し、軽油54Lを補給する。Lあたり、136円、ガソリン並の値段である。マリーナの事務所で帰港届けと第2レグの出港届けを提出し、コーヒーをご馳走になって、出島に向かう。途中三菱のドックヤードでイージス艦2隻を見る。長崎は26日から帆船祭りが始まっていた。実は昨日、日本丸、ロシア、韓国等の帆船パレード

があったのだが、野母港で沈殿していたため、見る事が出来なかったのは残念であった。　長崎港に係留されている各国の帆船の脇を機走しながら、出島に入港する。出島はやはりロケーションが一番の港である。帆船祭りとあって、出島は人通りで一杯。入港する時は注目の的で少し照れくさかった。入港手続きを済ませ、第１レグ完了となった。昼から、ロシア帆船パラダ号を始め、各帆船に乗船して見学する。腹が立ったのは日本丸だけ29日、30日しか公開しておらず、見学出来ずであった。減るものでなくけしからん話である。　3時に水渡さんが到着。これで、4人のフルメンバーとなった。前室に水渡さんと浪川さん、キャビンのソファーに柏、後室のキャプテンルームに小西さんといった布陣で寝泊まりすることになった。夜は水渡さんのウェルカムパーテイで、出島の「R10」と言うイタリアンレストランで、ブリのピザ、パエリアなどで気勢あげた。

4月28日（土）　晴　　出島港　沈殿

午前中に、新西宮ヨットハーバーの仲間、峰さん、イギリス人のトムさん、佐藤さん夫妻、鳥越さんが、サンセットマリーナから、ナウテイキャットの 42ft のウイズダム号で合流する。明日から、対馬厳原まで同道する計画である。夕方から昨年も行った中華料理店「紅灯記」で第１レグの報告会をする。港に帰ると各帆船が電飾を行って帆船祭りを盛り上げていた。我々も桟橋の向かいにあるカフェのベンチに陣取り、見事にデザインされたカプチーノを飲みながら、祭りの余韻を楽しんだ。

4月29日（日）　晴　　出島港　05.50 ～　14.05　宇久マリーナ　　51哩

7時に出港したウイズダム号に、12時半頃、追い付かれる。10ft 違うだけで船足が１～２ノットは違う。

お互い写真を取り合い、国際ＶＨＦ無線で話し合いながら並行して進むも、すぐに追い抜かれてしまう。30分遅れで、昨年も来た宇久マリーナに入港する。ここの浮桟橋はどうも、ひ弱い感じがする。数年前、大型ヨットが台風にやられた時、桟橋までも壊れてしまったそうである。停泊料1,100円を取られる。夕方、峰さん達が泊まっているホテルに、お風呂を貰い行く。峰さん達は我々と違って原則ホテル泊まりである。奥さんから、「あら、皆さんはホテルに泊まらないの？」と言われる。泊まれるなら泊まりたいですよ。２０数日間ずっと狭い船室暮らしの者にとっては～。しかし、ホテルは有料ですからね。　小西さんはウイズダム号でナビオニックスというヨットのカーナビみたいなものを教えて貰っている。タブレットに取り込めば、海図は不用とのこと、えらい時代になったものです。夕食は、水渡さんお手製の豚

肉の塩麹漬けと昨日買った平目の刺身、それに駐在所の奥さんから貰ったきびなごのスダチ味噌漬けの豪華版、酒が大いにすすんだ。

4月30日（月）　小雨のち曇　　強風
宇久マリーナ　沈殿

天気は曇であるが、強風が吹いており、天気図を見ると、前線の連続、強風・波浪注意報も出ており、平均１５ｍの風と予測されていたので、我々は出港を見合わす。僚船は一回り大きく、一夫婦を除いて、ベテラン揃いなので、少々の悪天候でも大丈夫。行けそうなら対馬厳原へ、無理な場合は対馬を諦めて、壱岐島へ転針する予定で７時頃出港していく。30分程して又、入港して来た。ＧＰＳの不調と波風が厳しかったので引き返したそうでる。きっちりと停泊料を取りに来る。今日は陸電代も併せて1,600円取られる。町はずれにある飯屋「かっちゃん」で、アジフライ定食等を食べる。新鮮で旨かった。帰りにスーパーと酒屋に寄り、アルコール燃料と食料を補給するも、一人が傘をどこかに寄贈してくる。夜は真向鯛、ハマチのあら、アジのツミレ、キノコ類の寄せ鍋。今日も酒がすすむ。

5月1日（火）　曇のち雨　強風　宇久マリーナ　05.25　～　14.20　対馬厳原港　　59哩

７～８ｍの風の中を出港。６・５ノットで機帆走する。段々と風が強くなる。6時30分に出港したウイズダム号に11時20分位に追い抜かれる。白波を掛立てて進む姿が勇ましい。更に風が 15～18ｍと強くなり、縮帆しながら進む。ウイズダム号より30分遅れで、厳原港に入港。ウイズダム号の隣の岸壁に横付けする。高速船で先行されていた奥さん方と合流。すぐ、ホテルにお邪魔しシャワーを使わせてもらう。今日は水渡さんの古希の誕生日。ホテルの一室に集まって、シャンパンとウニでお祝いの乾杯をしたあと、モダンな串カツ屋で盛大な誕生パーテイをする。ここの干満の差は 80㎝位である。今回のクルージングで初めて岸壁に横付けしたので、ロープの調整と確認の為、夜中に二回ほど起きる。

5月2日（水）雨　強風　厳原港　沈殿

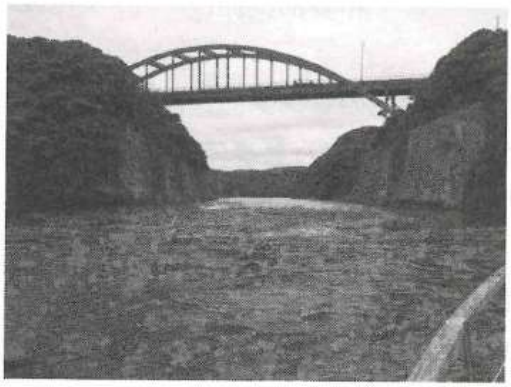
峰さんとトムさんの二人で、大島を経由して関門海峡を越え、最終的には大分むさし港を目指して、7時に出港。残りの人達は高速船で福岡へ直行されることになった。福岡まで我々なら二日は掛かるところ、2時間だそうだ。波が当たるので、船の停泊位置を港の更に奥に移動させる。軽油を５６Ｌ補給、8,081円なり。

高速船で帰る人達を見送った後、コインランドリーで洗濯をする。最近のはカラカラに乾いてくれるので気持ちが良い。白岳登山が出来ない憂さを晴らしに、

裏山の清水山城跡を登りに行くも、三の丸で引き返す。昼食に「ろくべえ」なるものを食べる。10 月頃サツマイモを粉にして 2 月頃まで発酵させ、それを糸コンニャクみたいに成型して、うどんのようにして食べる対馬の保存食だそうだ。アゴの出汁で食べるのですが、さつまいもの味はせず、むしろ食感を楽しむ食べ物だった。厳原の町を歩くと、韓国人の観光客ばかり。標識や広告もハングル文字ばかり。何処の国に来たのかと思うほどです。夕方、地元のヨットマンの訪問を受け、色々と情報を仕入れる事が出来た。

5 月 3 日 (木) 曇　　厳原　05.30　～　06.30　万関瀬戸　07.30　～　08.10　樽ケ浜 08.15　～　09.30　和多都美神社　09.50　～10.25　黒瀬鏡岩　～　11.45　浅茅湾出口　～ 14.20　つつ港　40 哩

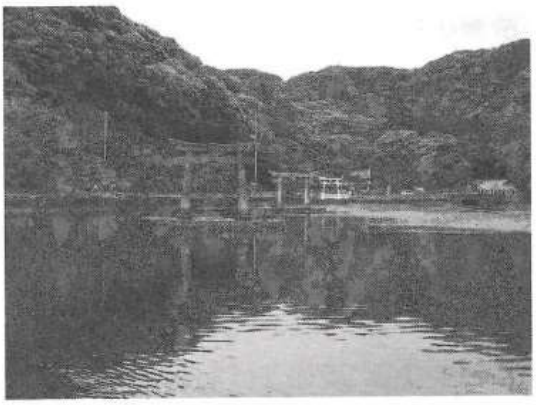
4 時頃から、漁船が次々と出港していく。5 時 30 分に厳原港を出航。2m位のうねりの中、下島に沿って飛行場を遠望しながら北上する。30 分位で下島と上島を分岐する三浦湾に入る。急に波が静まり、湖面を走っている錯覚に陥る。すぐに、下島と上島を繋ぐ唯一の橋。万関橋が見え出す。万関の瀬戸といって、日露戦争の直前の 1900 年に、元々一つの島であった対馬の東西の所要時間を短縮するために、旧海軍が三浦湾と浅茅湾の間を掘削して造った運河である。当初は幅 25m深さ 3m、長さ 500mで、日露戦争の時は水雷艇がここを通って出撃したとわれている。その後、1975 年に幅 40m、深さ 4.5mに拡張されて現在に至っている水路である。6 時 30 分に瀬戸に入る。逆潮の為、エンジンの回転数を 3300 回転に上げて 7 ノットも出しているのに、対地速度 2 ノットしか出ない。5 ノットの潮流である。橋の下、一番川幅が狭いところで折悪しく漁船とすれ違う。小西船長、必死に舵取りをする。切り間違えれば、舳先が潮に流されて、漁船にぶつかってしまう。緊張した一瞬だった。30 分位で万関の瀬戸を抜けると浅茅湾に入る。鏡のような水面を帆走する。



万関の瀬と万関橋

対馬の山々が連なり、綺麗な所である。8 時過ぎに樽ヶ浜に着く。ここには立派なスーパー銭湯があり、許可を貰えば停泊出来るポンツーンまである。既に一隻停泊している。ナウテイ 331 型で船名は

「ハッピーガーデン」とある。後で岡崎さんに聞くと仲庭という福岡のお医者さんで、昨年の小豆島のナウテイのパーテイにも参加した人と分かる。近寄って挨拶をするも、先を急ぐので停泊せず、そのまま、次の目的地、和多都美神社に向かう。海の守り神である此の神社は、鳥居が何本も海の上に立っている。



和多都美神社

観光船用のポンツーンに仮留めして、急いでお参りし、無事の航海を祈願する。同じルートを引き返す途中、先程の「ハッピーガーデン」と行き交わし、国際VHSで交信する。浅茅湾の名所の一つ、黒瀬の鏡岩を見て、11時45分浅茅湾の出口に着く。いよいよ、東シナ海である。今度は針路を南に取り、一路つつ港を目指す。海岸縁は韓国や中国から流れ着いたと思われる発泡スチロールやペットボトルなどのゴミが一杯で惨憺たる状態である。瀬戸内海や、九州南部では見なかった光景である。2時過ぎにつつ港入港。公共岸壁に横付けする。ここは満潮時 157 cm、干潮時2cm干満の差 155 cmである。係留ロープの調整を慎重に行う。夕方、お風呂に入って、美味しい魚を食べようと意気込んで出かける。地元の人に聞いた所、何もないとの事。がっかりしてヨットに帰ろうとしたら、釣り具店のご主人が声を掛けて来て、家のお風呂で良かったら使いなさい、ついでに釣った魚もあるから遠慮なく食べなさいと言ってくれるではありませんか。
そんな厚かましい事出来ませんと辞退しても、是非、是非と進めて頂き、厚かましくもお邪魔することになる。奥様にも、どうぞ、どうぞと気持ちよく迎え入れて頂きました。順番にシャワーで汗を流させて貰い、お食事まで頂きました。今日締めたブリの刺身、陣笠貝の煮付けと天ぷら。サザエなどの貝の刺身と剥き身。根コンブの酢の物。飲み物はビールと焼酎。ブリの刺身が甘くて堪らなく美味であった。仕上げは貝ご飯とカサゴのおみそ汁。「偶々、今日は釣った魚があったとのことで、毎日こんなに食べているのではありませんよ」と笑いながら奥様が話される。聞くとご主人は阿比留さんといって、フィッシングクラブ「せど」の会長で、日本で一番大きい鯛を釣った人として本に載っていた。帰りに気持ちだけの一万円をティッシュに包んで渡そうとして固辞されましたが、無理矢理に受け取って貰いました。息子さん夫婦

と子供さんがヨットを見学に来られる。お料理は新鮮で美味しかったが、一番美味しかったのは、名も知らない人を招き入れ、お風呂を使わせ、ご馳走までする、その気持ちだったかも判らない。

5月4日(金)　晴　つつ港　05.20　～　15.00　小値賀港　　60哩

今日で対馬ともお別れである。久し振りに太陽を浴びながら、機走する。6時半頃から、トローリングの仕掛けを放り込む。11 時頃、この航海で初めての当たりがくる。昨年、大魚の取り込みに失敗した経験から慎重に取り込む。70 cm 位の立派なブリである。水渡さんがすぐに馴れた手つきで血抜きをする。釣れた嬉しさで、その時は刺身しか頭になく、頭と内蔵を捨ててしまい、後で後悔する。3時に小値賀港に入港する。漁協で係留地をきく。夕方6時から翌朝の6時の間は、連絡船のポンツーンが使えるということであったが、移動するのが面倒ということで、公共岸壁の階段に横付けする。今日は大潮でもあり、干満の差が 280 cmもある。漁師さんに、満月の夜は釣れないので漁師は皆家にいる。新月の時は皆漁に出ているので、夜這いを掛けるなら、新月の夜に限ると楽しい話を聞かせて貰う。　アワビの展示館を見学、思い切ってアワビを200ｇ購入する。値段は2600 円、我々としては思い切った金額であった。夕食前に町中を散歩する。最近では見かけなくなった鯉のぼりが沢山泳いでいる。この島は小西一族の島かと思うほど、小西姓が多い。小西さんも実は先祖はここの出身だったと言い出す始末。この島は箱物行政の典型的な島。３千人弱の人口に立派すぎる役所、交流センター、ナイター付き総合運動場、美術館にセスナの飛行場まであった。長崎へ行く時は町から補助が出るそうである。何か複雑な気持ちになる。船に戻って、今日つり上げたブリとアワビの豪華な夕餉となる。ブリの刺身、ブリ大根、ぶりの照り焼き、ブリのニンニク叩き、それにアワビの刺身。贅沢限りなしであった。

5月5日（土）　晴　小値賀港　05.45　～　13.00　荒川港　～　14.00　井持浦教会　15.00　～　15.40　　荒川港　45哩

快晴のもと、あと３日になったクルージングを味わいながら、結構なうねりに揉まれて進む。時間もあるのでロープワークの復習をする。もやいやクリート結びは簡単であるが、ちょっと込み入った結び方はすぐ忘れてしまう。特に岸壁で漁師さん達に見られている時は、ロープワークでその人の経験がすぐ判るので緊張する。昨日の味をしめてトローリングを仕掛けるが、柳の下に二匹目はいなかった。1時に荒川港着。停泊地のみを確認して、そのまま、井持浦教会へ向か

う。教会下の船着き場の漁船に横抱きをして貰い、上陸する。日本で最初のルルド（聖母マリアの泉）がある所。教会も日本で初めて造られた煉瓦作りで、確かに風格という物があった。4時前に荒川港に戻り、一番奥にあるポンツーンに民宿の了解を得て舫う。ポンツーンで釣りをして、アジを12匹釣り上げる。夕食はアジの唐揚げ、昨日のブリ大根の残り、もやし炒め、角煮の混ぜご飯。熱々の唐揚げが美味しかった。

井持浦教会

5月6日（日）　晴後曇　荒川港 06.10 ～ 11.20 福江港 11.30 ～ 13.30 岸壁のキリスト ～ 15.00 奈良尾港　43哩

出発前にビルジの水漏れが判明し、床を開けて調べると前部に水が溜まっている。どこから漏れているかすぐには判らない。塩水ではないので、海水ではなさそうである。雑巾と小バケツで水を掻い出す。サンセットマリーナで徹底的に調べる事にして、取り敢えず出港する。7～8mの風だが真後ろなので、機走する。五島列島最南端の大瀬崎では複雑なうねりに少々手こずる。黄砂で視界が悪い。11時に福江港に入港し 停泊可能な箇所を偵察する。港に入って左側の公共岸壁らしき所しかなさそうであった。11時30分　昨年も来た岸壁のキリスト像と母子像のシルエットを見学する。船でしか見られない光景である。我々が行った時も観光船が停泊していた。奈良尾港もポンツーンがあり、右端のポンツーンには先着のヨットがいた。その後ろに舫う。沖縄から回ってきて、静岡まで帰るそうである。彼らもやはりホテル泊まりであった。20 数日ヨットで寝泊まりしているのは我々位か。山の上にある奈良尾温泉に入るため、階段を15分上る。入浴料は250円だった。苦労した甲斐があって、温泉からの眺望は抜群であった。船に帰るとポンツーンで取った貝の整理をしていた漁師さんから黒口貝をボウル一杯貰う。夕食は浪川シェフの黒口貝の鷹の爪がヒリヒリに効いたボンゴーレと、貝のオリーブ・ニンニク炒め。小西板前のニンニクの塩コショウ・バター炒め。まさしく男の料理そのもの。

5月7日（月）　晴　奈良尾港 06.50 ～ 13.30 サンセットマリーナ 14.30 ～ 15.30 出島港　39哩

好天に恵まれ、8m～15mの風を受け

ながら帆走する。約6ノット出ている。聞こえるのはサーサー、チャプチャプという波を切って進む音と、時々羽ばたくセールの音だけ。皆も今回のクルージングを振り返っているのか、押し黙ったまま。時々、波にテールを取られ、大きくヒールしながら、長崎に近づいて行く。只、残念なことは黄砂で相変わらず、視界が悪い事である。1時からエンジンをスタートし、機走に切り替える。1時半にサンセットマリーナに入港。燃料補給103L。水漏れ等のチェックは9日に行うことにし、出島に向かう。出島ではハーバーの田中さん、入江さん、世界一周を十年近く掛けてされた「KISARAGI号」の大鹿さん達の出迎えを受ける。打ち上げをやろうと出かける。「紅灯記」に明日の予約を入れに行ったついでに、銅座にある「志乃多寿司」を紹介して貰う。7人程入ると満席の小さな寿司屋であるが、ママさんが薦めてくれただけに、美味しい寿司と刺身を堪能出来た。しかも割安で。ほろ酔い気分で長崎の町をうろついて船に帰る。

5月8日（火）　出島　沈殿

午前中、岸壁やフェンダーでこすれた船体や、潮で汚れた窓ガラスが、クルージングの苦闘を物語る、お世話になったバゲラ号の船体の化粧直しを、ピカピカになるまで徹底的に行う。昼からバスで福の湯へ汗を流しに行く。船に帰ると、小西さんの友人である山田さん、吉川さん達が乗っている「カルデイナスⅡ号」が、ハウステンボスから入港してきた。暫し、情報交換を行い、一緒に昨日予約していた「紅灯記」で、九州クルージングの打ち上げをする。船に戻って、「カルデイナスⅡ号」を訪問、二次会となった。吉川さんは強烈な海軍お宅であった。海軍大佐を海軍では海軍ダイサと呼ぶことを初めて知った。12時近くに辞する。

5月9日（水）　晴　出島港　08.00　～09.00　サンセットマリーナ～神戸

吉川さんの起床ラッパで起こされる。出島には4艇のヨットが停泊していたが、皆びっくりしたことであろう。「カルデイナスⅡ号」のクルーに敬礼で見送られながら、お世話になった出島を後にする。9時にサンセットマリーナに着く。25日間の内、航海14日、520哩、約1,000kmの思い出深いクルージングは終わった。水渡・柏組は、シュラフやシーツなどの洗濯物を持って、タクシーでコインランドリーへ行く。残った小西・浪川組は、修理業者とメンテナンスの打合せ、水漏れ箇所と不具合の箇所の調査を行う。水漏れは主にラダーシャフトからと判明する。秋までこのサンセットマリーナに係留する。さて、次回は何処を目指そうか。小西船長、水渡さん、浪川さん、そしてバゲラ号。有難うございました。

目次

— 論考 —

単独行　転落　極限行　を考える

雨宮　宏光（昭和 33 年経）

第一章　単独行

登山者が単独行に求めたのは自由。複数行で感じた不自由からの解放です。
頂上を踏むことなく荷揚げと登頂者への支援だけだった登山への不満。
テントの中で違う人生を歩んできた人達との人間関係から起こる煩わしさ。
自分の身体能力を出しきれなかった不満。

誰もが知っている加藤文太郎、しかし加藤の時いま書いた事情と違う。

著書『単独行』を読むとき彼は仲間を求めていたが誘いを受けた友人は、加藤の馬力、歩速に恐れをなして辞退するのを常とし、単独で行かざるを得なかったのです。さきに書いた複数行のもつ不自由（不満）は誰にでもある話で、我慢できないことではない。どうしても我慢できない隊員同志の嫉妬、裏切りから生じた人間不信。ボナッティを単独行へと向かわせたのは。

嘘と裏切りのＫ２初登頂

1954 年、Ｋ２初登頂の 50 年後に、この初登頂の裏には許しがたい「嘘と裏切り行為」が隠されていたことをイタリア山岳会が認めた。

酸素ボンベを担いでＣ9 まで上がってきたボナッティとフンザのハイ・ポーター・マーディは吹雪の中で約束の場所にＣ9 がない、それは信じていた仲間の裏切りだった。

アタック隊の二人は登頂前日Ｃ9 を荷揚げ隊と約束した場所より上に建設していたのだ。ボナッティはアタック隊の二人を求めて叫びまくった。

やっと上からラチェデツリの声が聞こえた。「酸素ボンベを置いて下山せよ！」と。Ｃ9 に入れてもらえず、二人はツエルトもないビバークを強いられた。翌朝二人はビバーク地点にボンベを置いて下山した。

アタック隊の二人はボナッティ達が下山するのを見て、酸素ボンベを取りに一旦下り、初登頂を果たしたが登頂 2 時間前に酸素が切れたと報告している。それは抜け駆けして登頂を狙っていたボナッティがビバーク中に酸素を吸った為だと登頂隊員コンパニョーニは説明した。(ボナッティは酸素マスクを持参していないので酸素

は吸入出来ない)

初登頂10周年にイタリア紙がボナッティの行動などを厳しく批判したので、ボナッティも名誉毀損で訴訟に持ち込むなど係争が続いていたが、1966年ボナッティが勝訴している。

1986年、この訴訟を知ったオーストラリアの外科医がこの問題に取り組み、アタック隊の行動や標高、時間等を分析し、酸素についても計算結果、登頂2時間前で切れたのは嘘であるとイタリア山岳会を追い詰めた。

また、登頂後50年間沈黙を守ってきた登頂隊員ラチェデツリが2004年、"K2, the Price of Conquest" を刊行し、「酸素が切れたのは傾斜が緩くなってからだった」と発表した。傾斜が緩くなった、それは頂上のことであり、酸素無しで2時間登り続け登頂したという報告は偽りで、ボナッティの潔白が証明された。

南井英弘氏（関西学院大学山岳会）記事に依拠

原典・K2: Lies and Treachery by Robert Marshall

参考：Italian Alpine Club in 2007 published "K2 - Una Storia Finita"

（ボナッティの主張が正確であると認め修正された公認の報告書）

ボナッティのソロ・プチ・ドリュー南西壁、マッターホルン北壁登攀は、人間不信から生じた心の傷の癒しだった。ソロで彼は素晴らしい自由を満喫したのです。

長谷川恒男のとき

1973年、第二次ＲＣＣエベレスト登山隊で登頂した加藤保男、石黒 久の二人は、8,350m地点で遭難寸前となったが、長谷川に救助されサウスコルのキャンプに収容された。二人の下山をめぐって長谷川は「捨石となってでも二人を降ろせ」とベースから指示された。捨石とは？

当時サウスコルに居た宮地由文が語る。「長谷川を殺してでも、あの二人を生かせ。とにかく下におろせ」と言った意味に思えた。遠征隊の成否は登頂者の無事下山にあると思いつめた第二次ＲＣＣ隊の決定。長谷川が複数行に感じた幻滅感。

彼は自分が主役となれる単独行に入（はい）り込んでいく。

力量がなければ出来ないが、彼にはそれがあった。

'74年3月、谷川岳滝沢第二スラブ、'75年1月屏風岩から北尾根四峰正面、前穂東壁から前穂高、奥穂高、北穂高、滝谷クラック尾根、槍ガ岳、北鎌尾根にいたる単独行。

'77年から'79年にかけてアルプス三大北壁の冬季単独登攀と続く。

ソロクライマー中嶋正宏と鈴木謙造

アルピニズムやパイオニア・ワークの時代に遅れた若者の行き場のない選択は、自殺行為に近いソロ登攀となり、中嶋（1980年代のトップクライマー）は八ケ岳・大同心で、鈴木（1990年代）は、ミディ北壁（欧州アルプス）でクライミング中に墜死した。　享年25歳と29歳。短い一生でした。

『山と私の対話』・志水哲也・編・みすず書房　「ソロクライマーとして」の各稿に中嶋正宏、鈴木謙造などがソロ登攀について語っている。

ここに共通しているのは登山の価値観が形ある成果（初登攀・14座など）から個人的志向 —— つまり危険を冒しそれに自分が耐えられるかどうかを試そうとする生き方にあったという。

命がけを自分の人生に対する負荷として課した登山。

なんのための「命がけ」であるか？

親に心配かけ、親より先に死んだ。

それにしても相応のところで折り合いをつけず、命がけに突き進んだ彼らは、ある意味で贅沢な青春を享受したといえる。

『ソロクライマー　鈴木謙造遺稿集』　私家版

『完結された青春』　中嶋正宏遺稿集　山と渓谷社

単独行者が複数行となったときの危険

加藤文太郎は昭和11年1月、風雪の槍ケ岳北鎌尾根で遭難死。単独行でなく同伴者がいた。同伴者の功名心に引きずりこまれたのが死の原因とする説があるが、二人とも死んだので実際のことは分からない。

それまでの加藤の山から言えるのは「山に居（い）る力」は尋常ではない。単独なら死ななかったのではないか。

長谷川恒男は、1991年カラコルム・ウルタルⅡ峰で雪崩に遭い相棒・星野清隆と遭難死。単独行の名手が複数行で死んだのは。

ソロの時、危険察知の勘は研ぎ澄まされる。遠征隊の隊長だった長谷川は、隊員への気遣いで勘が鈍ったのか。一人なら死を逃れる別の判断があったかもしれない。

また、長谷川は1983年以後の遠征（6回）は全て敗退しており、どうしても成果

をあげたい焦りもあった。

山野井は、岩壁登攀は単独のほうが安全という。パートナーに引きずられて滑落する危険がない。同伴者の行動に神経が行き過ぎると自分も危うくなる。
彼が複数行で行った登攀（クルティカと二人）は三回とも敗退している。

ソロと幻視体験

山で体験した幻視体験は『奇蹟の生還へ導く人』著・ジョン・ガイガーが多くの事例を挙げて紹介している。

ラインホルト・メスナーは単独のナンガ・パルバートで死が差し迫まったと思われる状況のなかで、何かが起きる。メスナーによれば、不可能からの出口へと導いてくれる 「姿なき同伴者」が現れる。誰か一緒にいたことは「孤独感を抑えるための心理的な力になった」と。
チョー・オユー南西壁をソロで登った山野井は次のような経験をしている。「姿は見えなかったが確かにクライマーと思える人間がいつも後ろを歩いていた」。ラッセルやビバーク地を整理しているときも「なんでラッセルを代わってくれないんだ」とか「整地の手伝いをしてくれ」とか、自分でしゃべっていたのを覚えている。

ガスで見えない、どっちだ。後ろから声がした「右だ、右のほうに進め」誰だ！また声がした「右だ、右だ」確かに誰かがいた。

『ミニヤコンカ奇跡の生還』　松田宏也

8,000mでビバークしたヘルマン・ブールは手袋をはめようとしたが、その手袋はなくなっていた。ぎょっとした僕は、あの不思議な同伴者に尋ねる。
「おい、僕の手袋を見なかったか」　「お前はなくしてしまったじゃないか」

孤独かつ極限的状況がもたらす特殊心理は、モノにも語りかける。
ボナッティはマッターホルン登攀中ザックにぶら下げたぬいぐるみに話かけている。
長谷川恒男は冬季アルプス北壁を単独で登攀中、打ち込んだハーケンに、「ちょっと頼むよ」とか、いうことをきかないザイルに「しょうがない子だな」「いけない子

ね」と語りかけている。

自我の外化

極限的単独行者は「姿なき同伴者」と会話を交わしている。彼等になにか共通の法則でもあるのだろうか。

心理学者、脳神経学者が『奇蹟の生還へ導く人』で「サードマン現象＝姿なき同伴者」を説明する仮説によれば、心理学でいう「自我の外化」という現象らしい。

≪社会から隔絶された場所に独り身をおいていると、自我から分離した第二の自我が生まれ、ソレが外へ出て行ってむこうから自分に語ってくる。そのうち普遍化した、この第二の自我によって自分が取り込まれるという経過をたどる≫

忍者小説にある一種の分身の術みたいな現象らしい。

いうまでもないが全く会話のない日常などありません。ソロのとき、話し相手がいないという非日常が続く。このような状況がもたらす特殊心理が幻視体験を引き起こす。自我の外化といった現象は独房内のような閉所でおこりやすい。また緊張意識や精神的苦痛を緩和するための手段の一つでもあるといわれている。

第二章　転落

メスナー著『死の地帯』～その一章「転落」から。

突然、難に遭ったものが生命を失う瞬間にどんなことを感じるのか。

人は、絶望の極み苦痛などを想像するが事実はそうでない。転落の瞬間に失神状態になって死んでしまう。

多数の事例を検証した仮説によれば。

転落して死を意識した瞬間に不安からの解放、心眼を走り抜ける過去の人生、家族や友人への発作的追憶、自分が自分の肉体の外にある、つまり自分が自分を観察する者になるという感覚がある。以下多くの事例・検証があるが省略して、要は痛いとか恐いとかは感じないという。

転落して死なず正気に戻ったときの特徴は、まず痛みを感じない。驚愕による萎縮、不安も絶望ない。むしろ冷静、ふかい諦めと事態に対処する精神的安定がある。

多くの転落者の体験談からメスナーが知ったのは、転落の瞬間には苦痛も恐怖もない。運良く生きていたときは冷静であるという事実だった。

転落死が恐ろしいものになるのは転落後に意識が回復し、その後何時間、何日と

かかつて除々に死んでいく場合だけである。

メスナーは転落・失神・即死は、遺族の悲哀、世間への迷惑を別にすれば、本人には結構な死に方であったという結論に達している。

図書紹介 ――― 『死の地帯』1983・山と渓谷社

登山報告ではない。多くの転落体験の事例・文献を検証し、死と生について語る異色の書。その執筆のいきさつは。

1970 年ナンガ・パルバート登頂後の下山ルート・ディアミール谷、死の地帯での 5 日間。3 日目に弟ギュンターが氷雪ナダレで死んだあと、兄メスナーは何もかもどうでもよい「どうせ死ぬのだ」と運を天に任せた。死人のような状態で現地の農夫と羊飼いに助けられ、木の下で横たわっていたとき、生死のはざまで感じた「どうせ死ぬのだ」という気持ちは消えていた。

死ぬと決められたときと平穏な状況の時とでは、死に対する思考が違う。この体験から死が近ければ近いほど、死に対する恐怖は遠のいていくことを彼は知った。

死は彼にとって新しい意味をもつ。この記憶が消えぬうちにナンガ・パルバート死の遍歴で感じた現象、体験を書いておこう。遠征から帰国し凍傷治療で担ぎこまれたインスブルックの病院で『死の地帯』の執筆がはじまった。

この書におけるメスナーの考察は登山中の死に限定されていて、普通の死で意識の失われる寸前に何を想うのかは神秘の領域であるとしつつ、登山で絶命寸前に奇蹟的に死から生還した者なら語れる、とあるのは興味深い。

余談として ――― 「8, 848 メートルへの実験」

8, 848mの無酸素登頂は可能か否かに決着をつけたのは、ナンガ・パルバートの体験。生死ギリギリの臨界点では考える能力が失われ、死に対する恐怖は遠のいていく。

つまり精神的苦痛は極限状況が解消してくれる。

問題は身体的苦痛に耐えられるかどうかで、メスナーは身体能力を出し尽くしてエベレストの頂きにたち、無酸素登頂の実験に成功した。

事例　死の地帯からの生還

1980 年 7 月 18 日、パキスタン・カラコルム山脈。山岳同好会の大宮求氏は、同僚の岡野孝司氏と共に標高 6, 456mのラトラック 4 峰の登頂に成功した。しかし、

ベースキャンプへ引き返す途中、標高 5,800m付近で突然足元が崩れ、二人とも落下してしまった。二人が落下した場所は、氷のクレバスに雪が降り積もって薄いフタ状になっており、即死してもおかしくない状況であったが、二人は奇跡的に生きていたという。さらに、大宮氏は骨折していたにもかかわらず、全く痛みを感じていなかったというのだ。

一方、一緒に落下した岡野氏は、しきりに胸の痛みを訴えていた。そして遭難から5日目、救援隊は来ず、食料も底をついたため、遂に大宮氏は脱出を決行。足首を骨折しており、歩くことのできない彼は、はってベースキャンプへ向っていた所を捜索隊に発見され無事に保護されたのである。大宮氏によると、本来なら眠ることも出来ない程の激しい痛みを伴う重傷を負いながら、7 日間も全く痛みを感じなかったという。

平井一正氏　記事　引用

事例　服部文祥の滑落

テレビ番組「情熱大陸」取材中の南アルプス聖沢で、滝を迂回中に 30 メートルほど滑落。滑落中、何度目かの「ヤバい」が頭に浮かび「オレの死ぬ番だと」思った。言葉で考えるのでなく矢継ぎ早にイメージが頭にうかんでくるかんじだった。

気がついたら腹這いで沢床に倒れ半身水につかっていた。

ひとときだけ気を失っていたらしかった。滑落中に「死ぬ」と思ってから沢床で気がつくまでの数秒間、頭をうった瞬間でなく「死ぬ」と意識した瞬間から記憶がないのだ。

おそらく心理学で言うところの防御体制なのだろう。

『考える人』季刊誌　2012 年冬号　服部文祥の記事抄録

事例　中崎尾根での滑落

～甲南大学山岳部・谷 勇輝（当時現役１回生）記事　原文のまま～

2005 年 3 月 18 日、北アルプス・槍ヶ岳山頂へ通じる中崎尾根。当時１回生の私は、先輩と 2 名で槍ヶ岳山頂を目指していた。私達は中崎尾根上 2,500m付近でアイゼンを外して幕営の準備をしていた際、ポールが滑り落ちた。辛うじて木に引っ掛かっていたポールを取りに行くも、足を滑らせ飛騨側の急斜面を滑り落ちた。滑落距離は推定 200m。しかし、滑落した斜面がカール状になっていたため、傾斜が

緩やかになったところで辛うじて停止することができ、一命を取り留めた。

滑落時の記憶を辿ると、不思議なことに滑落中は自分を客観視し、頭部保護するなど、危険回避の為、態勢を変化させて冷静に対処していた。最終的には、滑落停止姿勢の四つん這いで止まることが出来た。その様子は今でも脳裏に焼き付いている。この時は山に生かされたという安堵の気持ちでいっぱいだった。実際は、左膝膝蓋骨骨折（膝の皿）を負っていた。ところが、全く痛みを感じることはなかった。

谷勇輝は2007年、同志社大学・山岳会が主催したクビ・ツアンポ源流域学術登山隊に参加しクビ・カンリ（6,721m）に初登頂。　（雨宮宏光　追記）

第三章　極限行

極限行とは精神的にも肉体的にも極限までの対応を要求される登山行為である。

極限行の世界

既成勢力にモノ申した小西政継、原 真、 先鋭登山への提言も今となっては生ぬるい。ラインホルト・メスナーや山野井泰史がソレを証明する。

極限をいく登山者は言葉で語れぬ世界を体験する。死と対抗し生きていくとき、薬物によらぬ意識の異常な昂揚、幻視体験、すべてを放棄して自然に身をゆだねたときの安堵感と陶酔。

メスナーが著作で表現する言葉を引用し書き並べると仏教の涅槃（安らぎの境地）にいたともおもえる。表現こそ違うが山野井も同じような体験を持ったという。

フアニート・オヤルサバル（スペイン 1956～　）8,000m登頂回数21回は、高所では別世界にいる感覚が訪れる。生死の境目にいるという意識を頭だけでなく体がもたらす。それはある種の麻薬作用のようなもので人と山が融け合って、夢幻の世界を浮遊したような感覚です。

極限行に　求めたもの

登ることで人類の可能性の限界を高めた極限行は、彼ら自身にとっていかなる意味合いを有する行為だったか。メスナーや山野井の当初の山は外なる存在（実力誇示と名声）にあったが、ある時期から内なる存在（自分自身への満足）を求めている。

人は何を求めて生と死のはざまに身と心をおいたのでしょう。

1989年チョー・オユー（8,201m）、シシャパンマ（8,013m）を3人パーティで、標高差 3,000mを一昼夜で往復・登頂したヴォイテク・クルティカ（ポーランド）は、なぜそんな苦しい登山をするのかと問われ、アルピニズム誌の論文『山の道』でこう書いた。

登山とは山を舞台にして自らに強大な負荷を課し、それを超克することも目的とする行為であり「苦しみの芸術」ともいえる。

なんだか難しいが極限を克服した時にかんじる満足は、芸術家が困難な目標を設定し、それを克服し完成させた時に感じる満足に近いということか。

山野井は、壁と対峙して登攀ルートをイメージする。このルートに絵画のような美を感じるときがある。「イメージしたラインは美しかった。このラインをなぞるのだ。僕にとってクライミングはある種の芸術作品です」

クライミングを単なる行為でなく芸術にまで昇華している。

1978年、80年とエベレストに登ったメスナーは、「なぜ、2回も登ったのか」との記者の問いに、こう答えた。「78年のときは力を全部だしきったのじゃなかったから」

（78年はP・ハーベラーと一緒の無酸素登頂。シェルパの支援もあり満足できる成功ではなかった）

同じ問いに、1980年『チョモランマ単独行』では、こう書いた。

極限に耐えきった時、自分の身体、精神の対応力の真実が分かる。これを「自分自身の真実」と形容している。メスナーも極限行を苦しみの芸術とし、自分を表現する自分の意識の奥を深く知るという意味で、画家がある意思を画布に描くのと同じだとも表現する。

美しいと感じたり、心うごかされたりしたことを、絵、写真、コトバで表現することを芸術としたら、8,000mでじっくり構えて絵を描くとか写真を撮るのは不可能で、極限で彼らが知覚した自分（自我）は、コトバ（文章）と言う手段で表現するしかなかった。

だいたいあらゆる表現手段は不完全である。とりわけコトバはそうだ。話がすこし重苦しくなってきた。

ここで時間と考えることを節約し、素人の心理学で「自分自身の真実」とか「苦

しみの芸術」を意訳すれば、どうやら極限行者は「自らの身体能力を出し尽くす」ことに、悦びを覚える人種とはいえる。

D・リースマン（米・社会学）は著『孤独な群集』で、人間の社会的性格として以下の三典型をしめしている。

一　伝統指向型　　世間を気にする
二　内部指向型　　冒険的　非妥協的
三　外部指向型　　他人との関係によって行動を決定

この説に従うなら、極限行者は親・家族の心配をよそにした勝手者、山極道。「自分自身の真実」を知るために、死ぬかもしれぬ山に死なないために行くとは、いったいどういうことなのか。

なぜ、極限行に

ジャン・コスト（仏・1904～1926）は、4年間で初登攀14の記録を残し1926年フランスのラ・メイジュでなくなったクライマーです。22歳でした。詩集のような著『アルピニストの心』で、大自然との闘争が人生を素晴らしくしてくれた。ただ、ただ、山にいきたくてしょうがない。「なぜ、山に」と自問したとき、それは登りたいから。山に理屈はいらない、と語っている。

1953年エベレストに初登頂したテンジン・ノルゲイ（ネパール・1914？～1986）は、英国隊に参加したとき、今度こそ「登るか、死ぬか」だと家族に言い残して出発しています。テンジンが金と名誉のために登ったと考えている人は多いだろうしそれはある程度正しいに違いない。しかしそれが全部ではないし、今となってはほとんど無視してもかまわないことだ。1952年、8,600m（スイス隊参加）で敗退した執念が吐いた言葉は、「なぜ」に単純明快。「登り残したから」でした。

山野井泰史。は、死ななかった。

彼は「山で死んでも許される登山家 —— 死」と題したコラムで、

「山は逃げていく。年とったら登れない。今しかできないことを、激しく全力で挑戦していきたい。山で死んでもよい人間がいるとしたら僕はそのうちの一人だ。これは僕に許された最高の贅沢かもしれない」

もし彼が山で死んだとしたら「あ、やっぱり」で、しまいでした。

死に急（いそ）ぐのではない。生き急いだ彼に「なぜ、そこまで」と問うたら「うまく説明できない」というだろう。

道場で竹刀を振り回して稽古に励んでも、命をかけた修羅場の実際はわからない。

極限から生還したクルト・ディームベルガー『K2 夏の嵐』、山野井『垂直の記憶』ほか手元の本で、なぜ、極限行に —— を探ったが、この問いには「特に理由はなかった」と答えるしかない。極限に身を置く登攀者は言葉で語れぬ世界を体験する。表現者メスナーは、極限での内的体験を文章表現に引き戻すため、マイクロカセットレコーダーに行動中のつぶやきを録音し、かなりの程度でその世界を言語表現に還元させた。

ここに感想はあった。情報も勿論あった。しかし「なぜ」にふれた描写はない。

極限行自体に客観的な意味は存在しない。主観的な意味は存在するが、それは本人にしか自覚できない。

極限行者が自覚した満足を他者が説明することは、ほとんど不可能事に近い。冒頭にこう掲げて、それでもと“先生方”が論じあう言葉のやりとりは、行動心理学や哲学（人間とはいかなる存在なのか）までに及び、難解な語彙や専門用語の飛び交う言語遊戯のような空間に迷いこむ。この内容、難しくて訳がわからなくて、ようするに何がなんだかわからない。

なぜ、極限行に。

そこに求めた満足を説明するのは、凍った手袋をはめたままで靴紐を結ぶより難しい。

2007年5月　（2012年4月加筆）

目次

趣味は何時までも変わりなし

鈴木　頼正（昭和33年経）

旧制大阪府茨木中学校に入学して、まず昆虫部員募集の張り紙が目にとまった。翌日意を決して生物研究室の扉を開いた。中に入るとホルマリン漬けの標本がずらりと並び異様な感じ、奥には蝶の標本が引き出し棚に保存され、その数と美しさに目をみはるばかりでした。中央に先生が三人おられた、一人は運ちゃんと言われた。鳥打帽子をかぶるとタクシーの運転手そっくりの先生、植物、園芸が専門。もう一人は少し高齢で怖そうな先生、いつも難しい理論を喋る生物の部長先生。もう一人は気の良さそうな笑顔の先生、微生物が専門だそうです。
部員は4年生を筆頭に約十人ぐらい、正しく部員の数が判らない、この人は部員なのか、入部するために様子を見ているのか、また珍しい標本を見に来たのか、入れ替わり生徒が黙って部屋に入ってくる。ときには昨年医大予科に入学されたＯＢ二人が先輩ずらした顔をして座っている、これは誰でもよくわかる。

昆虫部は夏休みに高槻神峰山寺、京都鞍馬寺、美山の大悲山等の五日ばかりの昆虫採集合宿、ときには仲間で比良山武奈ガ岳、大山桝水原での昆虫採集。また中二の時に毛布を袋状に縫って松本から岩魚止、明神、徳澤園、槍ヶ岳へ。夏テントは寒くって殺生小屋に逃げ込み、翌朝目覚めると小屋には我々四人だけで、みんな出発した後だった。大天井では雨と雷に襲われ、はえ松の中に隠れたが生きた心地がしなかった。苦労した甲斐があって高山蝶、珍しい蝶をたくさん採集した。営林省のお役人に注意されたが採集した昆虫は見逃してくれた。とっぷりと日が暮れて小屋に着き、疲れてぐっすり寝込んでしまった。翌朝目を覚ますと藁の敷布団の上に蚤が大勢でジャンプしていた。

山の雄大な姿、山の独特な匂い、連なる山の峰、濁流の川、美しい花、それは昆虫採集と同じくらい魅力的なものです。

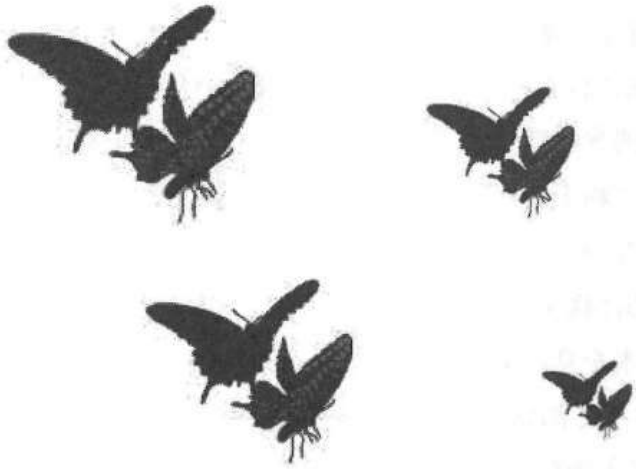
昆虫の中でも私は蝶だけです。蛾には興味がわかず、甲虫その他は新種がよく

発見されますが、これも興味がなかった。蝶の生態は卵から幼虫が生まれ、蛹になり最終の成虫は次の世代に引き渡す増殖の役割を担っている最終の形態なのです。

蝶の採集は獣の狩猟と同じものです、蝶を追うのとハンターが獣を追う感じはまったく同じものです。写真撮影も同じく共通するものがあります。その瞬間は息を殺し、心を集中して、期待通り、最高の状況が到来したとき、その時は我を忘れてシャッターを押す。ヨーシ、ヤッター！その満足感は手柄を取った感じです。山や野原で蝶を見たら、カメラを抱えて追っかけている姿は自分ながらおかしく思います。いつの間にか夢中になっている、よく孫にも笑われます。東南アジヤでゴルフするとき、蝶がやってくるとゴルフボールより蝶を追っかけています。

世界中の生物が激減しています。動物、植物、昆虫もそうです。開発の名の許にジャングルも少なくなり、木々も伐採され、動物も、植物も、虫も、魚もこの地球から消えました。

動物園か植物園でしか見られない動植物がますます増えてくるでしょう。豊かな自然を大切にしましょう。



目次

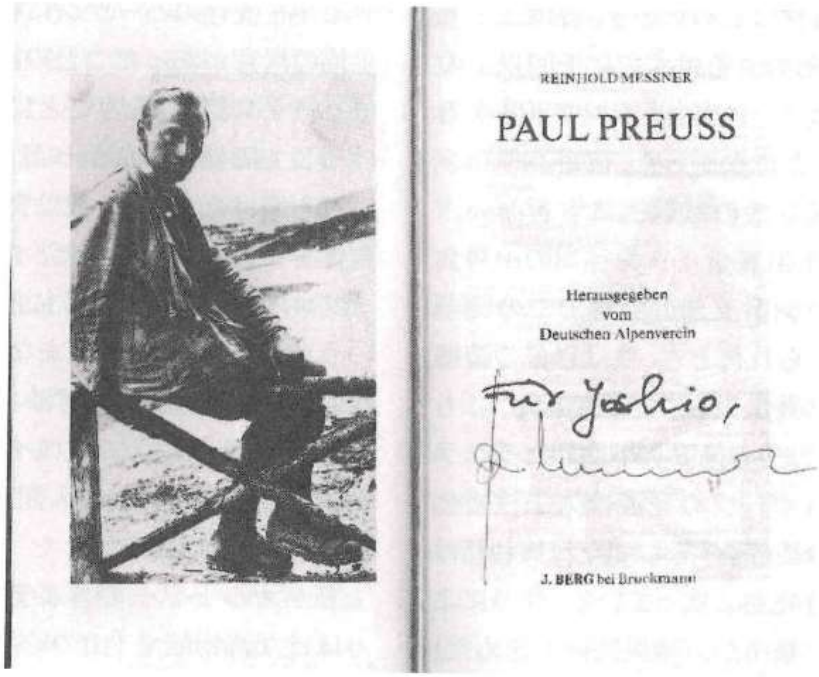
＝随　想＝

フリークライミング運動の始祖　パウル・プロイス

平井吉夫（昭和32年新高卒）

昨年の夏に来日したラインホルト・メスナー氏から、私は一冊の本をもらいました。『PAUL PREUSS』、ドイツ山岳会が刊行している“Alpine Klassiker”シリーズのひとつで、1996年刊。1910年前後にドイツとオーストリアの登山界に彗星のごとく現れ、1913年にダハシュタイン山塊の単独行中に27歳の若さで墜死した天才クライマー、パウル・プロイスの評伝です。内容は大きく分けると、①メスナーの手になる伝記、②プロイスが書いた登山の諸問題に関する論考、③山行記録、④知友たちの回想。そのひとつひとつにメスナーが思い入れたっぷりのコメントを付しています。

ここでは②の冒頭にメスナーが載せたコメントと、「ハーケン論争」に火を点けたプロイスの論考を、訳出して紹介します。



パウル・プロイスの評論のなかでは「ハーケン論争」が最も重要だ。彼の冬山や「狩りとスキー山行」にたいする考えが今日もなおアクチュアルであり、登山とスキーをたしなむ女性に関する彼のウイットに富んだ文章や風刺がにんまり笑いを誘い、「アマチュア問題」には依然として答えがないにせよ、彼が火を点けて高い水準にまで導いた「登山における人工補助具」に関する論争が、いまなお登山の基本的問題のひとつであることは厳然としている。それなしには現代のフリークライミング運動も理解できない。

プロイスが 1911 年に『ドイツ山岳新聞』(ドイツ・オーストリア山岳会会報)でこの議論をはじめたとき、彼は二十五歳だった。そのころはすでに千回以上の山行を重ねていたが、ザイルで下降することはめったになかった。彼がハーケンで自己確保したのは数例にすぎない。1912 年 1 月 31 日、ミュンヘンの山岳会バイヤーランド支部の会議でこの論争が締めくくられたとき、彼は自分の論拠を会衆に納得させることができた。にもかかわらず、その後五十年にわたるクライミングスポーツの発展は人工技術化の道を歩み続けた。そして今われわれはふたたび分岐点に立っている。競争によるスポーツ登山か、(確保技術も含めた)人工技術の放棄によるスポーツ登山か。しかしハーケンによる確保の放棄が、当時はアルプスにおける巨壁問題の解決の放棄を意味したとすれば、今日では確保の放棄は中級山岳における最難関のフリークライミングルートのトレースを不可能にするだろう。登山家は、たいていの人間と同じく、実践よりも理念において、いっそう顕著な理想主義者になる。正直に言えば、クライマーのすべてが、というか、ほとんどすべてが、おのれの不安をハーケンで緩和し、クライミング天国の前衛へと確実に上昇してゆくのだ。

パウル・プロイスもドロミテのインナーコフラートゥルム南壁のチムニーでザイルを既存のハーケンに掛けた。彼に妥協の用意があったことの証拠だ。彼は「ハーケン論争」をみごとに先導したが、けっして固執はしなかった。親しい友人に打ち明けたように、彼は文学的な論争自体を楽しんでいたのだ。

プロイスの著作、とくに批評は、そういう背景を加味して読まなければいけない。論争や対話的思考は、登山活動とまったく同じようにプロイスを喜ばせた。プロイスは行動の人間のみならず、精神の人間でもあった。

私がオルトラーのズルデンにあるちっぽけな博物館で「山の珍品」というタ

イトルでパウル・プロイスのロックハンマーも展示しているのは、彼の仮面を剥ぐためではない。そうではなくて、彼をいっそう人間的にする、彼の妥協を指摘したいからだ。最高の登山家は英雄ではない。彼らはまったくふつうの人間なのだ。

パウル・プロイス
登山における人工補助具
(Deutsche Alpenzeitung ドイツ山岳新聞　1911年8月、第12号)

山岳問題にかんする長い哲学的考察をここで提起したい。これは、数十年にわたって築いてきた誇り高き建造物の支柱を揺るがすような攻撃ではない。私が活発な登山活動を営んでいるさなかに、つねに心中につきまとう考えを、ここでざっとまとめたものにすぎない。私が素描する観念が完全に明確であるかどうかは、まだ私自身にもわからないが、一応は個々の考えがなんとかひとつの観念にまとめられているのではないかと思われる。ひとつだけ、わかっていることがある。私の見解はかなり孤立していて、私がそれについて発言するたびに、いつもこんな答えが返ってきた。「たしかに理想的な立場だが、きちがい沙汰だ」

かくもアルピニズムとクライミングスポーツはさまざまであり、かくも目的はさまざまであり、かくも主張はさまざまである！　クライミングスポーツ問題の解決は登山全般にとっては無価値かもしれず、そのことをわれわれはみんな知っている。トーテンキルヒル西壁を登ってこの有名な山の第2テラスへ至ろうと、どこか別の登路で至ろうと、両者の間に一般的な相違はなく、質的な相違があるだけである。しかしアルピニストの立場からすると、これらの登路の大部分は無価値であり、理想的ではない。理想とする登路はアルピニズムにとって、困難性がより大きい場合もあれば、逆により小さい場合もある。この両方の立場から、なんらかの問題の解決に価値があるとすれば、独力で、人工補助具を使わずに登ることである。これが私にはアルピニズムにおいてもクライミングスポーツにおいても最高の原則だと思われるので、ここで人工補助具について論じてみたい。

旧時代の山行で携行した梯子や、ヴィンクラーの投げ縄などの補助具は、いまでは失笑を誘うだけである。しかし現代の登山家が、ザイルが岩角に引っかかって固定するまで38回も投げ上げ、それを伝って登るとしたら、その大胆さ、エ

ネルギー、ねばり強さは驚嘆すべきものであろう。どこに違いがあるのか？　私は安全確保された岩登りに反対するつもりはさらさらない。ものを考える登山家なら、今日の山と自然を愛する膨大な人びとのために安全確保が有する価値を、否認する者はいない。すこし別のことを私は考えている。要約すると、私は打ち込まれたハーケンによる確保を、多くの場合は確保そのものを、懸垂下降を、その他しばしば登高を可能にし、あるいは少なくとも登高に使われるザイル技巧を、人工補助具の使用とみなし、アルピニストの立場からまったく異議のないもの、正当なものとは認めない。

懸垂下降！　「下れないところは上るな」――登山の立場はこう私に言う。「自力で困難を克服する、上りも下りも」、これが誠実な、スポーツ的な信条の基本的前提である。下降もフリーでやれるという自覚のない登高は、軽率であり、非アルピニズム的である。不平等な武器で行われる闘いは、騎士道に反し、スポーツ精神に反する。たしかにいかなるアルピニストも、いかなるクライマーも――わたしはこの相違をもって、一人の人間が両方を兼ねることはできないと言うつもりはない――懸垂下降はできなければならない。それは緊急時の救済手段である。天候の急激な悪化や日が暮れたときの、事故の後や道に迷ったときの。しかしカンパニーレ・ディ・ヴァル・モンタナイアを縦断しても、その縦断がザイルなしでは不可能なら、私には大して価値があるとは思えない。ヴァヨレットトュルメの六つの岩塔をすべて乗り越えても、そのために80メートルにわたる空中旅行をしなければならないとしたら、私には無意味だと思われる。マルモラーダ南壁、あるいはヴィンクラートゥルムやデラゴトゥルム、あるいはシュミットチムニーやコプフテルル稜を下降しても、すべての困難をザイルにぶらさがって克服するとしたら、そこに下降の価値があるだろうか？　登高において上からのザイルにすがるのは禁じ手である。登高にとって正当とされることは、下降にとっても正当であるべきである！　フリーで登っても、フリーで下らなければ、山から処女性は奪えない――その逆も！　そうは言っても懸垂下降をしたことがあるすべての人びとを侮辱するのではないことを、ここではっきり言っておきたい。私自身もかつてはやっていたから。

同じことはハーケンにも当てはまると、私には思われる。ホールドとしてハーケンを使うことを正当化できないことは強調するまでもない。では一般コースでのワイヤーロープによる安全確保と、岩場での5メートルごとに打ちこまれたハーケンを使う3重ザイル〔シェーレンジッヘルのことか？　平井〕の安全確保との相違はどこにあるのか？　そ

んなごまかしで壁を登ったとしても、私には感激の価値も業績の価値も理解できない。私自身も町工場と金物店をポケットじゅうに詰めこんで天を衝く壁を「征服」しようとしたことがある。さいわいこれは頓挫して、いまでは、記憶にまちがいがなければ、あのときの自分の企てがスポーツとしてまったくアンフェアであったことを自覚している。（最近のある山行報告にこんな記述があった。「道はほとんどまっすぐ通じていて、22 のハーケンが目印になるので、コースをまちがえることはない」!!）

きわめて奇妙な「クライミング場」がザイルとハーケンの補助で「造成」されている。そこの滑らかな壁を往き来する人びとは、山じゅうをザイル技巧で登っていて（トレ・デル・ディアヴォロ、ググリア・エドモンド・デ・アミシス。もっともそういう「登攀」は当事者自身によっても充分に価値のあるものとはみなされていない！）、ハーケンに結んだシュリンゲをホールドあるいは「平衡維持器」として使っている。しかし経験は、これらの岩場の多くがフリーで登れることを教えている。かれらがそうしないのは、同等の能力がないからなのか。ハーケンもひとつの応急手段であるが、山を征服する手段であってはならない。私は現代登山にある程度まで付きものの危険にたいする愛好を弁護するつもりはない。とはいえ私としては、「落ちたら3メートルほどザイルにぶら下がる」という考えよりは、「落ちれば死ぬ」という感情のほうが倫理的価値は高いと思う。3重ザイルやジャンピング・シーツのような完全な安全確保がなければ急な壁を登るつもりがないのなら、山に行かずに体操場で腕試しをしていればよい。安全確保がなければ登れないのなら、――登山とスポーツの観点から――、そもそも登ることは許されない。私の考えでは、ザイルのトップとして克服することが許される困難と危険は、単独でも同じ感覚で克服しうる困難と危険に限られる。

とはいえ私はザイルの使用を全面的に批難するつもりはさらさらない。私はこの近代登山の最も重要な補助具の悪口を言うつもりはないし、そんなことはできない。しかし私には、最近はザイルがあまりにも濫用されているように思われる。だれを「ザイルのセカンド」として山へ連れていくか、どんなに大胆な技巧がトップによって演じられるか、それはまったく別にしても。場合によっては、最も危険な瞬間に二人のクライマーがザイルでしっかり結ばれていることに固執するのは、非倫理的で賢明でないこともある！　たしかに正しく計画された登攀でそんな場合が生じることはないはずであるが、われわれ登山家は偶然にたいして不死身ではなく、例外的な状況で例外的なケースに陥りかねない

ことは、残念ながら経験から知っている。私の考えでは、トップが難所にあり、セカンドが確保するにはまったく不適切な悪所にあるとき、後者がザイルの結合を解いて、トップに繋がるザイルをできるだけしっかりと手で確保することもありうる。これは人間性と理性の掟ではなかろうか。維持しうる命は維持しなければならないこと、墜落の場合に忠実な戦友愛という理想主義から友を破滅に巻き込むのは無意味で無法であることは別にしても、この措置は少なくとも悪所における不安定な確保をすこしでも向上させることに寄与する！　われわれのだれもが、どんなに利他主義者であっても、自分の命の心配は、少なくとも下意識において一定の役割を演じている。友が墜落した場合に数珠つなぎで落ちてはならないという感情によって、セカンドはきわめて堅固な平静心をもって力と注意力をありうべき墜落の阻止に注ぐことができる。悪所のため、トップが事故を起こしたら、ものすごい荷重を身に受けて、なすすべもなく岩にしがみつくしかないと考えるよりも！　どれほど多くの二重墜落がこの原則の適切な適用によって避けられることであろうか?!　ザイルによる確保には重要な役割があるが、ザイル確保とハーケンに依拠してすべてを敢行し、遂行するのは賢明でなく、不当であり、不純である！　ザイルによるトップの安全確保は安心感をもたらすものであっても、登攀を可能にする唯一至高の手段であってはならない。「独力」を自認する権利があるのは、この原則にのっとって登山ができる者だけだと、私には思われる。山に登って下りてくる「こと」だけでなく、「いかにして」も重要である。繋駕レースで馬がギャロップすれば、不純な走法として失格する。理性のない動物にわれわれは純粋な様式を無理やり教え込む。理性のある登山家はすべてを許されるのか？　アルピニズムの様式とクライミングスポーツの様式はすべてのアルピニストとクライマーにたいする要求であり、それが実現すれば、すべての攻撃はおのずから止むであろう。

私はこのコメントによって実現不可能なことを要求しているわけではさらさらない。多くの悪習がしかっり定着しているので、一挙に根絶することはできない。私はいくつかのことを示唆しているだけであり、それが積極的に受け入れられるのは、来たるべき世代を待たなければならないかもしれない。

私がめざしているのは、過去の時代とはかけはなれた、あまりにも過激で超モダンなクライミング技術だと非難されるだろう。私はそれをあっさり認めたくはない。今日では登り方は種々さまざまかもしれないが、根本思想は同じだと、私には思われる。私は自分の見解によって、むしろ衰退しつつある純粋な様式の

アルピニズムへの回帰を実行するのだと思っている。そのアルピニズムの堅固な土壌の上に、私は身も心も立っていると信じている。

本書には、このプロイスの論考にたいする4人の登山家の批判と、それにたいするプロイスの反論が収められており、当時の「ハーケン論争」のようすがよくわかります。この論争の過程でプロイスは、クライミングにかんする6箇条の原則を定めました。以下にそれを紹介します。

プロイスの原則

1．登山の対象は、自分が対抗できる相手でなく、自分が優位に立てる相手であるべきである。
2．クライマーが下降において安全に、かつ自信をもって克服できる困難の度合いは、当人が登高において遭遇する困難度の最高値を設定しなければならない。
3．人工補助具使用の正当性が生じるのは、直接的な危険が差し迫っている場合に限られる。
4．ハーケンは非常用の備えであり、登り方の基礎ではない。
5．ザイルは安心感をもたらすものであっても、けっして登山を可能にする唯一至高の手段であってはならない。
6．安全の原則は最高の原則に属する。しかしそれは、不自然な、人工補助具によって達成される非安全性の修正ではなく、個々のクライマーが自分の意志に対する自分の能力を正しく評価することに基づく、第一義的な安全である。

パウル・プロイス（1886年生まれ）が山で死んだ1913年は第一次世界大戦勃発の前年です。変な言い方ですが、登山家としてのプロイスはいいときに死んだのではないか。というのは、プロイスはユダヤ系だからです。第一次大戦後、ナチス政権の成立を待つまでもなく、ドイツ・オーストリア山岳会は「アーリア条項」によってユダヤ人を会から追放し、山小屋の使用を禁止して山からも締めだしました。この問題についても機会があればお話ししたいと思います。

目次

＝随　想＝

三方崩山　脱線記

大森雅宏　（昭和53年文）

5月の連休前半、山本・川野両君の56年理学部組に混ぜてもらって、県北扇の山に出かけてきました。好天・頂上からの眺望・貸切の避難小屋・薪ストーブ・小宴会、オマケで少し山スキー。楽しく過ごして帰宅。道具を片付けたところに山本君からメール。曰く「連休後半の予定がキャンセルになったので、どっか行きませんか」。当方も予定もなく「はいよ」と送信。

「岐阜の三方崩山って知ってますか。そこなんかどうですか」。この場合の「どうですか」は同意とか確認とかではなく既に決定通知。「まったく知りませんけどそこにしましょ」と送信。ネットで記録を探して一夜漬けの概念把握。

やり取りからナカ1日置いた夜、お迎えの山本号が。彼の家と私の住む団地はごく近い。直線距離なら2キロほど。間に中井久夫先生のお宅をはさんで垂水の端っこと須磨の端っこ。急な計画でも近くて便利。彼から山に誘ってもらえるのも、そのおかげでしょうか。品揃えはイマイチながら「近くて便利」、なんかコンビニみたいです。

さて、山本号。阪神・名神から東海北陸道を乗り継いで山のふもとへ。「三方崩山」知らなかったのは私だけではないと思うので以下ご紹介。

「三方崩山（さんぽうくずれやま）は、岐阜県大野郡白川村の両白山地の東部に位置する標高2,059mの山である。白山国立公園内にあり、ぎふ百山に選定されている」「山頂部から北東・南東・南西の三方向に赤茶けた大きな崩落地があることが、山名の由来である。1585年の白山大地震の際に、山頂部が大崩壊したものと考えられている。昔白山に住んでいた天狗の爪跡によるものであるという伝説もある」

（ウィキペディア）

山のふもと、道の駅「飛騨白川」にクルマを置かせてもらって行動開始。道の駅の向かいから林道に。てくてく。林道のどんつきから山道に。しばらくすると雪道に。てくてく。登山道をひたすら高みに。ただただ登る。単調にしんどい。近頃とみに足の運びが悪くなったように思う。個人情報保護法の施行を前にした平成17年の春頃から、登っているときに、「あ、今までとは違うワ」と思うことが多くなったような気がする。その頃は50前、今はもう少しで齢60に届こうかという頃で、まあ自然な成り行きですか。正常な衰え、と思いたい。

この日も遅れることしばしば。リー

ダー山本のザックを小さく見ながらへろへろと登る。衰えのひとつなんでしょう、バランスも悪くなった。

おととしの小窓尾根はそこそこ動けた様な気がするのになあ。ところが去年の 5 月、西穂西尾根の詰めの雪壁、アイゼンの調整不良があったとはいえ、なんでこんなに不安定な登り方しか出来ないのかとイヤになった。今回はあれより大分グレードが低いのに、天狗が削った爪あと上部の雪稜に、引けた腰でへろへろと。

三方崩山のてっぺんにようやく到着。夏道があるのはここまで。リーダー山本がこの時期ここに入りたかったのは、雪がないとこの先は進めないからだろう。山スキーの下見も目論んでいるかもしれない。

てっぺんで一息入れてその先、奥三方岳方向に。久しぶりの下り、その先をちょっと登り返したあたりで樹林を背にテントを張る。荷物を入れてほっとした頃から天候が悪化。風を交え強い雨脚に。この日の行動は約 8 時間。いつもは大抵 10 時間超えの行動だから本日は少々短め。計画書では大体 8 時間行動なのに毎回 10 時間行動になるのはなぜか、とリーダーに問えば、それはね歩くのが遅いから！ と斬って捨てられそうなのでこれは話題に出来ない。

夕食後も雨は続き、風も衰えず吹き続ける。シュラフの中、テントを打つ雨の音と風の音に、明日天気が悪かったら今日のルートをそのまま引き返すことになるか、などと考えながら眠りに就く。夜半バシバシと雨の吹き付けるテントから小用に出ると、あれ、曇っているが月が出ている。雨の音と思ったのは強風に飛ばされてテントに当たる氷の粒の音。これなら動けるかとシュラフに戻る。

翌日、朝食を済ませて風とガスの中を出発準備。どっちへ行くか。リーダー山本の「前に行きましょか」の声に奥三方岳方向に歩き始める。広い雪面、登りきると奥三方岳が近い。陽が少し射してブロッケンがでる。最近見たことがないのでちょっとはしゃぐ。

頂上からの眺めはなかなか雄大。白水湖の向こうに白山の東面台地が広がる。リーダー山本は、スキー行で一度は単独もう一度は浪川さんたちと出かけているので感慨ふかい様子。

ところで下降路。進みたい南側は切れている。もう少し西側に尾根を進むと降りられる斜面があるはず、と地図を見ながらリーダー山本。左の斜面、ココはどうかなと探りながら進むことしばらくで、上手い具合に雪が切れずに詰まっている崩落斜面を見つける。そこそこの斜面をざくざくと下る。

初めて来たのに上手に見つけるものと、いつもながら感心する。地図がアタマの中で３Ｄ化できるんだろうか。雪の量はどうやって推測するんだろう。ずっと以前、妙高の山スキーの下山時のこと、できるだけトラバスルートを

上手にとって、登り返しを少なくしたい場面で。リーダー山本がじっと地図をにらんで斜面に目を移して「見えますねえ」のヒトコト。何がと問うと、彼には進むべきルートが小径のように目に浮かんだそうです。あなたには見えないのかと訊ねられましたが、はい当然見えませんでした。

ハナシを奥三方岳に戻します。

回復した天候のもと、息をつめて先を急ぎ傾斜の落ち着くあたりの堆石にザックをおろす。振り返るとかなりの高度を一息で下りてきた。その先右岸からのデブリを越えて進むと雪がだんだん少なくなり、林道跡に出会う。沢にかかる橋から流れを見ていた山本リーダー、「釣りに行ってきていいですか」。この場合も「いいですか」は同意や確認ではなく既に決定の意思表示。当方用意の答えは「ハイどうぞ」。釣りは長引くと見て橋の欄干にテントとフライを干して、寝転んで木々と空を見上げる。何もしないのも結構贅沢な時間。かなりの時間、贅沢を楽しんでいると、サカナに縁なくリーダーのご帰還。荷物をまとめて出発。

雪のところどころ消えている廃道を今度は山菜を探しながらてくてく。コゴミ・フキノトウ、種類は少ないが量は豊富。枝線の林道跡から整備された太い林道に合流、ここからもてくてく。クルマをおいた道の駅から三方崩山・奥三方岳を経てぐるっと回っていることになる。

いい加減歩いた頃、沢筋を見ていた山本リーダー、「もう一度釣りに行ってきていいですか」に「ハイどうぞ」。引き続き贅沢な時間を楽しんだが根が貧乏性でソロソロ飽きてきた。昼寝から起きて林道脇を行ったりきたりしながら山菜探し。タラの芽が少し採れた。そうこうしているうちにリーダーも 30 センチを釣り上げて帰ってきた。

林道終点の登山口ゲートで荷を下ろして「お疲れさまでした」。欲張りリーダーの「最後にもう一度釣りに行ってきていいですか」に「ハイどうぞ、その間にクルマ回しておきましょか」とキーを預かる。この日は昼寝十分で昨日のへろへろから大分回復していたが、またてくてくと道の駅に。駐車だけでは義理が悪いのでみやげ物を購入、登山ゲートにクルマをまわす。

学生時代から長くは 40 年近くお付き合いいただく仲間がいること、休日は山にでも出かけようかなと思える環境にあること、へろへろながら山に行ける程度に健康であること、行ってらっしゃいと笑顔で送ってくれる家族がいること、アタリマエと思いがちですがどれも大切ですね。有難いことと改めて思います。

平成 24 年 5 月 4 日～5 日

山本恵昭　大森雅宏

＝会員短信　その1＝

2011年・秋の総会出欠はがきの近況欄

平井 一正(名誉会員)
元気にしています。

鈴木 敬吾(特別会員)
父の七回忌の準備で参加できません。申し訳ありませんが、皆様によろしくお伝え下さい。

赤松 二郎(旧14理)
１０月９日 １４時２５分 木曽福島着の列車で家内共々会合に参加しますので、当日の駒王宿泊２人分の手配お願い致します。昨年同様宜しくお願い致します。

鷲尾 顕(旧15文)
残念乍ら欠席します。

伊藤 文三(旧15文)
日常生活には支障なく動いていますが、遠出は無理でハンカンニンゲン【片足半分棺桶に突っ込む】です。

福井 實(旧17理)
お陰で元気に過ごしています。何年も前から「木曽駒の集会」に参らないと思っていましたが、やっと暇になった頃には年令の方が追いつかなくなって とうとう・・・・・パソコンの掲示板では毎々皆さんの様子を拝見してうらやましく思って居ます。集会の皆さんによろしくお伝え下さい。

伊藤 長次郎(旧21理)
ご無沙汰申し上げます。御蔭様で相変わらずに過ごして居ります。

伊藤 五介(旧24文修)
年相応に元気です。皆さんによろしく。

丸山 照夫(旧25文)
お返事遅れて申し訳ありません。実は圧迫骨折いたしましてコルセットをいたしましてあまり動く事を禁じられております。

小原 耕治(大31経)
酷暑にもめげずなんとか元気に過ごしております。会員諸兄に逢うのを楽しみにしております。幹事役 毎度の事乍らご苦労様ですがお世話になります。

砂川 彰雄(大32経)
今年もお世話になります。秋の例会で配布される山嶽寮が楽しみで、編集委

員の福田氏の大変なご尽力に感謝しつつ山に行けない無りょうを慰めています。特にホームページ掲示板の活発な情報には、他の運動部には無い素晴らしい活動だと思います。ベルグハイル!!

行友 利安(大32経)

地域社会の雑用が多く忙殺させられています。年会費が滞納していると思います。何年頃まで支払っているかわからず9月末までに3年分振り込みます。

雨宮 宏光(大33経)

お世話ありがとうございます。

鈴木 頼正(大33経)

お世話になります。最近は一緒にゴルフしたり、山にハイキングに行ったり、又飲みに行く友人が少なくなりました。範囲を広げてがんばっています。秋の集会にもっと若い人も参加して下さい。駒王で皆様との再会を楽しみにしています。

麻畠 重彦(大33経)

何時もご案内を頂き有難う御座います。この度は法要と重なり失礼いたしますが、世の中に「春には花が咲き 秋には紅葉 常に天地は変わらぬ経を読む」天男・事割・理・地震・台風の日々。このスーパーコンピュター(世界一)の時代だからこそ、自分の運命を変える事の出来る摩訶不思議の世界宗教が有ると思惟、感謝の日々があります。お会いできず残念ですが皆様のご健勝をお祈りしています。合掌

田辺 潤(大34経)

残念ながら、9月30日より11月1日まで丸1カ月のオーストリア一周旅行に行っており秋の集会は初めての(?)欠席です。当時の学友二人と50年の友情50周年の記念集会もやる予定です。諸兄によろしく。

ガチャ

芦田 匡平(大35理)

アカン!また、お願い致します。
皆様に宜しく!

伊丹 弘忠(大35経)

幹事さんいつもお世話になります。
元気にしておりますが、先約があり欠席します。

鳥居 威男(大35経)

六甲山の麓に向けて毎日約1時間散歩 お陰で今のところ健在。10日に3回は外出に心掛け、月3回のスケッチにも参加。しかし絵の上達は今ひとつです。

越田 和男(大 36 理)

１０月にカナダへ行く予定あり今年は欠席です。ご盛会を祈ります。１月にサハラ・６月にタクラマカンの二大砂漠で砂遊びしてきました。

伊藤 久三郎(大 36 経)

毎日病院通いを続けております。皆様によろしくお伝えください。

牧野 宏(大 36 経)

ちょい悪親爺(老父)と腕白孫とに連日振り回されています。

廣瀬 健三(大 36 経)

御蔭様で体力はあまり落ちてませんが、目が老眼と乱視で下りの段差でメッポウ弱くハードな山行きは止めて、JAC の「ゆるやか山行」に毎月参加しています。(日常的にはテニスを楽しんでいます。もう一歩腕前を上げたく色々トライ中)

藤安 賢一(大 36 経)

ハイキング気分でさぞ楽しい事でしょう。気分だけ参加したつもりで過ごします。

大関 和夫(大 37 経)

３/１１の地震の後、山や海の様子が変わりました。家の裏山でカブト虫がたくさん取れ、海岸には釣り人がいません。地引網もこの夏はさびしものでした。孫達のキャンプも人が少なかったようです。

二谷 和成(大 38 経)

いつもお世話になります。年々足腰が弱ってますが相変わらず月２～３日近くの山を歩いています。

飯田 進(大 38 経)

元気にしております。今回残念ながら欠席です。皆様方に宜しく。

森本 全彦(大 39 法)

ご案内いただきありがとうございます。１０月１０日学区の運動会で前回より準備にかりだされております。古希７０才を迎え、体力の衰えはどうする事も出来ませんが、若い方に誘われ山に行ったり、海に行ったりと元気にやっております。

福田 信三(大 39 理)

毎年この時期は他用にて参加できません。ご盛会をお祈りいたします。渡り鳥のように暑いときは寒い南半球へ移動しています。長時間の飛行機が不可の時は北海道と沖縄に変えてます。

武田 雄三(大39経)

いつも乍らの、段取りや手配に多謝。楽しみにしております。手伝う事あれば何なりと(送迎も含め)協力します。

伊丹 徳行(大40法)

幹事様ご苦労様です。6月2週かけて北海道(江差 養老牛温泉増毛)から青森・岩手・宮城と廻ってきました。津波の跡は大変でした。南海・東南海の地震が起きた場合の津波対策を検討中。やはりダメでしょうね。地震が起きないことを願っています。

安井 正(大40経)

いつもながら世話役ありがとう。

水渡 清夫(大40営)

スキーは面白くてここ数年毎シーズン先輩方のプランに参加。3月カナダ・ウィスラーから戻った後は、地震・計画停電・放射能・・・でどこにも行かず、夏山の大台ケ原・大峰行きも直前にギックリ腰で不参加。今年の酷暑に早々と夏負け状態です。特段の病気はありませんが、足腰は弱くなりました。歩かないかんと思っています。

塩路 晃二郎(大40営)

所用のため欠席します。

奥山 正紀(大40法)

可も無く不可も無く過ごしています。

柏 敏明(大41経)

幹事の皆様には色々とお世話を頂きありがとうございます。夏に登った大峰・大台の山々が台風で被害を受けたとの事。大過のないことを祈っています。今年も所用の為、残念ながら欠席させて頂きます。ご出席の皆様のご健康とご盛会をお祈りいたします。

井上 徹(大41営)

ここ伊豆大室高原はすっかり秋めいてきました。窓から入ってくる風にそれを感じます。毎月一回のペースで伊豆半島の最高峰万三郎岳に散歩を兼ねて登るようにしています。往復4時間の行程は老いた体には適当です。7月にはスイスアルプスを散策してきました。

森岡 宏光(大43理)

幹事様ご苦労様です。今年の3月に前立腺切除手術後泊まりの旅行等は控えていました。今は体調も問題ないので秋の紅葉登山を11月頃に計画中です。

國分 廣昭(大43経)

今年は何も起こらなければ参加いたします。宜しくお願いします。

赤田 正和(大44理)

10/7～8 高知・11～12大分出張で時間とれません。皆様によろしくお伝え下さい。先日 9/18 岸和田だんじり祭りに柏・浪川・森本先輩達とご一緒いたしました。岸田は祭りの役員で多忙のため会えずでした。新宮方面の被災は大変なものでした。

矢吹 操(大45理)

元気でおります。義母の介護に時間を取られています。

南里 章二(大45理)

例年通り、学校行事と重なり欠席で申し訳ありません。山嶽寮に私の高校山岳部時代の同期の佐野方則君がリタイヤ後のエネルギッシュなヒマラヤトレッキング活動の報告を寄稿してくれました。同期の元気な活動は嬉しい限りです。

井上 知三(大48文)

昨年よりハイキングを始めました。まず六甲山・武奈ケ岳・剣尾山・釈迦岳、先日は湖南アルプスの太神山・矢筈ケ岳とぼちぼち歩くようにしています。新緑・初夏・紅葉の山歩きが少しずつ楽しくなってきました。秋の集会前には森本・石原両先輩と恵那山に行く予定です。これからも機会を見つけて山行きを楽しみたいと思っています。

平井 幹男(大50文)

ご無沙汰しています。山本君や大森・川野君の山の記録にまだまだ老いて取り残されてたまるかと、トレーニングを強化しようと頑張っています。秋の山行き又山本君さそって下さい。

村田 信一(大50経)

お元気でしょうか？今年は夏山に行きそびれてしまいました。家内の旧友が白馬でペンションを始めたので、夫婦で訪ねてみました。八方尾根からの白馬三山を眺めて説明していると「その嬉しそうな顔付きでいつもいて欲しい」と注文を戴いてしまいました。相当喜んでいた様です。ご盛況をお祈りいたします。

中澤 章浩(大51文)

暑い毎日が続きますが皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。今年は勝手を重ねております。仕事の役が回って参りまして日頃何も考えずに過ごしていた分、四苦八苦しております。当日は例祭の真最中の為、欠席致します。

渋谷 一正(大51営)

今年定年です。

松下 哲夫(大 52 理)

7月に定年退職しました。7月に北海道【トムラウシ山】9月に北アルプス【穂高～針ノ木峠】と山歩きを楽しんでいます。体力に少し問題を感じてはおります。

大森 雅宏(大 53 文)

少し背伸びしたら 60 歳に手が届く年齢になりました。検診で引っかかる項目はほとんどないのですが、だんだん下り坂です。「キレイに老いる」を目指します。

要 裕晶(大 55 営)

いつもお誘いありがとうございます。先約のため欠席させていただきます。盛会を祈念しております。

山本 恵昭(大 56 理)

9月の連休は大阪大学のお手伝いで放射性物質の調査のため、富士山に登ります。甲南大学生物学科の同期生で大阪大学医学部に勤めている友人からの依頼です。山を通じて手色々な世界につながりが広がっている今日この頃です。

川野 幸彦(大 56 理)

いつも御連絡いただきありがとうございます。元気でやっています。この夏は仕事が忙しくてどこへも登らずでした。また、宴会等がありましたらお誘い下さい。皆様によろしくお伝えください。盛会となりますように！

八木 健(大 58 経)

毎回御案内ありがとうございます。久々に荒地山から入って有馬迄歩いてきました。有馬で風呂に入った後に飲んだビールは旨かったです。いつか皆様と御一緒できるよう体力をつけておきます。

東 哲也(大 59 理)

引越して約1年が経ちます。山は年5～6回の山行きにとどまっています。その分ヨット・シーカヤック・ダイビングと外に出かけることは増えた様に思います。気がつくともう５０才。体をいたわる事も気にしなくてはいけない歳です。

松成 健(大 H8 文)

諸事情により、アストラゼネカ㈱を９月１５日付で退社する事になりました。これから再就職に向けて就活します。早く就職先が決まると良いなと考えております。ストレスが掛る毎日ですが、これを機会に体重減になればと思っています。

中井 久夫(新高 27)

１６年前の震災の経験を生かして県

と県こころのケアセンターの仕事が現地で高く評価されています。（8/3発表会を行いました）こういう事は報道されないので一言する次第。「こころのケアセンター」の名をシャラクサイと思う人もおられるのは知ってますが、たいていの名称はすでに使われていて、大阪のこころのケアセンターも時としてコケセンになり苦肉の産物です。私自身は脚を痛めて歩行訓練中。あしからず

北方 龍一(新高 30)

神経痛も１年半を経過し歩行は可能になりましたが、糖尿病もあり無理ができません。５月にミヤンマーに行ってきましたが少々悪化。相変わらず県の太陽光発電の仕事もやっています。残念ながら今回は欠席します。

竹原 佑爾(新高 33)

元気でいます。皆様に宜しくお伝え下さい。

山城 國暉(新高 36)

元気にしています。皆様によろしくお伝え下さい。

永島孝男(新高 37)

「秋の集会」のご盛会をお祈り申し上げます。

川村 静治(新高 40)

７月に鳥海山と月山に登ってきました。現役の時以来初めて簡易アイゼンを付けて雪渓を登り下りしました。８月は北八ヶ岳の高見石まで家内と二人で登りました。

白川 浩平(新高 H2)

今秋よりミクロネシア・ポナペ島へ家族で移住する事になりました。向こうでは農園とレストランを手伝うことになっています。又近況お知らせいたします。

目次

＝会員短信　その２＝

2012年・春の総会出欠はがきの近況欄

平井 一正(名誉会員)

最近はあまり活動はしていません。昨年の赤牛岳につづき、今年は南アルプスに行く予定です。でも８０才になった今、全てを慎重にしないといけないのでしんどい話です。

鷲尾 顕(旧15文)

残念乍ら出席できません。

小川 守正(旧17理)

８９才までは元気だったのですが、９０才の声を聞いた途端にしんどくなりました。そんなことで夜の会合はしばらく遠慮です。会の増々の発展と会員諸君の健康を祈ります。【秋の集会には何とか元気回復して出席したいと思ってます】

伊藤 長次郎(旧21理)

山登りの機会も少なくなりました。ロックガーデンの慰霊祭 故伊藤 文三 氏の為に参加したいと思っています。

小原 耕治(大31経)

昨年秋に体調悪くしましたが健康取り戻しました。再出発の気持で頑張ります。

砂川 彰雄(大32経)

総会・慰霊祭のご案内有難うございます。４月第４週に来客の予定があり申し訳ありませんが欠席致します。山へ行き気力も体力も無くなって来ましたが、極力歩くことに励んでいます。盛会をお祈り致します。

宮本 侑(大32経)

元気にしております。

行友 利安(大32経)

地域の雑用が多く欠席ばかりで失礼しております。

雨宮 宏光(大33経)

慰霊祭、出席は腰痛次第、当日調子良ければ参加します。昨年末、安比で痛めつけられた腰が全治せぬままスキー続けてます。スキーをつけると腰痛がなくなるのですが、家に居ると鈍痛があります。

麻畠 重彦(大33経)

何時もご案内を頂きまして感謝申し上げます。土曜日曜と真如苑の法要

が有りまして、誠に申し訳ありませんが失礼致します。関係諸霊のご冥福をお祈りさせて頂きます。 合掌

鈴木 頼正(大33経)

元気です。総会・慰霊祭は土曜日(21日)～22日(日曜日)にかけて東京にて結婚式の為欠席します。

田辺 潤(大34経)

この２月で５０年来の会社勤めを終えました。と言っても自身のＰＣが会社にある間は、イヤでも会社に行ってメールの受発信をしなければなりません。言い訳がましいですが、会社に行く理由にしております。それで、家と高遠にＰＣを置く予定です。

芦田 匡平(大35理)

小腸が詰まって入院、昨日退院。これからはチョーツマラン生活を心掛けてゆきたいと思っています。

鳥居 威男(大35経)

元気にしておりますが、寄る年誠で六甲山登山が手ごろとなりました。

藤安 賢一(大36経)

現在、要介護Ⅱにてヘルパーさんのお世話になっております。体調不良につき欠席させていただきます。病に次ぐ病で往生してしまいたいと思っています。

越田 和男(大36 理)

腰痛との長い付き合いです。登山・スキーはあきらめてもっぱら山歩きのみ。但し、温泉と酒つきです。最近山や探検もののノンフィクションで若い優れた書き手が現れ、たのもしく思っています。石川直樹・角幡唯介・服部文祥・小林尚礼 などなど・・・いいですね。

廣瀬 健三(大36経)

先日、琵琶湖畔の某学園のセミナーハウスに一泊しました。(テニスの集い)ロケーション良好、雪を冠った伊吹山と真近に迫る残雪の比良山の眺めも結構なもので大満足の日々でした。

牧野 宏(大36経)

慰霊祭欠席します。(ヘルニア手術直前に予定の為)

大関 和夫(大37経)

山仲間の先輩の皆様はお元気で、あまり年とったという実感は有りませんでしたが、左目が不自由になり、おとなしくしています。庭で花と親しんでいます。シャクナゲやチューリップが咲き始めました。

飯田 進(大38経)

元気にしておりますが、いよいよ後期高齢者に突入です。この五月に大枚６３００円払って２回目の運転免許の講習会があります。これ腹が立ちますね。ご出席の皆様によろしく。

二谷 和成(大38経)

元気にしていますが、最近歩くのも遅くなり老人仲間と六甲山中心に近郊の低山を月に１～２回徘徊してます。

森本 全彦(大39法)

元気にやっております。１年ぶりにスキーをやりました。おもしろかったです。美田さまや、柏ブさまの訃報を聞きさびしくなります。足の丈夫な間に登ってない山に行こうとがんばっております。

武田 雄三(大39経)

元気にしておりますが、年々山歩きは辛くなってきました。渓流釣りとスキーでゴマカシています。毎度の事乍ら、幹事役の皆さんに多謝。

福田 信三(大39理)

可もなく不可もなく生きています。教会の墓地約５００区画のお世話をしています。日本人のお墓への思いは様々で社会の縮図を見ているようで興味深いです。皆様にお会い出来るのが楽しみです。

奥山 正紀(大40法)

足が弱くなり歩くのに自信がありません。欠席します。

鵜木 洋(大40文)

皆さんの様子を山嶽寮で読むのを楽しみにしています。

安井 正(大40経)

世話役ありがとうございます。

柏 敏明(大41経)

いつもお世話を頂き有難うございます。３月は格安航空ピーチでニセコへスキーに行ってきました。往復１万円弱で値打ちがありました。４月は前半 天草・鹿児島、後半 対馬列島のクルージングを予定しておりますので、残念ながら総会・慰霊祭とも出席できません。ご盛会をお祈りいたします。

森岡 宏光(大43理)

幹事さんいつもご苦労様です。H23/３/１１東日本大震災時入院中でしたが、今は元気に働いています。今年は旅行・登山にと又復活します。まず初めに大関宅にてお花見 4/7(土)から開始したいと思います。

國分 廣昭(大 43 文)

雪見会で久しぶりに雪山を見て来ました。来年はスキーをするつもりです。

南里 章二(大 45 理)

定年まであと１年となりました。春はダージリンに旅し、昔 飛行機の上から見たカンチェンジュンガを麓から眺めてみたいと思っています。

矢吹 操(大 45 理)

いつも連絡いただき有難うございます。健康維持で始めたジョギング。フルを目標としていましたが、仕事や義母の介護などで、土・日の走りも少なくなりました。４２ｋｍなんて、とてもとてもという次第です。とにかく元気です。

井上 知三(大 48 文)

皆様のご協力で事務を担当して早いもので１０年が経過いたしました。何かと気を使ったりする事もありますが、もう少し頑張ってやってみようと思います。昨年よりぼつぼつハイキングを始めました。皆様、近郊の山に行く予定がありましたら是非誘って下さい。

平井 幹男(大 50 文)

昨年はタケノ子堀・茸取と冬の来る前に楽しく山本君や大森君と山に入ることが出来ました。今年もまた春から秋まで山に入ってリフレッシュして老化防止にがんばりたいです。

村田 信一(大 50 経)

ホームページ楽しく拝見しています。自分の体力に合った山に毎年出掛けるようにしています。今年は未定ですがホームページは参考になります。

高橋 けいこ(大 50 文)

いつもお世話になりありがとうございます。まだ膝の調子がよくありません。膝の筋肉を鍛えて来年こそは慰霊祭に参加し、横山さんの奥様にお会いしたいです。

大柳 香代子(大 51 法)

２０１１年は個人としても激動の年になりました。

中澤 章浩(大 51 文)

ご案内ありがとうございます。今年こそ登山したかったのですが、２２日は会計監査が入りました。総会には出席できますので、久し振りに皆様のお元気なお顔を拝見したいと思います。

松下 哲夫(大 52 理)

昨年秋に、右膝を痛め膝の改善努力中です。再就職先を毎日駅より２０分間早足で歩いております。

大森 雅宏(大 53 文)

ご案内ありがとうございます。すいません今年も欠席します。年会費は振込か会計に手渡しで納めておきます。

要 裕晶(大 55 営)

先約のため欠席させていただきます。物故会員の方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに盛会を祈念しております。

川野 幸彦(大 56 理)

ご無沙汰しております。皆様お元気ですか？いつも連絡頂きありがとうございます。私は何かと元気でやっております。この５月は独りで五竜岳へでも登ろうかと考えています。皆様のより一層のご活躍をお祈りしております。

八木 健(大 58 経)

毎回ご準備とご案内ありがとうございます。慰霊祭だけでも参加したいと思っています。盛会を祈念申し上げます。皆様によろしくお伝え下さい。

東 哲也(大 59 理)

姫路の海に近い所に新たな居構えました。海も山もまだ自然が多く残っている所です。会社の若い友人に誘われて２・3 年程前から山スキーを始めました。その機動力には驚きですが、エンジンとなる私の体力とテクニックがそれを半減させている様です。

住所変更：

松成 健(大 H8 文)

３月２４日に引越致します。堺市から和泉市で神戸には少し遠くなってしまいますが、慰霊祭には参加します。昨年７年間勤務した アストラゼネカ㈱を退職し現在メルクセローノ㈱に転職しまして、抗がん剤である分子標的薬の仕事に携わる事が出来ました。全く経験の無い領域で勉強の毎日です。

住所変更：

平井 吉夫(新高 7)

ＫＡＣの掲示板をいつも見ています。こんなに素晴らしいＯＢ団体はちょっとないですね。いま「福島原発行動隊」というのをやっています。ＨＰで見てください。よろしければご

支援を。

北方 龍一(新高 30)

相変わらず太陽光発電のボランティアで兵庫県の手伝いをしています。皆様によろしく御伝え下さい。

竹原 佑爾(新高 33)

元気でおります。皆様に宜しくお伝え下さい。

山城 國暉(新高 36)

所用のため欠席させていただきます。皆様によろしくお伝え下さい。

川村 静治(新高 40)

秋の集会後、旅行といえば房総半島を一周したくらいで、あとはゴルフに行ったくらいです。

福田 裕久(新高 45)

赤いチャンチャンコと同時に孫に恵まれておじいチャンになりました。山の方はさっぱりですが、犬たちの散歩に毎日いそしんでいます。

前田 和也(新高 53)

遠方ですので欠席させていいただきます。仕事先等多数被災しましたが、私は多少落ち付いてなんとかやってます。

ご遺族のみなさん

横山 嘉壽子

いつもご案内ありがとうございます。娘と二人出席したいと思います。

本田 依子

いつも御案内ありがとうございます。義兄の３回忌に当たりますので残念ながら欠席します。どうぞ皆様お元気で晴天を祈っております。

乾 恵美子

年々体力が落ちてきておりますが、よろしくお願いいたします。

伊藤 寿子

慰霊祭へのお誘いありがとうございます。私自身は麓で待つ事になりますが娘 文子は皆様と一緒に登りたいと申しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

柏木 彩太子

物故会員の慰霊祭にご案内頂きありがとうございます。１７才の孫が当日お世話になります。

目次

＝報告＝

2011年　秋の集会

木曾文化公園内宿泊施設　「駒王」
長野県木曽郡日義村 木曾駒高原
2011年(平成23年)10月9日(日)～10日(月)

参加者

番号	氏　名	卒業/学部	番号	氏　名	卒業/学部
①	赤松 二郎	旧制14理	⑯	米山 悦朗	新高29年
②	奥様		⑰	川村 静治	新高40年
③	砂川 彰雄	大32年/経	⑱		
④	雨宮 宏光	大33年/経	⑲		
⑤	鈴木 頼正	大33年/経	⑳		
⑥	鳥居 威男	大35年/経	①		
⑦	田中 孜	大36年/経	②		
⑧	武田 雄三	大39年/経	③		
⑨	安井 正	大40年/経	④		
⑩	塩崎 将美	大41年/経	⑤		
⑪	國分 廣昭	大43年/経	⑥		
⑫	石原 浩二	大44年/理	⑦		
⑬	井上 知三	大48年/文	⑧		
⑭	渋谷 一正	大51年/営	⑨		
⑮	松下 哲夫	大52年/理	⑩		

❒10月9日(日曜日)　午後4時～5時　受　付
午後6時～　夕食・懇親会

❒10月10日(月曜日)　午前7時30分～　朝食
午前8時30分～　記念撮影
部歌斉唱　【山の歌】

解散

目次

＝報告＝

2012年　春の総会

甲南学園 平生記念館 ｾﾐﾅｰﾎｰﾙ

神戸市　東灘区

２０１２年 【平成24年】 4月21日（土曜日）

参　加　者

No.	氏名	卒業年度	No.	氏名	卒業年度
1	鈴木 敬吾	特別会員	15	安井 正	大40年経
2	小原 耕治	大31年経	16	國分 廣昭	大43年経
3	雨宮 宏光	大33年経	17	石原 浩二	大44年理
4	田辺 潤	大34年経	18	南里 章二	大45年理
5	鳥居 威男	大35年経	19	井上 知三	大48年文
6	芦田 匡平	大35年理	20	平井 幹男	大50年文
7	越田 和男	大36年理	21	高橋 けい子	大50年文
8	田中 孜	大36年経	22	渋谷 一正	大51年営
9	牧野 宏	大36年経	23	中澤 章浩	大51年文
10	廣瀬 健三	大36年経	24	山本 恵昭	大56年理
11	二谷 和成	大38年経	25	川村 静治	新高S40年
12	武田 雄三	大39年経			
13	福田 信三	大39年理			
14	村上 与利一	大39年営			

平成２４年度 山岳会総会 次第

司会　福田 信三

１．会長挨拶　　武田 雄三

２．平成23年度 事業報告

１）慰霊祭　　石原 浩二
２）木曽福島 集会　　井上 知三
３）山嶽寮　　福田 信三
４）大学山岳部の現状　　武田 雄三
５）中高山岳部の現状　　南里 章二
６）会計報告　　山本 恵昭

３．平成２４年度 事業予定

１）慰霊祭　　石原 浩二
２）木曽福島 集会　　渋谷 一正
３）山嶽寮発行　　福田 信三

４．検討並びに報告事項　　武田 雄三

総　会　終　了

５．懇親会　　司会　安井 正

１）乾杯
２）会食
３）部歌「山の歌」斉唱

閉　　会

平成23年度 会計報告

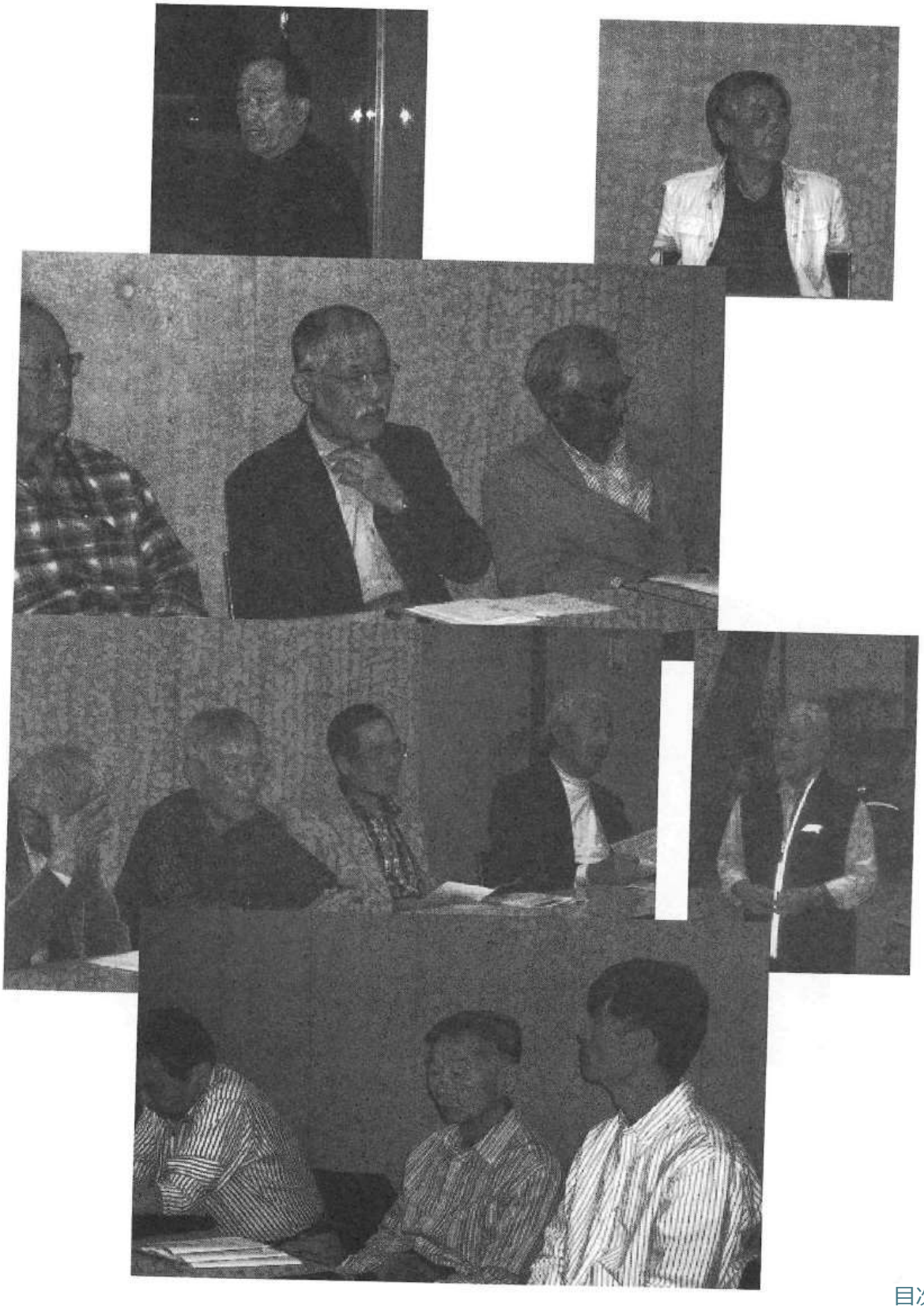
平成 24 年 3 月 31 日

【収支決算表】

【貸借対照表】

上記のとおり報告します

会計担当 山本恵昭



目次

＝報告＝

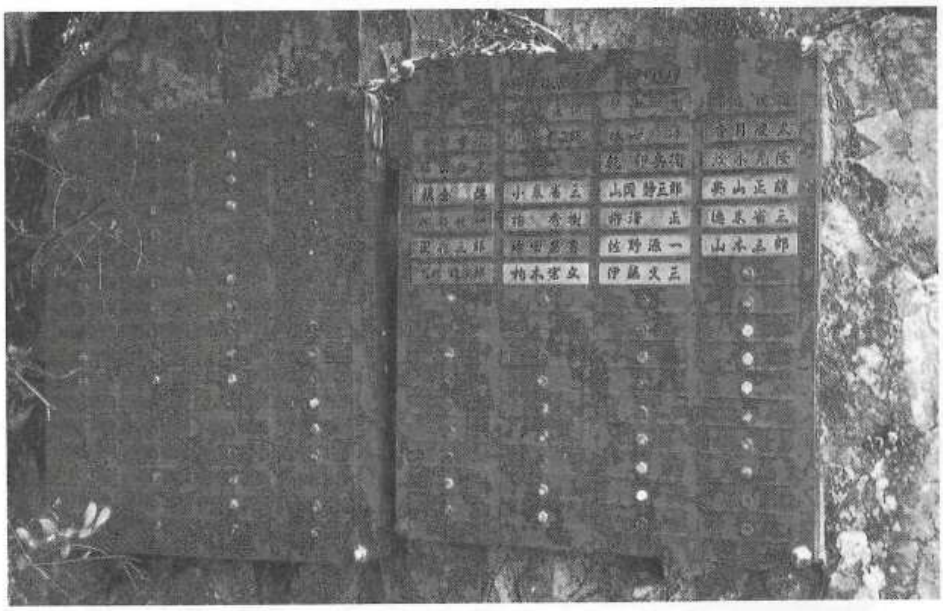
2012年　慰 霊 祭

＝残念ながら開催日は大雨との情報により中止となりました。＝

❑ 本年度物故者の方々
故 伊藤 文三 様 【旧15文】故 美田 靖夫 様 【大S35経】
故 柏木 宏文 様 【大37経】

❑ 慰霊祭 予定
月　　日：　4月22日【日曜日】
集合時刻：　午前１０時
集合場所：　阪急芦屋川駅　北側広場

石原浩二さん撮影」(2012/04/26)



目次

編 集 後 記

わが甲南山岳会会員もやはり高齢化へ進んでいるのでしょう。山行に相応しい原稿が少なくなりました。しかし、年齢に沿った軽登山、観光を兼ねたトレッキングが増えてきたことは理にかなったものといえます。ただ、山行、紀行の区別がつけ難く当誌の区分けに反論も出るやもしれません。また、わざわざ原稿を書くのではなく、メモ代わりに掲示板にアップしておくというのも時代に沿ったものと言えるのでしょう。やはり、「山嶽寮」という大きな看板が気になることも事実です。

さて、事務局井上さんが作ってくださる会員短信のページ、塩崎さんが管理しておられるホームページからの転載も今や無くてはならない記事ねたとなりました。お二人にお礼申し上げます。最後に、甲南中高生の報告は部員が少なく受験時期とも重なり行動なし、との報告が神戸さんからありました。

最後に、次号６８号に向けての原稿をよろしくお願い致します。

原稿送付先：福田信三

TEL.　　Email:

山 嶽 寮　第67号
甲南山岳会
神戸市東灘区岡本 8-9-1 甲南大学内
2012年（平成24年）10月
編集人：福田信三　　印刷：カツヤマ印刷

目次